
COBALT-SERIES
前田珠子
聖石の使徒
狩人の覚悟
集英社

COBALT-SERIES

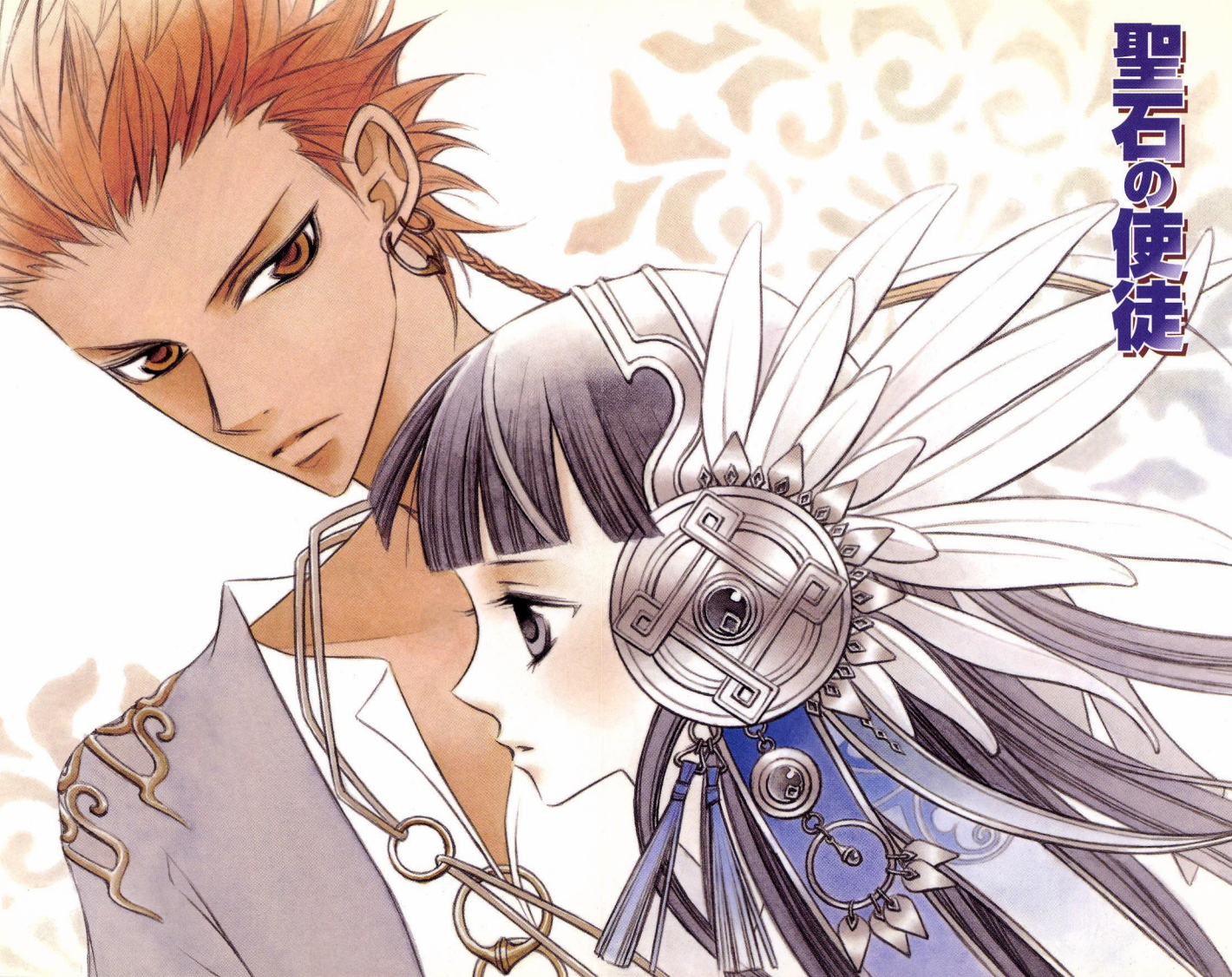
聖石の使徒

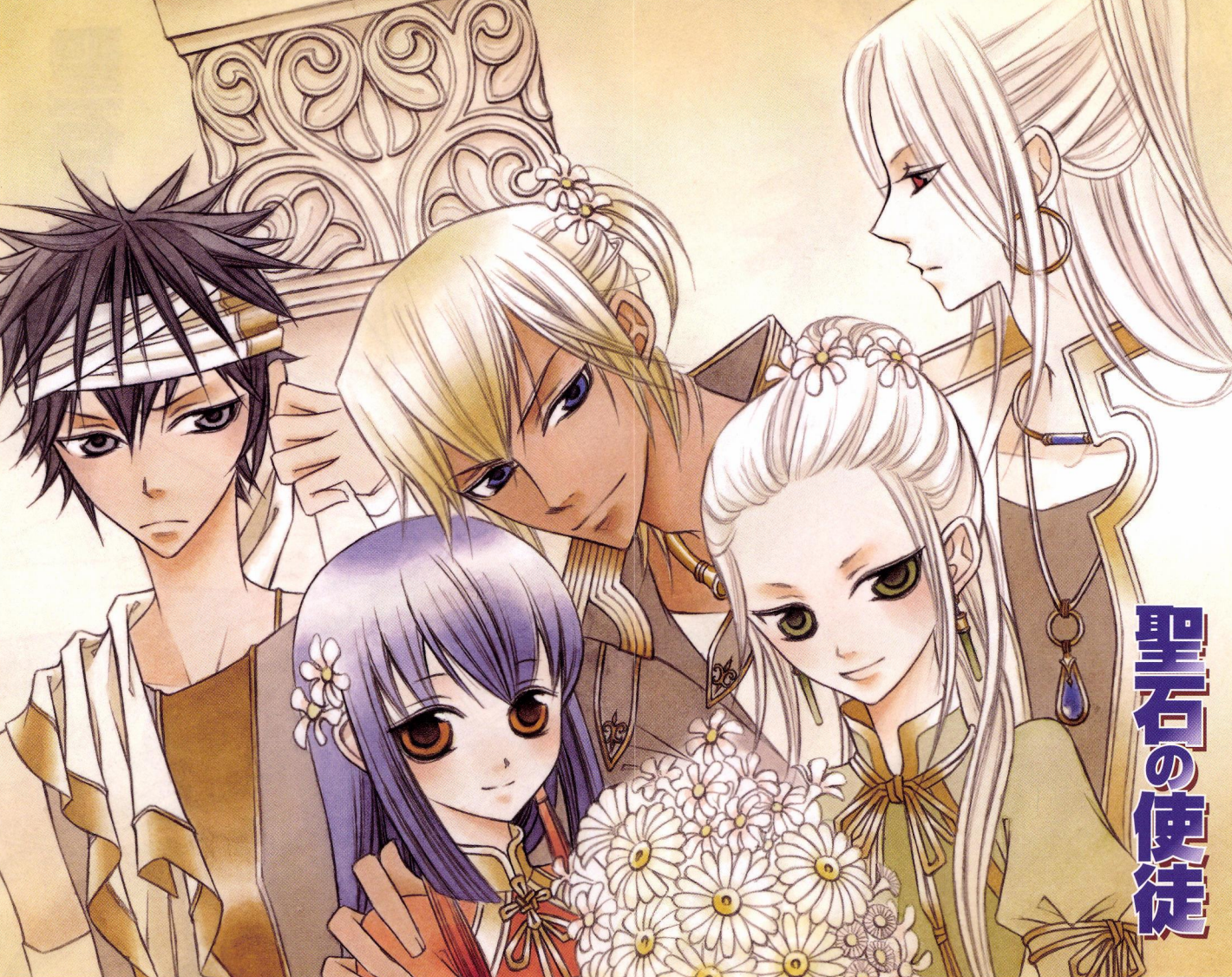
狩人の覚悟

前田珠子



集英社


聖石の使徒


聖石の使徒



COBALT-SERIES

聖石の使徒

狩人の覚悟

前田珠子

集英社

目　次

聖石の使徒
狩人の覚悟
狩人の覚悟……13
次元間宅配便騒動……177
あとがき……206

聖石の使徒

これまでのあらすじ

万能の至高神セイトーリによって創造された世界、バルヴァローズ。この世界に生じた瘴気を浄化するため女神は眠りにつき、その眠りを守るため、聖石の使徒は誕生した。『聖石の子供』と呼ばれる使徒候補の子供たちはみな、聖石を抱いて生まれ、おのおの不思議な能力を持っていた。意識を集中させることで持って生まれた聖石と同じ石を生み出したり、その石を用いて薬湯を作ることができた彼らは、能力を使いこなす教育を受けるため、一定年齢に達すると最寄りの神殿内における『学校』に入ることになっていた。

石墨を抱いて生まれたアークは『聖石の子供』だったが、いつも失敗ばかり。しかしある日、優等生のミイノとともに副神殿長に呼

ばれ、瘴の女神を目覚めを妨げるために、珊瑚の使徒（セイとカーラ）の手伝いをするよう命じられる。劣等生の自分がなぜそんな重要な任務についたのか、釈然としなかったアークだったが、喪月神にさらわれ生死の境目に追い込まれた時、無意識に凄まじい力を発揮し、その潜在能力を明らかにする。その後、アークは力を制御する方法を学ぶため、カーラたちのもとで修行を続けることになる。

今回は、そんなアークの師匠、カーラとセイの過去の物語。

あまりに篤い水の加護を受け性が未分化だったカーラは、瘴気を宿しやすい体質のせいで神殿に閉じ込められていた。やっと見つかった相棒セイも、辛い過去ゆえにカーラにコンビ解散を告げる。しかし「あなたでなければ」と懇願するカーラに、「女にならないと約束するなら組んでもいい」とセイは答えたのだった……。

聖石の使徒■登場人物紹介



セイタマール（セイ）
血赤珊瑚を抱いて生まれてきた聖石の使徒。伽羅の相棒。

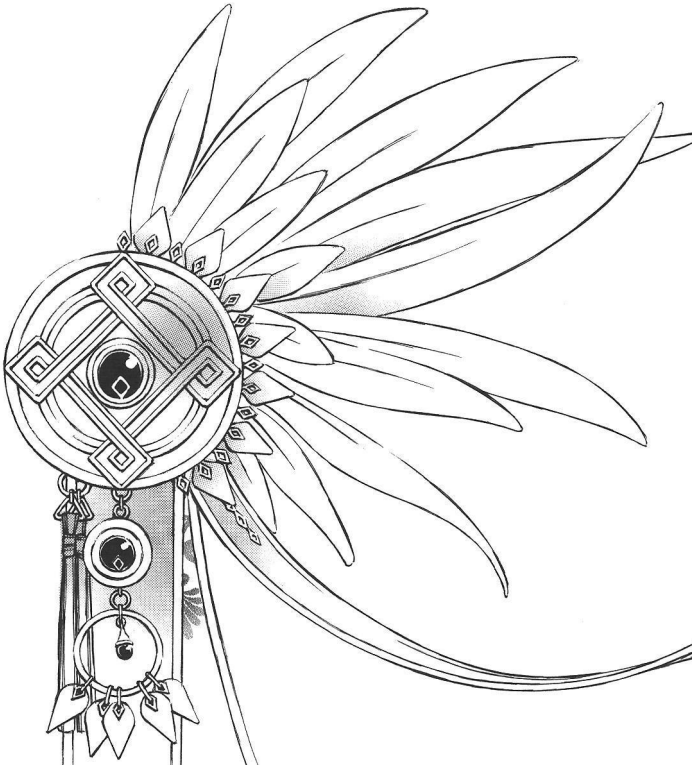
伽羅（カーラ）
黒珊瑚を抱いて生まれた聖石の子供。女性にならないことを条件に、セイタマールとコンビを組んでいたが…。

イーダルド
行方知れずの兄貴分を探している。怪我をしていたところをセイタマールに助けられた。


ガネルオージェ（ガネル）
稀有な存在である金剛石の子供。師匠である青玉の使徒に絶対的な信頼を寄せていたのだが、ある事件をきっかけに破門を言い渡されている。
ソラミイノ（ミイノ）
砂金水晶の子供。アラクセイトの同級生で親友。兄を捜すため、家を出て旅をしている。
アラクセイト（アーク）
石墨の子供で、火神の加護を受けたイイタールの娘。自分の能力を完全に制御するため、日々努力しているが…。

イラスト／山本鳥尾

狩人の覚悟



プロローグ

その朝――いや、正確に言うならばまだ曙光も届かぬ明け方のこと。

緋芭大陸中最大規模を誇る芭蕉国王都にある地　神神殿の一室……自らに与えられた私室の寝台の上で、伽羅は大きすぎる衝撃に蒼白になっていた。

長年過ごしてきたその部屋を使うのは、実のところ久しぶりのことだ。

なぜなら伽羅はこの二年というもの、活動拠点を芭蕉から大陸最南に位置する那八に移していたからだ。

活動とは、生まれながらに聖石を抱いて来た者が持つ特殊能力を生かしての瘴気絡みの問題解決である。

その内容の詳細は後述するとして、伽羅はそうした活動が無条件に許される『使徒名』を持たぬというのに、相棒とともに各地で起こる問題の活動を許された存在だった。

それは伽羅自身の実力だけではなく、相棒である青年の特異すぎる能力あってのことだ。

セイタマール――燃えるような赤銅の髪と褐色の肌を持つ屈強な体格を誇る青年は、世界を蝕む瘴気を一刀両断してしまえる特殊な剣の使い手なのである。

そんな彼と組むことになり、この二年というもの、伽羅は祖国を離れた土地――那八で、芭蕉では味わえない自由な空気を吸いながら働いてきた。

今回芭蕉のアスカニーリ神殿からの呼び出しに祖国に戻ることにはなったけれど、それはあくまで一時帰国であり、すぐに那八に戻るつもりだったのだ。

それで全てはうまくいくはずだったというのに――これは何という運命の悪戯か。

伽羅は自らに起こった異状に、呆然とするしかなかった。

「どうしよう……」

伽羅は固く目を瞑り、悲痛な声を上げた。

予想もしていなかった事態ではなかっただけに、伽羅の絶望は大きい。

そう……それは充分に起こり得ることのひとつではあったのだ。

なのになぜ、伽羅がこうも悲嘆に暮れているのかといえば――。

「……なら、組んでやると言ってくれたのに」

二年前、ようやく口説き落とした相棒の出した唯一の条件から、今回の件で自分が外れることになってしまうせいだ。

「あんなに念じたのに……あんなに言い聞かせたのに……どうして、こんなことになってしまうんだ……」

がっくりと肩を落とし、寝台に身を沈めた伽羅は、しかししばしして後がばりと身を起こした。

その漆黒の双眸は、諦めるということを知らぬ不屈の輝きに満ちていた。

もともと諦めの悪い性格をしている上に、その性質はこの二年で確実に向上していた。伽羅は自らの望みを躊躇うことなく優先した上で、どうすれば相手を言いくるめ……もとい説得できるかに頭を巡らせかかったのである。

だが、しかし——いかに稀少な資質に恵まれ、さらに貴重な体験を積んできたとはいえ、伽羅はまだ十六歳に過ぎなかった。

絶対的に経験値が足りない子供だという認識を持つ伽羅は、この後すぐに行動した。

自分にはない経験をたっぷり保有する人物のもとへ、いかにして現在組んでいる相棒との縁を維持すべきかを相談するために駆け込んだのである……。

※

同日夕刻――那八の王都のアスカニーリ神殿では、神官長であるオサラディーンが、一通の書簡を手にため息をついていた。

書簡の送り主は大陸最大の版図を誇る芭蕉の地神神殿の副神官長――シイレートルの署名がある。記された日付は何と本日のものだ――風霊に直接配達を頼んだのに違いない。そうした非常手段を用いて届けられた書簡の内容が尋常なものであるはずもなく……何事にも動じることを知らぬと言われるオサラディーンの顔を曇らせていた。

「どうして、また……このタイミングで……」

ふう、と息をつきながら、壮年期にある神官長はこめかみの辺りを指で解きほぐす。

脳裏に浮かぶのは、赤い髪の部下の青年の顔だった。今年十八になった血赤珊瑚の使徒は、現在相棒を迎えに芭蕉に向かう旅の途中だ。芭蕉における相棒の微妙な立場を知る彼は、きっと強行軍で進んでいることだろう。

（それでも……神殿に到着するのは明後日か明明後日……何とかそれまでに対処法が見つかればいいのだが……）

そうは思うが、あまり期待はできないと思うオサラディーンだった。

何しろ問題のふたりはふたりとも、とんでもない問題児なのだ。小さな火種を大火事に育てる名人でもある。なぜそんなふたりを組ませているのかといえば、両者の聖石の使徒としての

能力がずば抜けており、しかも力の相性が良いためだ。

現にこの二年間に、彼らは大惨事に発展しかけていた瘴気がらみの事件を五件も解決している。息を合わせて事に当たれば、最強のコンビなのだ。

しかし――。

今回の事態はその関係を根底から覆しかねない。

ただでさえ、華奢な外見をしているのだ、問題のコンビの片割れは。それが……となると、心に癒えぬ傷を抱える青年は、まず間違いなくコンビの解消を考えるに違いないのだ。

（二年前は、伽羅の粘り勝ちだったが、さて今回も口説き落とすことができるかどうか……）

二年前以上に、今回伽羅の分は悪い。

「それでも決して諦めはしないのだろうが……ね」

不屈の魂を儚げな肉体の内に抱える黒珊瑚の使徒の顔を思い浮かべながら、オサラディーンはくすりと笑った。

二年前、使徒としての義務を放棄していた部下の青年に、やる気を取り戻してくれたのはまだ十四だった伽羅だった。

今回もセイタマールを何としても口説き落とすつもりでいるに違いない。問題は、それを彼が耳に入れるかどうかだ……が。

「さて、伽羅にばかり頑張らせるのも可哀相だね。ここは良識ある大人として、少し手を貸してあげなくては……でないと、説得どころか弁解もさせてもらえないままに絶縁宣言されかねないようだし」

手元にペンを引き寄せ、オサラディーンは真っ白な便せんにすらすらと文字を走らせ始めた――セイタマールには悪いが、ふたりには是非ともコンビを継続してもらいたいというのが自分とシイレートルの共通した見解である以上、伽羅の味方をすることに何の躊躇もありはしなかった。

書き上げた手紙に封蠟すると、オサラディーンは窓辺に近寄り窓を開けた。封書とともに、その手には小粒の菫青石――聖石の子供石だ――が握られていた。

通り過ぎる風に向かって、オサラディーンは気安く声をかけた。

「やあ、少し頼まれ事をしてくれないかな？　もちろんただとは言わないよ……」

風霊が好む聖石の子供石をかざしながら、彼もまた精霊に郵便配達を頼むのだった。

宛名はセイタマール――那八へ戻る途中に、ちょっとした調査を命じる内容は、勿論伽羅に対する援護に外ならなかった。

どうせ不器用で無自覚な伽羅が、そうそう長く相棒を誤魔化しきれないことは目に見えており、ことが露見すればセイタマールが態度を硬化させるのも確定事項だ。下手をすれば、セイ

タマールは一言も口をきかぬままで那八に帰還するかもしれない。

それではあまりに伽羅が哀れすぎるというものだ。

だから、オサラディーンは本当に少しばかりの力添えをするつもりで、セイタマールへの手紙を書いたのだ。

そう……この時は。

1

初春の南芭街道を北上する一団があった。

南芭街道とは大陸最大の王国芭蕉の王都卯昆と南部諸国を結ぶ大街道だ。

緋芭大陸のほぼ中央に位置する芭蕉から東西南北に延びた街道にはすべて芭蕉のどちらかの文字が入っており、人々は「芭蕉の四大道」と呼んでいる。

年間を通してこの四街道から人が途切れることはないが、今の季節は特に人の移動が多い。冬が終わったということもあるが、半月後に芭蕉の地神神殿で春の大祭が執り行われるからである。

芭蕉は大陸の内陸部に位置しながら、実のところ最も水の恵み多き国として知られており、水に係わる聖石の使徒を数多く抱えているのだ。春の大祭は、芭蕉の神殿に属する聖石の使徒たちが全員集い、大陸全土の豊饒を祈る荘厳な儀式でもある。

それは芭蕉こそが緋芭の主なのだという傲慢な主張とも受け取れるわけだが、大祭が失敗し

た年に限って各地を洪水や干魃の被害が襲ったことを考えれば、誰しも大祭の成功を祈りたくもなるというものだ。

さらに、大祭にあたっては普段は神殿でもなかなか手に入らない稀少な聖石の子供石が特別に頒布されるというのも、人々が芭蕉に集う理由となっている。その一方で、街中で小粒の守り石が無料で配られるというのもこの大祭の特色であり——要は富める者も貧しき者も、大祭中の芭蕉でしか手に入らない……もしくはもらえない守り石を目当てに卯昆を目指すのだ。

セイタマールはじりじりする思いを嚙みしめながら、そんな芭蕉を目指す一団のなかにいた。正直なところ、徒歩で移動するしかない貧しい集団など追い越して、さっさと卯昆に向かいたいのだが、そうもいかない事情があった。

その事情というのは、いつの間にか彼のそばにひっついて離れなくなった小汚い子供の姿をしていた。

今も早足になりかけるセイタマールの袖を後ろから引っ張って、「なあ、なあ兄ちゃん！」としつこく話しかけている。

「なんだ」

と答えれば、返ってくるのはどうでもいいような話ばかりで、正直鬱陶しい。

だからと言って無視すれば、意地になって声を張りあげ、ついには癇癪を爆発させて周囲か

ら非難の眼差しを買い集めてくれる。
全くもってありがたくない押しかけ同行者だ。
（何でこんなのを拾ってしまったんだ……）
そう思った途端、セイタマールは苦虫を噛み潰したような顔になった。
いつもであれば、その役回りは自分ではなくひ弱な外見の相棒が担っていることを思い出したからだ。
二年前、半ば強引に相棒の座に居座った黒髪の子供は、長いこと神殿の外の世界を知らずに生きて来た世間知らずのくせに、なぜか子供によく受けた。いや、あまりにも純粋培養の箱入りである相棒を、世間ずれしたはずの子供たちが放っておけずに世話を焼くために集まったというところが正確か……。
伽羅という神聖真名を与えられた芭蕉の地神神殿の秘蔵っ子は、とにかく危なかしいの一言に尽きる存在だった。
瘴気にはとことん敏感で、そのせいですぐに体調を崩す。世間知らずも筋金入りで財布など渡しておけばものの半刻でスられてしまう。自分の……黒髪黒瞳の世間的には立派に美貌と呼ばれる顔にも無頓着。本人がどれだけ気づいているかは不明だが、自分や伽羅が世話するつもりで拾った子供に世話を焼かれたおかげで貞操の危機を免れたこと実に両手両足の指の数でも

足らないというのは厳然たる事実である。

そのくせ、傷ついている子供や弱っている子供を見つけると放っておけないというのだから……そばにいるセイタマールにとっては悪癖以外の何物でもない。しかし、最近では伽羅に世話を焼かれた子供たちは、結局あの無自覚無頓着な相棒を助けることが多いという集計結果から、口出しは控えるようになっていたのだが……まさか。

いつの間にか、伽羅が声をかけそうな子供を無意識に見つけたあげく、自分が声をかけるようになっていたとは……明らかに想定外の出来事だった。

この子供にしたところで、最初はただの薄汚いガキとしか認識していなかったのだ。

「おい、兄ちゃんってば！」

しつこい子供が苛立たしげに声を荒らげた。

このまま無視するのは簡単だが、そうなると子供が癇癪を起こすのは確実に思えた——そうなるとまた「いい大人が子供相手に……」とでも言いたげな視線の集中砲火が襲ってくる。

（なんて、面倒なんだ……）

傍若無人な子供相手に、笑顔を保持できる母親を筆頭とする大人と呼ばれる人種は偉い。

文句なしに尊敬できる——そんなことを思いながら、小汚く小うるさい子供をじろりと睨みつけてやると、なぜかその子供は嬉しそうににっと笑った。



不可解な反応に、「なんだ？」と尋ねたが子供は答えない。

「なーんでも。あのさ、兄ちゃん。あっちんとこの母ちゃんがさぁ、お月さまのせいで眩暈するんだって。なんで昼間なのにお月さまのせいなんだかわかんないんだけど……兄ちゃん、偉い聖石の使徒さまなんだろ？　ぱぱっとお月さまの呪いだかなんだか解いてあげること、できないか？」

ほら、おれの怪我を治してくれたみたいに――。

子供の無邪気な言葉に、しかしセイタマールは一瞬体が強ばるのを制することができなかった。

月の呪い――子供が意図せず指摘したものは、セイタマールの心に深く刺さった棘に直結していたのだ。

しかし、こんなことで子供に八つ当たりするほど、セイタマールも大人げなくはなかった。第一、子供の言わんとしているところは、彼らが恐れるものとは全く別のものだとわかっているのだ。

「あー、お月さまの……ね」

それ以上のことはさすがに口にできず、セイタマールは懐から革袋を取りだした。

中には那八の神殿の仲間からもらった聖石の子供石が入っている。

その内、小粒の柘榴石をつまみ上げ、手持ちの木椀に放り込む。気を加えて聖石の子供石から薬湯を作るなどセイタマールには簡単なことだ。

見る間に湯気を上げ始めた紅い薬湯の入った椀を子供に差し出し、セイタマールは「持って行ってやれ」とだけ告げた。

子供は初めて目にするわけでもあるまいに、石が薬湯に変わる奇跡に目を瞬かせながらこくこくと頷いた。

（……疲れる……）

薬湯の入った椀を手に、遠ざかっていく子供の背中を見つめながら、セイタマールは深く息をついた。

こういうのは全部、ひ弱な相棒の管轄のはずなのだ。

だのに、そいつがそばにいないものだから、こんな面倒なことになる。

（伽羅……）

今はそばにいない相棒の顔を思い浮かべながら、セイタマールはそっと目を閉じた。

（お前がいないと、おれの調子は狂いっぱなしだ……）

だからこそ、一刻も早く相棒を取り戻す必要がある。

そのためにはあんな足手まといの子供につきあっている暇はないのだが、その件に関しても

相棒の言動による影響があるらしく、なかなか思うようにいかない。

本来なら、明日あたりには芭蕉に入れるはずだったというのに、まだまだ道は遠い。

だが、それでも焦る気になれないのは、伽羅を芭蕉の神殿に預けるのが今回が最後だとわかっているからかもしれない。

今回の帰郷は、黒髪の相棒の籍を正式に芭蕉から抜き、那八のそれに移し替えるためのものだった。二年前には攫う形でしかかなわなかったことが、今回きちんと形を取ったものとなる。

だが、それがすんなりと通る保証はない。

伽羅を手放すまいとする勢力は、未だに芭蕉の神殿中に潜み隠れているのだから——。

それを思えば、伽羅を相棒とするほうがよほどに厄介で面倒だと感じてもおかしくないのだが——それに気づいていないわけではなかったが。

それでも。

消えかけていた心に火をつけてくれたのは、伽羅だったから——。

(迎えにいくさ)

たとえ、面倒事ばかり運んでくる子供であっても。

その時のセイタマールの思いに嘘はなかった。真実そう感じ、思っていた——思いがけない

事実が新たに姿を見せるまでは……彼は本当にそう思っていたのだ。
その時のことだ。
何かに呼ばれたような気がして空を見上げたセイタマールは、白い何かが緩やかに落ちてくるのに気づいた。
オサラディーンからの書簡だった――。

※

「イーダルド！」
突然大声で呼ばれ、セイタマールが用意した薬湯を気分の優れない女性に手渡したところだった子供は驚いた。
イーダルドとは確かに彼の名前であったが、聖石の使徒である青年――一見そうは見えないおっかない容姿の主だが――が口に出して呼んでくれたことはこれまで一度もなかったのだ。
（なんだろう？）
振り返ってみると、青年が来いとばかりに手招きしている。
これも初めてのことでイーダルドはますます驚いた。

（うわー、いっつも「あっち行け」って言わんばかりなのに……どうしたんだろ？）

イーダルドは鈍感な子供ではない。

青年が自分のことを面倒に感じ、しつこくつきまとう子供を厄介に思っていることぐらいは気づいていた。

それでもイーダルドにはどうしても聖石の使徒である青年について行かなければならない事情があり、だから知らぬ顔でまとわりついていたのだ——セイタマールが意外と面倒見がいいことは、初対面の時怪我していた自分の手当をしてくれた上、貴重な聖石の子供石を使った薬湯を作ってくれたことからも明らかだったので。

相手の人の良さにつけこむような真似をするのは気が引けたが、自分の周囲は誰も話を聞いてくれなかったのだから仕方ないのだと自分に言い聞かせてきた。大事なあのひとが消えたのに、みんな必死に探しているくせに、イーダルドの話には耳を傾けてくれないのだから。

（……ほんとは、使徒さまだっていうのなら、兄ちゃんに話してもよかったんだけど……）

セイタマールが使徒だと知った時、イーダルドは確かにそうしようと思ったのだ。

使徒の活動は国籍に左右されないということを、彼は消えたあのひとから教えてもらっていた……いつか、自分がもし選ばれたなら、世界のためにそんな風に各地を巡って働きたいんだ、と照れたように笑いながら、あのひとは言っていた。

「イーダルド！」
物思いに耽っていた子供は、再度自分を呼ぶ苛立たしげな声にはっと我に返った。
「すぐ行くから！」
慌てて叫び返すと、彼はたっ、と走り出した。
近づいて気づいたのは、赤い髪の青年がいつの間に受け取ったのか、手紙らしいものを手にして……それはもう不機嫌な空気をまき散らしていることだった。
（お、おっかない……そばに行きたくないー）
あの空気に触れるだけで、自分の気分までどんぞこに引きずり込まれてしまいそうだ。
心底それ以上進みたくないと思ったが、「早く来い」と言われれば従わないわけにはいかない。
おずおずと、イーダルドはセイタマールに歩み寄る。
「え、えーと、なに……？」
声が少しだけ震えたのは仕方がない、大人の男でも今の青年のそばで平気でいられるとは思えないのだから。
「イーダルド、確か消えたお前の兄は、聖石の子供だったな？」
あの狸、まさか千里眼か――と意味不明なことを呟きながらの問いに、子供はこくりと頷い

た。

「実の兄貴じゃなくて、小さい頃一緒の施設で育った兄貴分なんだけど……」

小さく貧しい施設のなかで、集められた子供たちは皆兄弟のように仲良く育った。

そのなかで、あのひとは特に強いわけでも頭がいいわけでもなかったけれど、不思議な暖かい空気と優しさで、自分を含めた年下の子供たちに慕われていた。

「七歳のとき、兄貴だけお母さんに呼ばれて……戻って来たら、神殿に入ることにしたって。兄貴は聖石の子供だから、それまでも不思議な力で怪我しても痛みを取ってくれたり、熱を下げたりしてくれてたけど、神殿で勉強すればもっといろんなことができるようになるからって。おれたちのために行くんだって言われたら、止めることなんかできなかった……」

神殿に入っても、あのひとは欠かさず手紙をくれた。

お母さんが「知っていて困ることじゃないから」と言って読み書きを教えてくれていたので、あのひとの手紙は自分で読めたし、返事を書くこともできた。

その内、あのひとの意識が自分たちだけでなく、もっと多くのひとに向けられるようになったのも気がついた。少し淋しかったけれど、やさしいあのひとらしいことだったので、やせ我慢して「頑張って」と手紙に書いた。

結局、あのひとは使徒になれるだけの資質には恵まれていなかったらしいけれど。

「それで、今から半年ぐらい前なんだけど、凄い人がいるって手紙が来たんだ。使徒にならなくてもあれなら自分にもできるかもしれないって。絶対弟子にしてもらうとか何とかものすごく興奮してるみたいで、兄貴らしくもなく文字が躍ってた。その直後なんだ、兄貴が神殿から姿を消したのは……だから、絶対その『凄い人』っていうのが何か知ってるに違いないって、おれ何度も言ったんだけど、みんな取り合ってくれないんだ。そんな曖昧な内容じゃ調べようがないって！」

話している内に、鼻の奥がつんと痛くなった。

目の前の青年の顔がなぜかぼやける——と思ったら、ずい、と大きな手巾を押しつけられ、ようやく自分が泣いているのだと気づいた。

「泣くな。まるでおれが泣かせたみたいじゃないか。迷惑だ」

仏頂面でそう告げられ、イーダルドは「ひでぇ」と呻いた。

あんなに優しかったあのひとが使徒に選ばれず、こんなに優しくない——悪人というわけではなさそうだが——青年がれっきとした使徒だなんて、何かが間違っていると思わずにはおれなかった。

が——。

続けられた言葉に、そんな思いは吹き飛んだ。

「仕方ない、調べられるだけは調べてやる。但し、調べるだけだ、解決までは望むなよ。おれが命じられたのは調査内容を地元の地神神殿に提出するところまでなんだからな」

聞いてすぐには、言葉の意味が理解できなかった。

「……調査……？」

それは、イーダルドが心底望むこととは違っていたけれど。

「……でも、何で急に……？」

イーダルドが洩らした素朴な疑問に、赤い髪の青年はふう、と大きく息をついた。

「命令書が来たんだよ。ここのところ何人か、聖石の子供の行方が知れなくなっているらしい……お前の兄貴がその件に関係してるかどうかはわからないが、単独ではなく複数となると事件性が考えられる。他国人でも使徒が出した報告書なら、役所も神殿も無視はできないだろうから、お前の兄貴についても調べ直すことになるだろう」

それは、必ずあのひとを見つけてくれるという約束ではなかったけれど……これまで誰も、調べようとすらしてくれなかったことを、セイタマールは申し出てくれたのだ。

「それでもいいなら、ついてこい。但し、おれは急ぐからお前の足にわざわざ合わせてはやらないぞ」

「……ついて来いって、どこに？　おれの街に戻るんじゃないの？」

てっきりこれから街に引き返すのだと思っていたイーダルドの問いに、セイタマールは仏頂面で、そのくせどこか照れたような顔で「その前に引き取らなければならないモノがあるんだよ」と答えた。

「だから、まず芭蕉に向かう。しかし……そうだな、なにもお前までつきあわせる必要はないか。途中の神殿に頼んでしばらくお前を預かってもらったほうが……」

いいか——と言いかける青年の言葉を、イーダルドは無理矢理遮った。

「行く！　一緒に行く！　兄ちゃんを疑うわけじゃないけど、いつまで待ってればいいのかわからないのは御免だし、せっかくだから芭蕉の大祭っての、見てみたい！」

着いていく本当の理由は別にあったが、イーダルドは賢明にもそのことには触れなかった。

おっかなくておっかなくておっかないこの青年が、あんな風に照れた顔を見せる相手とはどんな人なのか——引き取らなければならないモノが物でないことぐらいはわかるのだ——少しでも早く見てみたいのだ……などと口に出そうものなら、セイタマールの機嫌がまたしても降下するのは目に見えている。

沈黙は銀、なのである。

2

セイタマールとイーダルドのふたりが芭蕉の王都卯昆に到着したのは、春の大祭が開幕する実に三日前のことだった。

セイタマールとしては、予想以上にかかった日数に正直なところ舌打ちのひとつも打ちたいところだったが、街中を満たす歓喜と大祭への期待感で浮かれた空気に、これはこれで好都合かもしれないと思い直した。

卯昆の春の大祭は、国を挙げての大行事なのだ。

王家も神殿も有力者たちも、まずは大祭の成功を優先する。

この浮き足だった空気の中であれば、相棒の身柄を無事に芭蕉の外に連れ出すのも容易かもしれない……。ならば、躍起になって急いで来るより、イーダルドの足に合わせて——それでも無理をさせてしまった自覚はあるが——の移動はかえって良かったのかもしれない。

そんなことを思いながら、セイタマールはまず地神（アスカニーリ）神殿を目指した。聖石の使徒を統括す

る地神神殿は、聖石の子供に関する保護施設も抱えており、その情報網は国境を超越して機能しているのだ。

那八のオサラディーンが知っている聖石の子供たちの失跡の件を、芭蕉の神殿が知らぬはずがない。そこにイーダルドを連れて行き、彼の兄貴分が姿を消したことを訴えさせるのが目的だった。

自分もひと通りイーダルドから話は聞いたものの、引っかかるものを確かに感じた。生憎相棒とは違い、相手から情報を引き出すことを得手としていない自分でも気づいたのだから、そうしたことを専門とする神殿の調査員なら、より有益な情報をあの子供から引き出せるに違いないと考えてのことだった。

もちろん、それだけが目的ではなかったが——ある意味目くらましになってくれるイーダルドの存在はセイタマールにとってありがたいものだったのだ。

「なるほど」

イーダルドの、時に脈絡がなくなる話をひと通り聞いた神官は——素晴らしい忍耐強さだと、セイタマールが感嘆していることを知ってか知らずか——彼を別室に誘った。

「君の話は確かに聞くに値するね。耳を貸さなかった神官や役人たちは能力を疑われても仕方ないところだ。そこで、だ、イーダルドくん。大変すまないが、先ほどの話をもう一度、もっ

と詳しくわたしの仲間たちにも話してくれないだろうか？」

そう言われ、別室に連れて行かれそうになった子供は一瞬、不安そうにセイタマールに目を向けてきたが、大丈夫だと頷いて見せると小さく頷いて歩き出した。

これは予定通りのことだった。

セイタマールは事前に副神官長であるシイレートルに話を通していたのだ。イーダルドから話を聞き出すのはその部下だとわかっているから不安もない。

そして――。

「しばらくお待ちください」

と、ひとり取り残された格好になったセイタマールは、しかしすぐに意外な場所から別の場所へと案内されることとなったのだ。

ゆったりしたソファの座り心地は申し分なかったが、さすがに背後の壁が隠し扉になっており、そこから迎えが来たときには全身の肌が粟だった。

腰の剣を抜かなかったのは、偏にそこから殺気や害意が感じ取れなかったからだ。ひとかけらでも感じたなら、セイタマールは問答無用でソファごと一刀両断していた自信が――自慢できないが――ある。

（神殿のくせに、どんなからくり屋敷なんだ!?）

気持ち悪さを必死に堪え、セイタマールは案内人のあとをついて歩き出した。
もう少しの辛抱だった。
この壁の間を走る閉塞感溢れる通路の先には、久方ぶりに会う相棒がいるのだと、この時セイタマールは信じて疑っていなかった。
そうして……そうなれば、あのうるさい子供の面倒は相棒に押しつけられる、自分は楽になれるのだと――。
彼は確信していたのだ。
だから、期待や確信と事実が必ずしも一致するとは限らない事実にぶつかった時、人間というものが軽い――あるいは重い――衝撃を受けるということも。
この時の彼は想像もしていなかったのである。

「は……？」
我ながら間抜けな声だと、どこか冷静に判断する部分がある。
だが、実質的にセイタマールの頭脳で働いていた部分は限りなく少なかったと言えよう。

なぜなら、彼はほんの今、この神殿の副神官長であるシイレートルから告げられた言葉の意味が理解できなかったのだ。

案内されたのは——秘密通路を伝って辿り着いたとは思えない、春の陽光降り注ぐ玻璃でできた小部屋だった。

室内には上品な香りが満ちており、瀟洒なテーブルの前には以前一度会ったことのある——二年前のことだが——副神官長がにこにこと笑いながら座っていた。

それは……いい。

セイタマールにしても、それは想定内のことだった。だからそれはいい……というか構わなかったのだ。

しかし、問題はその部屋のどこを見回しても、黒髪のひ弱な相棒の姿が見あたらないということだった。

はっきり言って、それは大問題だった。

セイタマールが今回那八からこの芭蕉まで足を運んだのは、相棒である伽羅を正式にこの国から連れ出すためだった。

黒髪黒瞳の華奢な相棒は、厄介な星の下に生まれていた。

海の宮の年、海の宮の月、水の宮の日の水の宮の刻に、聖石を抱いて生まれた子供——篤す

ぎる水の加護の上、抱いて生まれてきた聖石さえもが水の属性の黒の珊瑚。

それは聖石の子供にとっては危険なことだ。

水神カンラタールは海神アイルトーリの息子――それゆえに両者は時に同一視される。水は海の子供であるため、水は海の影響を強く受ける。

そして、海は――他のなによりも強く、月の支配を受けるのだ。

そう……現在残されている月神サラムトーリだけではなく、かつて諍いと妬みの果てに、世界をも滅ぼしかねない毒を落とした三つ子の内のふたりの兄弟――シイムタールとサイサトールという喪月神のそれさえも！

憎悪のなかで命を絶たれた月神たちは、今も世界を毒で満たそうと執着のみの存在として世界のどこかに潜んでいる。

水の篤すぎる加護を持つ聖石の子供は、彼らにとっては傀儡とするに最高の資質を秘めた存在なのだ。

もしも彼らが喪月神の手に落ちれば、瘴気という名の毒を世界にまき散らすことになる。しかもそれが呼び水となり、眠り続けている瘴の女神――セイトーリを目覚めさせることにもなりかねない。

かつて、喪月神自身が吐き出した大量にして強力な瘴気――月瘴気を封じ、浄化を終えるま

で眠り続けることを選んだ至高の女神が、事半ばにして目覚めれば、世界は一瞬にして滅びるだろうと伝えられている。

伽羅はそうした危険性をも抱いて生まれてきた子供だった。

しかもその能力はずば抜けており、生まれてすぐに使徒名を用意されたほどの存在だったのだ……大陸最大規模を誇る卯昆の地神神殿の神官たちが、その稀有な資質と能力、そして危険性を憂慮せずにはいられなかったほどに。

二年前、伽羅は神官たちの保護という名の軟禁――彼らに言わせれば、外界に出さねば瘴気に触れることもなく、伽羅の安全を守れるということらしかったが、本人にとってそれは自由を奪われ、檻に閉じ込められるにも等しい――状態から解放されるために、最後の機会として那八を訪れ、自分と組んだ。

当時、過去の傷から立ち直れずにいた自分は、相当邪険に振る舞ったと思うのだが、伽羅は決してへこたれず、ついには――粘り勝ちで――自分の相棒の座を勝ち取った。

以来、伽羅は活動の拠点を那八の遊羽に移し、自分とふたりで各地を飛び回ってきた。瘴気がらみの事件を解決した数は十件を下らない。

伽羅は必死に、自らを神殿の内部に留めるより、外に放ったほうが世界にとっても神殿にとっても得策であることをその行動で示し続けてきたのだ。

その努力の甲斐と、伽羅を可愛がるシイレートルたちの働きもあって、卯昆の神殿は今回ようやく伽羅を手放す決定を下した――那八から自分を引き抜き、あくまでも伽羅を手放さずに活動させるという案もあったらしいが、これはシイレートルの強硬な反対と、オサラディーンの頑とした拒絶にあって廃案となった。

そうしたわけで、セイタマールは晴れて自由の身となった伽羅を迎えにやって来たのだ。神殿に保管されている伽羅が抱いて生まれてきたという聖石と、戸籍移動に関する書類をシイレートルから受け取り、本人と合流次第、即座に出発するという予定は、しかしこの場に不在の相棒のせいで実現できそうになかった。

（何があった……？）

伽羅の姿が見えないことに、セイタマールは疑問より先に焦燥を覚えた。

前述したような事情がある以上、神殿の決定に不満を覚える神官たちがいることは確実だ。伽羅がいくら有能であろうとも、その危険性ゆえに外界から隔離してしまおうとする一派が、この二年で消滅したとは考えられない。

「シイレートルさま……」

じわりじわりと、不吉な予感が胸を侵していくのを感じながら、セイタマールは目前の男性に問いかけた。

「あいつは……伽羅は、どこです？」

（まさか……）

過去、最悪の事態を目の当たりにしたことのあるセイタマールは、どうしても事態を楽観視するということができない。

悲観的になりすぎることが良くないとわかってはいても、万が一を考えずにはいられないのだ。

それは顔に出ていたのだろう、正面に座るシイレートルがふう、と息をついた。

「何を考えているかは想像がつくがね、セイタマールくん。君はもう少し視野を広げたほうがいい。そんなに何でもかんでも悪い方向に考えていたら、自縄自縛に陥って動けなくなってしまうよ。伽羅のことなら大丈夫だから……」

そう言われてもすぐにはセイタマールは安心できない。

相棒の無事な姿を目にしない限り、相手がシイレートルであろうと、言葉を鵜呑みにはできないのだ。

「では、伽羅はどこに……？」

問いを重ねた彼に、シイレートルは「あー」と間の抜けた声を上げながら、天井を見上げた……視線をあからさまに外している。

怪しいことこの上なかった。

「シイレートルさま」

声が、一段低くなる。

セイタマールは自分の上司が煮ても焼いても食えない狸であることを、それはもうよく承知していた。

そんな上司と対等に平然とつきあっていける目の前の伽羅の後見人が、噂通りの昼行灯などであるはずがないことも、二年前に認識済みだ。

今でこそ神殿に腰を落ち着けてはいるが、若いころは世界中を聖石の使徒として駆け巡っていたという卯昆の副神官長だ、体は相当丈夫にできているはず――ここで自分が実力行使に出たところで、簡単に壊れるほどヤワではないだろう……。

などと、かなり剣呑な計画を立て始めたことは、しかし早々に見抜かれた。

「セイタマールくん！　物騒なことは考えないように！　春の大祭の直前に神殿が壊れたりしたら大騒ぎになるじゃないか！」

別にそこまでのことをしようとは思ってませんが――と答えかけた赤い髪の青年は、しかしそれが相手の反撃も含めての被害を指しているのだということに気づき、呆然とした。

その内容ではなく、力で来られれば遠慮なく力で応戦すると答えるいい年をした男の大人げ

なさに、最早何を言っていいのかわからなくなったのだ。

「……シイレートルさま」

十瞬ぐらいの沈黙の後、相手の名を呼んだ声に、すでに力は宿っていなかった。

「不遜なことを考えたことは謝りますから、どうか伽羅の居場所を……せめて、いま伽羅がどうしているのかを教えてください」

目を離したが最後、何をしでかすかわからない相棒が、今どこで何をしているのか——考えるだけで胸がきりきり痛んで到底耐えられない。

ここで素直に頭を下げることで、その不安と焦燥から解放されるのなら、セイタマールにとってそんなことは屈辱でも何でもなかった。

もっとも——。

(狸とつきあえるのは、やはり狸かそれとも狐か……)

と思うことまでは止められなかったが。

そして、そんな考えもまた、相手には見抜かれたのだろう——シイレートルはにんまりと笑い「そうそう、何事も平和にいかなくてはね」と答えてきた。

「で、伽羅なんだけどね。本当に心配はいらないんだよ。子供連れの君が、こんなに早くここに来るとは正直思ってなかったものだから、ちょっと昔の伝手で頼まれたことをあの子に任せ

ることにしてね。君も気づいている通り、未だにあの子を自由にするのを止めたいと思っている輩は少なくないからね。神殿にいたら、いつそいつらがどんな手出しをしてくるかわからないだろう？　そんなわずらわしい事態を避ける意味も兼ねて、ちょっとあの子に頼まれてもらったんだよ」

あそこなら、少なくとも神殿の人間は表だって立ち入ることはできないからねえ――。

そうして、告げられた伽羅の居場所は、セイタマールが想像もしていなかったものであったのだ。

「は……？」

こうしてセイタマールは冒頭の間抜けな声を上げる羽目となったわけである……。

3

卯昆に歓楽街はいくつかある。

客層――あるいは価格帯――によって、似たような店が集まった結果、大まかに分けて三つのそうした区画が出来上がったのだ。

紅晶楼は高級歓楽街のなかでも一、二を争う品格を誇る青楼である。

華やかだが品のある調度が揃えられた店内には上品な香りが漂っている。香が焚かれているわけではない――毎夜焚かれる上質の香の香りが館全体に染みこんでいるせいで、正午を少し過ぎた店が閉まっている時間帯でも、香りが屋敷を包んでいるのだ。

紅晶楼の扉が開けられるのは夕刻である。

夜には店の女性たちは残らず生ける花として振る舞う。

だが、今は昼間だ――夜咲く花たちが人間の女性に戻る時間だった。

ある者は眠りに沈み、またある者は目覚めてしばしの気だるげな時を味わい、そしてまたあ

る者は来たる夜のための準備を入念に始める。
そんな紅晶楼の静かな廊下を、色っぽさのかけらもない颯爽とした足取りで進む少女の姿があった。
背の半ばまで届く真っ直ぐな黒髪は結われることなく背中に流されている。伎女としては貧相な部類に入るほっそりしすぎた体軀の主だが、一目見れば忘れられない清冽な美貌はこの店の住人として充分に相応しいものだった。
あと一年もすれば、匂い立つような花に育つに違いない——見る者全てにそう思わせる美少女が向かったのは、店一番の人気の花である『芙蓉』という銘を与えられた女性の部屋であった。
こつこつとノックすると、内側から柔らかい声が「お入り」と答えた。
「失礼します」
と一言かけて、少女は扉の奥に進んだ。
そこにはまさに芙蓉のような、艶やかさとたおやかさを併せ持つ、稀有なる女性が待っていた。
「カラ」
と、その女性が少女を呼んだ——。

華やかな色彩に溢れながら決して下品ではない建物を前にして、セイタマールははあ、と息をついた。

建物の門に掲げられた看板には『紅晶楼』とある。

シイレートルに因れば、卯昆一、二の名楼で、厳選された客しか足を踏み入れることは許されないらしい。

『だからね、安心していいから』

とはシイレートルの言だが、セイタマールとしては到底頷けるものではなかった。

いかに客を選ぶとは言っても、酒も出る店なのだ。華やかな花が溢れているとは言っても、顔だけ見れば、自分の相棒はかなり綺麗な部類に入る。

おまけに本人にその自覚は皆無ときている。生まれて以来十年以上、卯昆の神殿しか知らずに過ごしてきた伽羅は、自分の容姿が人目を惹くということの意味をまるでわかっていない。

邪な手が伸ばされる可能性を微塵も考えやしないのだ。

ともに仕事に出かけるようになって二年——目を離すとすぐに下心満載と顔に書いたような

輩に声をかけられ、しかもその危険性には全然気づかない伽羅を守るのに、どれほど苦労させられたことか……相棒が理解してくれる日が来るのかどうか、疑わしいところだ。

そんな伽羅が、よりにもよって娼館にいるのだと聞かされて、セイタマールが平気でいられるはずがなかった。どこで酔客に目をつけられるか知れたものではない。これは一刻も早く回収する必要がある、と彼が考えたのは当然のことだった。

シイレートルは「迎えをやるから」と言ってくれたが、その時間さえ惜しく、彼が取ってくれた宿――伽羅についてまだ不安視する者もいるから、神殿での宿泊は勧められないというのが理由だ――に、荷物とイーダルドを預けるなり、こうして足を運んだのだが……。

未だ固く閉じられた門を前にして、セイタマールは困ってしまった。

こうした店が開くのは、日暮れと相場が決まっている。午後もまだ早い時刻に、どうしたら中に入れるのか、その手の経験に乏しい彼には見当がつかなかったのだ。

（裏口まで閉まっていることはないだろうから、それを探すのはいいとして、さて、どう声をかけたらいいものか……）

シイレートルの紹介だと言えば、戸は開けてもらえるだろうが、館の中は花園だ。甘い香りを放つ大人の女性で溢れている。女性が得意ではないセイタマールにとって、あまりありがたくない場所である。

（できれば伽羅を呼び出してもらって、そのまま連れ帰るというのが一番なんだが……）

十日も世話になった以上、伽羅としても挨拶ぐらいはしたいだろうし、相棒である自分も一言礼ぐらいは言うべきだろう。

それはわかっているのだが、どうにも気が進まない。

決して女性が嫌いなわけではなかったが、ラークラーニを手にかけた一件が、こうした部分にも影響を与えている。セイタマールは――大人の女性に近づくのが怖いのだ、また手にかけてしまうのではないかと恐怖せずにいられないのだ。

自分でも馬鹿げているとはわかっている。だが、理屈ではなく、身が竦むのだ。こればかりはどうしようもなかった。

そんな事情があり、来たはいいが門前で立ち尽くしていたセイタマールだが、運は彼を見放さなかった――いや、受け取り方によっては試練を与えられたと言えなくもないが。

「お若い方、お店が開くのはもう少し先ですよ」

揶揄するような女性の声に振り返った彼は、大輪の花の化身を目にすることとなった。

思わず身を引きそうになりながら、それでもセイタマールはこの機会を逃すべきではないと判断した。

「いや、おれは……連れを迎えに来ただけで……シイレートルさまが、ここにいるからと

……」

不意のことで、言葉がうまく出てこなかったが、相手の女性にはそれだけで充分だったらしい。

ぽん、と手を打つと「ああ、カラちゃんの！」と嬉しそうに声をあげたのだ。

そうして、彼女はセイタマールを手招くと、裏口に案内し、さらに建物の中に招じ入れてくれたのだ。

開店していない娼館に男の姿は——居続けの客を除けば——珍しい。奇異な視線を向けられるのが億劫で、館の奥に入るのは遠慮しようとしたのだが、相手の女性——どうやら牡丹の銘を与えられた姫らしい——は「いいから、いいから」とまるで話を聞いてくれない。

「カラちゃんは？　そう、芙蓉姐さんの部屋に……いいよ、このまま連れてっちまおう。芙蓉姐さんもカラちゃんのこと可愛がってるから、相棒がどんな男か見てみたいだろうからね」

などと館内の知り合いから伽羅の居場所を聞き出しながら、本人の前でどうかと思われるようなことをけろりと口にしてくれたあたりで、セイタマールはどうやら自分は格好の見せ物にされているらしいことに、気づきたくもないのに気づいてしまった。

この様子では、伽羅は女性陣に気に入られ、大層可愛がられているようだ。それならば、妙な酔客に絡まれたという心配は無用だろう。気の利いた大人の女性たちが気をつけてくれたの

であれば、いかに伽羅が自覚なしの天然でも、危ない目にあうとは考えられない。

そのことは確かに嬉しい……嬉しいが。

（なんだか品定めをされているような気がする……）

行き交う女性たちはみな、セイタマールが伽羅の相棒だと芙蓉から聞く度に、さりげなく探りの視線を向けてくる。

正に、「可愛いカラちゃんに相応しい」か否かを見極めようとしているとしか思えない。

セイタマールは歩きながら、気づかれないように深く息をついた。

（……気に入られすぎだろう……）

女性たちが伽羅を気遣う理由は痛いほどにわかる。

あれだけ綺麗な顔をして、自分の容姿に無頓着であれば、誰であろうと危なかしくて放ってはおけない。セイタマールでさえそうなのだ、女性なら尚更庇護欲を刺激されるのだろう……だが、だからといって会う女性会う女性から、鑑定されるのはいただけない。

しかし、それももう少しの辛抱だ。

牡丹と呼ばれる女性は、最上階にある立派な部屋を前に、ようやく足を止めてくれたのだから——品定めの視線もあとひとりから向けられて終わりになる。

そう思うと、さすがにほっと息をついたセイタマールである。そんなつもりはなかったが、

女性ばかりが行き交う館で、知らず緊張していたのかもしれない。
だから——開かれた扉の向こうに見えた相棒の顔にまず安堵し、次いでその格好に唖然としたのだ。
伽羅は……特定の性を持たぬ彼の相棒は、あろうことか女性の衣に身を包んでいた。
他の姫たちが着ているような、露出の高いものではなかったが、体の線がはっきりと見て取れるデザインの衣装を身につけた伽羅は、どこからどう見ても少女以外の何物でもなかった。
突然現れた自分の姿に、伽羅が目を丸くしているのも、あどけなく無邪気な少女に見せるのに一役買っている。
「セ、セイ……」
驚きに震える声も、か細く儚げで……。
しかし、セイタマールはその事実に驚いたわけではなかった。
伽羅がほぼ半年の周期で肉体が変化することを彼は知っていた。男性にしか見えない時もあれば、女性そのものとしか見えない時もある。女性寄りになった際は、ささやかだが胸のふくらみもできるから、ここまではっきりとではないが少女めいた伽羅の姿を目にしたことも何度かある。
彼が驚いたのは、伽羅がおとなしく女物の衣装に袖を通していることにだった。

自分が女性を苦手としていることも一因だろうが、伽羅は決して女性的な服を身につけようとはしないのだ。似合うからと遊羽の神殿の女性たちからいくら勧められようと、決して手を伸ばそうとはしなかった。

（世話になっている分断れなかったのか、それとも有無を言わさず着せ替え人形にされたのか……どちらにしても、よく着たものだ……）

なかなか……どころでなく似合っている。

悪くない。これならすこぶるつきの美少女にしか見えない。

しかし、セイタマールには別に気になることがあった——伽羅のその体の細さだ。

（確か半年まえに女性寄りに変化しきってたはずだから、今は男性寄りの体になっているはずなのに……）

「伽羅！」

思わず、セイタマールは大声を上げながら、伽羅へと大股に近づいた。

「お前！　またまともに食わなかっただろう！　その体の細さはなんだ!?　今の時期なら、もう少しはがっしりしてなきゃおかしいだろうが！　こんなにがりがりに痩せやがって……胸の詰め物程度で娘にしか見えなくなるなんて、痩せすぎもいいところだ！」

事あるごとに大きくなりたいと口にするくせに、伽羅は意外に繊細で、卯昆の神殿ではなか

なか物を口にしようとしないことを、セイタマールは二年前に目にして知っていた。
伽羅を危険視する者たちの視線が肌に突き刺さり、無理に食べようとすれば戻してしまうのだと聞いた。
だから、今回の帰郷に際しても、「吐くまで食べる必要はないが、食べられる分はきちんと食え」と口を酸っぱくして言い聞かせていたのだ。
だというのに、この痩せよう――怒鳴りつけたくもなるというものだ。
「セイ、あの……」
怒りも露な自分に怯えたように、伽羅が身を引きかけるが、セイタマールは許さなかった。
両手でがしりとその細い腰を摑む。
「細すぎる！　女性寄りの時と同じぐらいしかないじゃないか！　この分なら胸もますます薄くなったんじゃないのか!?　ああ、紛らわしいな、いいからこの詰め物取ってしまえ！」
言いながら、彼は胸元の合わせに手を伸ばし、紐釦を解くなり中の詰め物を取り出すために服の中に手を突っ込んだ。
そして――次の瞬間、詰め物ではあり得ない感触に、セイタマールの動きは凍りついた。
（詰め物……じゃ、ない……？）
では、何なのか――考えるより、胸元に伸ばした腕を凄い力で引っ張られた。

牡丹の銘を持つ女性が、真っ赤な顔をして腕を引っ張っていた。そして、残る片手を振り上げると、容赦のかけらもない力で……頬を引っぱたかれた。

「相棒とは言え、娘の腰や胸に勝手に触るだなんて！　シイレートルさまはあんたに女性に対する礼儀は教えてくれなかったのかい!?」

セイタマールは相手の言葉がすぐには理解できなかった。

（娘……？　女性……？　もしかして、このひとは伽羅が女だと思っているのか……？）

だとしたら、確かに怒られるのも無理はない。

などと、ここまでの動きにはなんとかついていった彼の頭は、しかし次の瞬間、艶やかな美女の朱唇からこぼれ落ちた言葉に完全に凍りついた。

件の女性は、彼とセイタマールの間に体を滑り込ませると、呆然としている様子の伽羅の両肩を掴み――。

「カラ、カラ！　あんたもしっかりしなさい！　子供の産める体になった女の子が、容易く男に体を触らせるんじゃない！」

と叫んだのである！

今から十日ほど前、伽羅が明け方に非常事態に襲われた際――。

伽羅が事態の相談を持ちかける相手に選んだのは、昔からよく面倒を見てくれ、二年前も周囲の反対を押し切って伽羅のために出国届けを認めてくれた副神官長だった。

起こった問題の性質上、全く躊躇わなかったといえば嘘になるが、伽羅にはこの件に関してシイレートル以外に打ち明けても良いと思える存在がいなかった。

微かに明るむ光すら、分厚いカーテンに遮られ、ほとんど闇の中を明かりひとつ持たぬままに伽羅はシイレートルの部屋の扉を目指した。

長いこと外の世界で聖石の使徒として活動して来たシイレートルは、伽羅が扉を叩く前に気配に気づき、部屋の扉を開けてくれた。

『伽羅……どうしたんだ……？』

そう問いかけた男は、しかし伽羅の返事を待つまでもなく問題の全てを把握した――伽羅の夜着の裾についた……始末し損なった赤い染みひとつで。

それは、生まれながらに水の篤すぎる加護を受けたがゆえに、流れ揺らぎ特定されることのなかった伽羅の最終的な性別を決定づける証だったのだ。

無性に近い体で生まれた伽羅は、数カ月周期で肉体の性別が移り変わるという、尋常ではな

い特質を天から与えられていた。

子供の頃は、それでもさほどの不自由は感じなかった。

女であれ男であれ、子供のときはさほどの差異はない——無論、外見的には明らかに違うが機能がついてこなければ、どうでも誤魔化せる範疇内にあった——、だが伽羅の年齢が上がるにつれ、その差異は大きくなり続けた。

その性が女性に傾いた時、伽羅の外見は完全な少女となり、その性が男性に傾いた時には、外見は完璧に少年のものとなったのだ。流れ揺らぐ水の加護は、伽羅をそういう、人間としては異常な状態に導いたのだ。

だが、それも長いことではないはずだった。

男女どちらかの明らかな性徴が顕れる——その時、伽羅の性別は決定されることになる。

女性なら初潮、男性なら精通——がその証となる。

しかし、伽羅は十六になるこれまで、そうした徴を迎えたことがなかった。過去、彼女と同じ星回りで生まれた者たちは、遅くとも十三歳には性が決定していた。十五を過ぎても何ら変化のない伽羅の肉体に、本人は勿論周囲も伽羅は生涯このまま性別が固定されることはないのではないかという思いを強くしていた。

伽羅にとっても、それはそれで悪くない道のひとつだと思っていた。

女性にさえならなければ、伽羅は構わなかったのだ――篤すぎる水の加護が導く危険は、より月の支配の強い女性にしかこれまで起こってはいなかったことなので。

だのに……。

卯昆の、伽羅を危険視していた神官たちがようやく態度を緩和させ、那八の地に移ることを許してくれたその矢先に、紛れもない女性になってしまっただなんて！

すでに聖石の使徒名を用意されたほどの強い水に係わる資質を与えられた身としては、この上さらに月の影響を生涯受け続けることになる女性化は到底看過できることではなかった。

しかし、初潮は訪れてしまった。

この身は女性に固定化されてしまった。

……こうなっては、那八への移動を認めてくれた神官たちも、態度を覆しかねない――なにより、なにより。

『絶対、女にはならないと約束できるなら、組んでもいい』

そう言って、二年前、渋々ながらも相棒となることを受け入れてくれたひと――セイタマールを、自分は裏切ってしまったのだ！

伽羅は絶望した。

セイタマールの言葉の裏にある深い事情を知ればこそ、セイタマールの拒絶は確実なものに

思えた。

かれこれ六年前、彼は相棒である女性をその手にかけざるを得ない悲劇に見舞われた。水の篤い加護を受けたその女性は瘴気に蝕まれ、そのままでは月瘴気をその身に招じ入れること確実な状況だったと言う。

感情がどうであれ、セイタマールはその女性ごと瘴気を断ち切るしかなかったのだ。

だが、そのことが残した心の傷は大きく、彼はその後四年間、ほとんど瘴気絡みの仕事を拒絶した……無理はないと伽羅は思う。自らの手で仲間の命を絶ったのだ——そして、使徒として仕事を続ける以上、二度目がないとは限らない。

そんな彼が、伽羅を受け入れてくれたのは、彼生来の優しさが理由だと思っている。伽羅の自由になりたいという悲鳴にも似た願いを叶えるために、彼は自分を曲げて相棒となることを受け入れてくれたのだ……執拗な伽羅の懇願に半ば根負けしたという一面はあったにせよ。

けれど、それは伽羅が女性ではなかったからこそ引き出せた譲歩だ。

女性になってしまった伽羅を、彼が受け入れてくれるとはどうしても思えない。

先の相棒と同じ篤い水の加護を持つ女性——しかも伽羅は瘴気を浄化するにあたり、その身に一度瘴気を取り込む必要があるのだ。セイタマールは伽羅の体ごと、浄化の刃を瘴気に突き立てなければならない。それは痛すぎる過去の再現にほかならない。

何度も何度も、伽羅と組み続ける限り、彼は相棒を殺した過去に酷似した行為を繰り返さなければならないのだ。

誰がそんな残酷なことを望むというのか。いくら優しい――一見そうは見えないが――セイタマールでも、そこまで自らを追い詰めてまで、伽羅に手を差し伸べてくれるとは到底思えない。

（どうしよう……どうしたら……）

混乱したまま、シイレートルの部屋を訪れた伽羅は、立ち尽くしたまま何も言えずにいた。

そんな彼女の心中は、長年見守ってきた副神官長にはお見通しだったのだろう――彼は静かに息をつくと、「とりあえず、場所を移そう」と言い、大きすぎる外套を伽羅に手渡した。

そうして自らも着替えると、伽羅を伴い露台に出た。

何をするのかと思ったら、シイレートルは用意していたらしい幾粒かの聖石の子供石――菫星石と紫水晶と瑠璃だった――を空にかざして風霊たちを呼び寄せ、こう頼んだのだ。

「すまないが、明け方の散歩と洒落込みたくなってね。神殿の外までわたしたちふたりを運んでくれないかい？」

と――。

そうして風霊たちは、本当にふたりを神殿の外まで運んでくれたのだ……。あとは靴のない

伽羅はシイレートルに抱き上げられた格好で、静まりかえった夜明けの街を歩き、そうして固く門を閉ざした紅晶楼の裏口の戸を叩いたというわけだ。

シイレートル曰く「女性の問題は、女性に任せるに限るだろう？　伽羅の場合、神殿のほかの女性に尋ねるわけにもいかないのだからね。しばらくここで休みながらいろいろ教えてもらうといい」ということだった。

「それにここなら、神殿関係者はまず足を踏み入れないからね」

とも言われた。

後にここが娼館であることを知った伽羅は、後見人の意外な――とんでもないと言い換えてもいいかもしれない――人脈の広さに感心するやら呆れるやらだったが、正直どうしていいのかわからなかった身としては、シイレートルに深く感謝したのである。

あれから十日。

経験豊かな女性たちに対処法を教えてもらう一方、どうしても溜まりがちになる邪気を祓ったり簡単な浄化方法を教えたりしている内に、あっという間に時間が経った。

相棒が迎えに来たら、すぐに知らせるからというシイレートルの言葉を信じて、綺麗な姐さんたちに着せ替え人形のように着飾らされながら、伽羅はセイタマールについてずっと考えてきた。

初潮が訪れた時には、もはや隠すことは叶わない——どうしたところでセイタマールは受け入れてくれないだろうと悲観的なことばかり考えがちだったが、少し時間ができたことで、本当にあれこれ考えることができたのだ。

そうして導き出した結論は——。

（姐さんたちにいろいろ教えてもらったし、まだ胸だってさらしを巻けば誤魔化せる程度だし……何とか隠せる間は隠しておこう。あと一年か二年すれば、セイもわたしと組むのが当たり前になってくれるだろうし、あのひとは情が厚いから、そのあとでばれたとしてももしかしたら仕方ないと思って受け入れてくれるかもしれない……）

という、前向きなのか後ろ向きなのかわからないものだった。

伽羅はセイと組むことを諦めきれなかった。二年前、同胞であるシャークネーニの件があって以来、ますます伽羅の危険性に目を向ける者が増え、腫れ物に触れるように扱う者が多くなった中、態度が全く変わらなかったセイに、どれだけ心が救われたか知れない。勿論それはセイだけではなかったが、シャークネーニに肉体の支配権を委ねた状態の伽羅を目の当たりにしながら、それでも変わらなかったセイは伽羅には特別だったのだ。

（我ながらひどいことをするとわかってはいるけれど……）

それでも、今のセイでは拒絶されることが確実だとわかっているから、狡い策を用いようと

も勝算を上げるために足掻くしかないのだ。

（セイ、すみません……。それでもわたしは、あなたと組んでいたい……）

そう――。

心を決めたのは、ほんの昨日のことだった。

だから、女性としての経験豊かな姐さんたちに、いかに振る舞えば女性らしく見えないか教えてもらおうと思った矢先に、まさかこんなことになろうとは！

目の前で、牡丹姐さんに張り手を食らわされたセイタマールが呆然としている。

そして、固まる伽羅の肩を摑んで、牡丹姐さんが叫んでいた。

「カラ、カラ！　あんたもしっかりしなさい！　子供の産める体になった女の子が、容易く男に体を触らせるんじゃない！」

がくがくと揺さぶられながら、伽羅は（ああ）と声なく呻いた。

（ばれてしまった……）

と――。

4

イーダルドは伽羅に会うのを心底楽しみにしていた。

セイタマールに連れて行かれた卯昆の神殿で、兄貴分のあのひとがいなくなった時のことをいろいろ尋ねてきた人たちは、故郷の神殿や役所の大人たちとは違って、何を聞いても鼻で笑ったり呆れたようにため息をついたりしなかった。

それだけのことだったが、イーダルドは本当に嬉しかった。けれど、どうしてこんなにも対応が違うのか気になって、どうしてこんなに親切なのか尋ねてみた。

すると、返ってきたのは、「当たり前のことをしているだけだよ」というもので、では故郷のアレはなんだったのかとイーダルドは正直へこみそうになった。

（おれの故郷ってば、神官も役人も能なししかいないってこと……？）

……そういえば、酒場の厨房で皿洗いをしていたとき、役人の制服を着たいい年をした男が、酒で顔を真っ赤にしながら『どうせおれは左遷組だよ！　島流しにされたんだ！』とか荒

れて叫んでいたことがあった。

左遷された役人が配置される街なら、神殿でも同じように左遷された神官しか配属されないのかもしれない。そう考えれば自分に対する対応の違いも納得できるが、それはそれで何だか切ないものを覚えたイーダルドだった。

ひと通り事情を話したあと、セイタマールのところに戻った彼は、そこに見知らぬ……けれど上位神官らしい立派な服装の男性を認めて目を丸くした。

何と表現すればいいのか……そのひとは、街で一番偉い神官さまより、よほど、よほど……よっぽど、立派に見えたのだ。衣装云々の問題ではなく、身を包む空気というか、風格というか……とにかく並べるまでもなくひと目みるだけで、何もかもが大違いだとわかるひとだった。

「やあ、君がイーダルドくんか」

にこり、と親しみやすい笑顔を向けられて、イーダルドはらしくもなく緊張するのを感じた。

怖いとか取っつきにくそう——と感じたからではなく、「ああ、この人の前でみっともないところは見せたくないなあ」と思ってしまったからだ。

「うわ、え、はい……」

……正直、情けないがその時どう返事したのかは覚えていない。

けれど、そのひとは自分の慌てふためく様を目にしても笑ったりせずに――故郷の神官は彼が必死に言い募れば言い募るだけ、苦笑いを浮かべて、そのことを隠そうともしなかったのだ――「行方が知れないのは、兄弟同然に育った子なんだってね。それは心配でいても立ってもいられないよね」と優しい言葉をかけてくれた。

これが上っ面の言葉だったら、イーダルドは何も感じなかったろう。故郷の神官や役人にさんざん言われてきたことと同じような内容だったのだから。

けれど、故郷で聞かされた時は安っぽい慰めにしか聞こえなかった言葉が、そのひとが口にしただけで、本当に気遣われているのだと感じられて、胸の奥がじん、と熱くなった。

赤い髪の青年が、隣でぽつりと「このタラシ狐が……」と呟いたのが聞こえたような気もしたが、あり得ないことなので聞き間違いなのだと判断した。

そして、やっぱりあれは聞き間違いなのだと確信したのは、立派な衣服を纏った優しそうな神官さまが、「でも大丈夫だよ」と請け合ってくれたときのことだ。

神官さまは、にこやかにセイタマールを見つめながら、力強く保証の言葉をかけてくれたのだ。

『このセイタマールと伽羅が組んだ仕事で失敗した試しはないんだ。いまはちょっと野暮用で

ここにはいないんだけどね……でも、ふたりが取り組めば解決できないことはないよ。だから君は大船に乗った気分でいればいいんだよ』

と。

セイタマールが聖石の使徒さまだということは知っていた。相棒を迎えに卯昆に来たことも知っていた。その相棒のことをセイタマールがとても大切に思っていることも気づいていた。けれど、こんな偉そうで強そうな神官さまが太鼓判を押すほどに、有能な使徒さまたちだとは思っていなかったのだ。

俄然、まだ会っていない——セイタマールが迎えに来たというもうひとりの使徒さまに興味が湧いた。

そのひとは、このおっかない青年に照れた顔をさせるだけでなく、偉い神官さまが保証するほど有能な使徒さまなのだ、いったいどんなひとか、知りたくなるのは当然のことだった。

だから、神殿を辞して、セイタマールがもうひとりの使徒さまを迎えに行くと聞いた時には「一緒に行く！」と言い張った。

結局、「子供が行くところじゃない」と一蹴されてしまい、セイタマールの荷物と一緒に宿で留守番することになったのだが、イーダルドはずっと、まだ見ぬ使徒さまがどんな人なのか楽しく想像して想像して想像して……気づけば日は西に傾きかけていた。

（迎えに行くだけ、にしては遅いよなぁ……）

と、思った矢先、部屋の鍵が開けられる音がした。

セイタマールが相棒の使徒さまを連れて戻ってきたのだ。

（うわぁ……どんなひとだろう……？）

イーダルドは期待に胸を打ち震わせながら、開く扉をじっと見つめた。

ぎい、とやや重い音をたてて開いた扉の向こうから、まず目に入ったのはセイタマールの姿だった。

ところが、赤い髪の青年は、部屋に入ろうとしない。

代わりに後ろについてきた、小柄な黒髪の少年だか少女だかわからない、けれどとても綺麗なひとの背中に手を回し、無理矢理のように扉のこちらがわに放り込んだ。

（うわ、兄ちゃん、それは乱暴だって！）

と、イーダルドですらもの申したくなるほど、それは乱暴な仕種だった。

しかし、そうされた細身の人物は文句のひとつも口にしない。

貧血を起こしてるのではないかと思うほど、血の気の失せた顔をしたそのひと――綺麗すぎて性別の判別ができない人間がこの世にいるとは思わなかった――は、よろよろとした足取りで部屋に入るなりぺたん、と尻餅をついてしまった。

こうなってしまえば、セイタマールへの非難よりなにより、尻餅をつくほど憔悴してしまったもうひとりの使徒さまへと意識が向かってしまうのは、イーダルドにとっては仕方のないことだった。

なにしろ、その綺麗なひとは蠟のような顔色で、世界の終わりを見たかのような顔をしていたのだ。

放っておけるはずがない。

初対面の自分がそうなのだ、その人のことを思い出すだけであんな顔をするセイタマールがこのまま黙っているわけがない——という推測は、なぜだか綺麗さっぱりと外れた。

なぜなら、真っ青な顔でひとりでは立ってもいられない様子のそのひとを残して、セイタマールは部屋に入ることなく、扉を閉ざし、さらに外から鍵をかけたのだ！

「え、ちょ……っ」

これまでのセイタマールからは想像もつかない乱暴すぎる行動に、非難の声を上げかけたイーダルドだが、返ってきた声音のあまりの重々しさに飛び出しかけた声が喉の奥に引っ込んでしまった。

「……神殿に行ってくる」

簡潔な、疑問も制止も拒絶するその絶対的な声に、イーダルドは正直途方に暮れた。

今度の留守番はどうやら自分ひとりではないようだけれど――。

もうひとりの留守番要員と思しきひとの顔色や様子を目にしてしまえば……先ほどまで夢想していた明るい未来はほど遠いとしか考えられないではないか。

（なにが、大丈夫なんだよ！　偉い神官さまのうそつきーっ！）

……しかし、世は無常にして時に無情なもの。

鍵をかけられた部屋のなかに取り残された子供と呆然とする中くらいの子供。この状況が嘆いたり癇癪を起こしたりする程度で変わらないと確信できる以上――何しろ鍵を持つ青年は、ここから距離のあるアスカニーリ神殿に出かけてしまったのだ――イーダルドは覚悟を決める必要があった。

青年が帰ってくるまで何もせずにただ待っているか、それともいまは役に立たなそうだけれど、本来は有能らしい青年の小さな相棒に正気に戻ってもらって、故郷の話を聞いてもらうか。

選択肢はふたつにひとつ。

勿論、イーダルドは迷わなかった。

できることがあるかもしれないのにじっとしているのは彼の性に合わず、ついでにいえば先ほどのセイタマールの態度にも腹を立てていた。

彼はゆっくりと、床に座り込んだままのひとに近づき、なるべく乱暴に聞こえないように気遣いながら声をかけた。

「ええっと……ちぃさな兄ちゃんだか姉ちゃん……大丈夫か……？」

と。

卯昆のほぼ中心に位置するアスカニーリ神殿――神官に案内されて歩きながら、セイタマールは煮えたぎる怒りに震えそうだった。

伽羅が女性になってしまった。

紅晶楼で耳にした女性の声が脳裏に焼きついて離れない。

『子供の産める体になった女の子が、容易く男に体を触らせるんじゃない！』

子供の産める体――その意味するところは明らかだ。

伽羅には初潮が訪れ、その肉体の性が女性に固定化されてしまったということだ。

あまりの衝撃に、セイタマールは伽羅にかける声を持たなかった。最早伽羅はよく見知った相棒ではなく、篤い水の加護を受けた女性という存在に変貌していた。そんな彼女に触れるこ

とはおろか、言葉を交わすことさえも恐ろしく――宿に戻るまでほとんど口もきかなかった。
背中に伽羅の物言いたげな視線が注がれていることには気づいたが、到底振り返ってその顔を見ることはできなかった。
女性になってしまった伽羅を見れば、ともに行動することさえ不可能だと思い知らされそうで……紅晶楼の中とは違い、彼女はいつもの性の判別がつきにくいゆったりした上下に身を包んでいるというのに、それでも自分は以前のように見ることができない。
彼女を厭わしく思うのではない。
逆だ。
自分こそが、女性となった伽羅にとって忌まわしく厭わしい存在なのだ。いつか彼女の心臓に刃を突き立て、その命を啜ることになりかねない自分こそが。
胸がざわめく――やり場のない憤りが、出口を求めて暴れ回っている。溶岩のようなどろどろとした感情は、しかし今は暴走させずにすんでいる。
ぶつけるべき相手を、ひとまずセイタマールが決めたからだ。
かつ、かつ、かつ、かつ――感情の嵐を物語るかのように、靴音は荒々しく大理石の床に響く。
（狸の同類はやはり大狸だった！　あの冷血漢が……！）

向かう部屋で今も暢気に昼行灯しているに違いない男の顔を思い出しながら、セイタマールは固くこぶしを握りしめた――。

荒々しい靴音が聞こえた時点で、シイレートルは自分の被後見人の秘密が早々に暴かれたことを知った。

（伽羅……）

素直な性格か世間知らずのせいか――後者は自分にも責任があることだが――伽羅は子供の頃から秘密を守るということが不得手だ。

固く殻に閉じ籠もりがちな子供だったから、万人に見抜かれるわけではないが、親しくつきあう者たちにとって、黒髪黒瞳の綺麗な子供の顔に僅かな曇りを見いだすだけで、何か隠しているなとすぐにわかるのだ。

頑固でもあるせいで、すらすらとそれを引き出すことの難易度はまた別だが、それでもツボさえ心得ていれば、その内容を知ることは難しくない……但し、それは伽羅と親しい間柄であり、且つたっぷりと人生経験を積んだおかげで性格に捻りが入った人間に限る。

だから――今回の早すぎる展開に、シイレートルは思わず息をついたのだ。
（伽羅、我々相手ならともかく、坊やにこんなに早く見抜かれてどうするね……）
こんなことでは先が思いやられると、彼は真剣に被後見人の将来を心配した。
しかし、目下の問題はあの愛しい子供ではない。過去の精神的外傷が原因で、自らの能力を信じ切ることができない困った青年は、怒り狂っているに違いなく、それをどう宥めるかが最優先すべき課題だ。
（さぁて、どうするかな）
ぺろりと唇を舐めて思案するシイレートルの耳に、中位神官の声が飛び込んでくる。
どうやら一応の理性はまだ保っているらしい――案内もなしに怒鳴り込んでくるようであれば、伽羅がどう思っていようとコンビ解消を認めてもいいと思っていた彼は、安堵とも落胆ともつかぬ思いを味わった。
（わたしは娘を嫁に出す父親か……）
そんな自分自身に揶揄の言葉を向けながら――伽羅は娘になってしまい、しかもこれから芭蕉を離れ那八へ行くのだ……笑えない――シイレートルは入室の許可を出した。
中位神官が開けた扉から入ってきたのは、予想通りの人物で、果たして怒りに顔を赤くしていた。

セイタマールはずかずかと部屋に踏み入ると、真っ直ぐにシイレートルの机の正面にやってきた。

「……どういうこと、ですか」

両手を机につき身を乗り出す格好で、青年はしかし声を抑えて問いかけてきた。

どこまでこの理性がもつか、少々趣味の悪い興味を覚えたシイレートルは、空とぼけてみることにした。

「なんのことかな？」

「ふざけないでください、伽羅のことに決まってるでしょうが！」

さすがに熱くなっているだけに、理性の歯止めが外れるのが早い。

（まだまだ、だねえ……）

減点一をつけながら、彼はわざとセイタマールから中位神官に目を移した。

「ご苦労だったね、もう行っていいよ。どうやらわたしの渡した書類にミスでもあったらしい……那八の腕利き殿は二度手間を取らされたことを大層お怒りのようだ」

おどけたように肩を竦めて見せれば、神官は得心が行ったという顔で頷いた。

不本意だが、使徒として世界中を飛び回っている頃に、勝手に文字のいくつかを自分流に変えて用いていた癖が今でも時々顔を出すせいで、シイレートルは誤字脱字の多さで有名だった

りするのだ。

「失礼します」

神官が礼儀正しく頭を下げ、退室するのを見届けた上で、彼は再びセイタマールに目を戻した。

味方ばかりとはいえない神殿で、軽々しく伽羅の話題を持ち出した迂闊さに気づいたのだろう……青年はばつが悪そうだった。

それには気づかぬ顔をして、シイレートルは今度はこちらから話を切り出した。

「それで、伽羅がどうしたと？」

この言葉でセイタマールは怒りを思い出したらしい——きつい目を向けてきた。

「言わなくともわかっているでしょう。どうして隠していたんですか」

ここが神殿の中枢部でなかったら、青年の口からはさぞ盛大な罵詈雑言が繰り出されたに違いない……そう思わせるに充分な怒気が肌を刺す。

「誤解してはいけないな、セイタマール。それはここでこそ秘すべきことだ……どこに耳があるかもしれない場所で口にできるようなことではないんだよ」

実のところは精霊たちとの契約で——礼は勿論彼らの大好きな聖石の子供石だ——盗聴対策は万全だったが、だからと言って気を抜けばどこで足下を掬われるかわからない。

迂闊なことを口にしないに限るのだと言えば、青年は悔しそうに唇を噛みしめた。

「それに、そのことは本人でない第三者が告げることではない。わたしの判断はどこか間違っているかね？」

少々意地悪な気分で問いかけると、セイタマールがゆっくりとかぶりをふった。

「……おれが、ここで伽羅とのコンビを解消したら、あいつはここから出られなくなりますか？」

その台詞に、シイレートルは「ふ、ん？」と首を傾げた。

どうやら伽羅の危惧は当たっていたらしい——お人好しな子供は「仕方ないことだけれど」と言っていたが、シイレートルの感想は全く違う。

言って何かが変わるなら、お節介を焼いてもいいが、自分が言ったところで、青年の心には届かないとわかっている。ならば無駄なことは省くべきだろう。

「いや？　まあ……わたし以外の誰かに決意表明などされたら、少しごたつくかもしれないが、手続きはすでに完了している。伽羅はすでに芭蕉の籍からは外れているよ。だから、君がどうしても受け入れられないというのなら、それはそれで仕方のないことだ。……けれどね」

一旦言葉を切ると、シイレートルはずい、と机の上に身を乗り出した。

「コンビ解消の理由をしつこく聞かれることは覚悟しておかないとね。そしてこの神殿には、

鼻が利く厄介な御仁が少なくはない……そうして、そういう面々はどういうわけか昔から伽羅を怖がっていてね。わかるだろう、せめて那八に着くまでは、いらぬ興味を惹くような真似はしないでくれるとありがたいんだ」

万が一伽羅の女性化が彼らに知れたら、全てを白紙に戻すために動き出しかねない——その時伽羅を待っているのは生涯神殿の外に出ることを許されない……閉ざされた世界と未来だけだ。

シイレートルの言わんとしているところに気づいたのだろう——セイタマールは硬い表情でひとつ頷いた。

「……わかりました。おれだって、伽羅を不幸にしたいわけじゃない。寧ろ不幸にしたくないから……」

続く言葉は容易く想像がつくもので、だからこそシイレートルは素知らぬ顔でその先を言わせなかったのだ。

「とにかく、那八まで伽羅を頼むよ。平気で無茶をする子だから心配なんだ」

最後にシイレートルは声には出さずにこう付け加えた。

（克服すべきことから逃げ回る甘ったれの坊やでも、せめてそれぐらいはできるだろう……？）

5

卯昆の春の大祭がいよいよ明日から始まるという日、セイタマールと伽羅、そしてイーダルドの三人は、南の街門をくぐり、南苞街道を南に下り始めた。

街へ入る者たちが圧倒的に多い中、出て行く三人はそのせいでもなかろうが、沈んだ空気を纏っていた。

いや、違う。

沈んだ空気を纏っているのは伽羅ひとりだ。

セイタマールは不機嫌なそれを、イーダルドは困惑を全身から放っている。

そうした三人の間で明るい会話が成立するはずもなく、門をくぐって半日——一行は黙々と歩き続けることとなった。

そんな気まずい空気に、真っ先に我慢できなくなったのは十一歳の少年だった。

「なあ！　何があったかは知らないけど、これから兄ちゃんとちいちゃん、協力しておれの兄

貴を捜してくれなきゃならないんだから、さっさと仲直りしてくれよ！」

故郷の響波はまだ先だが、ふたりがずっとこんな調子では、頼りになるとはとても思えない……ふたりとも偉い使徒さまのはずなのに、全然大丈夫だという気がしないのだ。

伽羅が落ち込んでいて、セイタマールが怒っているのだから、恐らく悪いのは伽羅なのだろうとイーダルドは思っている。

初めて会った宿の部屋で伽羅に声をかけ、どうしたのかと尋ねた時、『わたしが……約束を破ったから』と伽羅も言っていたから、やはり非は伽羅にあるのだろう。

『じゃあ、さっさと謝っちまえばいいじゃないか』

簡単なことだろう、と提案すれば、伽羅はますます俯いて――。

『謝らせてくれないんだ……』

と絞り出すように答えた。

事実、セイタマールが宿に戻って来てからのふたりの様子を見ていれば、必死に話しかけようとしている伽羅のことを、おっかなそうな青年はわざと無視しているのが見て取れた。

外見が怖いだけに、不機嫌を隠さないセイタマールは、イーダルドから見ても恐ろしく、果敢に声をかけようとする伽羅はある意味凄いと思った……ああまで無視されたら、自分だったら凹むどころの騒ぎではない。ぺしゃんこに潰されてしまうだろう。

（さすがにあの兄ちゃんと組むだけあるよなぁ……）

と、儚げな外見からは想像もつかない根性に、感嘆の念さえ覚えたものだ。

それでも、その時は別に口を挟むつもりはなかった。

怒っているセイタマールは正直おっかなすぎて、間に入るだなんて冗談ではないというのが理由のひとつ、もうひとつは時間をおけば彼も少しは落ち着くだろうと思ったからだ。

しかし、一夜明けてもセイタマールの機嫌が直っている様子はなかった。

宿を引き払い、卯昆をあとにしてもずっとずっとずーっと、彼の機嫌は悪いままだった。伽羅が声をかけても返事どころか反応ひとつ返さない。

おかげで美味しいはずの弁当――宿に頼んで作ってもらったものだ――も、イーダルドは味がわからなかった。重苦しい沈黙が支配する中、セイタマールも伽羅もただただ無言で黙々とおにぎりを口に運ぶさまは彼にしてみれば異常だった。

このままでは、夕食の味までわからないことになる。

そう思ったら、イーダルドはもう辛抱できなかったのだ。

「兄ちゃん、何を怒ってるんだか知らないけど、ちいちゃん何度も謝ってるじゃないか。聞こえないふりして怒り続けるなんて、はっきり言って大人げないぞ！　ちいちゃんもしょんぼりばっかりしてないで、へこたれないで何度でも謝り続ける！　兄ちゃんが根気負けするぐらい

謝り倒せばいいじゃないか！　それでさっさと仲直りしてくれないと、おれが困る。兄ちゃんもちいちゃんもおれより年上なんだからさぁ、一番年下のおれに負担かけるような真似してちゃだめだろう!?」

かなり自分本位な言い分だったが、イーダルドは大真面目だった。

自分の精神衛生のためにも、兄とも慕ったあのひとを捜し出してもらうためにも、ふたりにはさっさと仲直りしてもらわねば困るのだ。

その本気が伝わったのだろうか……それまで俯いていた伽羅が顔を上げた。

「ちいちゃん……？」

（引っかかったのはそこかよ……）

普通は一番年少の自分の言葉で反省するのが先ではないだろうか……。

なのに、気になるのは自分に対する呼び方だなんて……。

どうやら使徒さまは、常人とずれた感覚の持ち主らしい。

だが、それでもこれは卯昆を出て以来初めての会話である。期待したものではなくとも、嬉しくなるのは仕方ない。

イーダルドはにっこり笑って答えた。

「ちいさな兄ちゃんだか姉ちゃんの略だよ。長くて言いにくいから間を抜いてちいちゃん」

「わたしは……」

言いかける伽羅の続ける言葉は想像がついた。

初めて「兄ちゃんだか姉ちゃん」と呼びかけた時、伽羅はそれはもうどんよりと沈んだ声で「姉ちゃんでいい……姉ちゃんに、なってしまったから……」と意味不明の答えを返してきたのだ。

イーダルドが求めるのは明るい会話であって、暗雲立ちこめるどよどよしたものでは決してない。

だから伽羅にそれ以上は言わせなかった。

「わかってるけど、せっかくそうは見えない格好してるんだし、旅してる間は絶対隠してたほうがいいって！　それでちいさな兄ちゃんって呼ぼうかとも思ったんだけど、やっぱり紛らわしいし……だからちいちゃん。ちいちゃんで決まり」

勝手に話をまとめると、伽羅が少しだけ笑った。

沈んだ顔しか見ていなかったから、笑顔を見たのは初めてだ。その時になって初めて、イーダルドは伽羅がとんでもなく綺麗な顔立ちをしていることに気づいたのだ。

（綺麗なことはわかってたけど、ちいちゃんってば、笑うと滅茶苦茶美少女だーっ！　うわぁ、兄ちゃんいつまでも怒ってる場合じゃないって！　そばに誰かひっついてないと、ひとり

になんかしたらあっという間に悪いのが寄ってくるっての！）

幼いながらも、そこは下町育ちのイーダルドだ、綺麗な少女――時には少年でも――がひとりでいることの危険性はよく知っている。

自分にわかることが、セイタマールにわかっていないとは考えられない。それでも青年はあくまでも沈黙を守り続けている……どうやら「ごめんなさい」「許す」では片づかない問題らしいと見切りをつけた彼は、さっさと身の振り方を決めた。

どう見ても、これでは伽羅が可哀相だ。萎れた花のようにしょんぼりしているところを、悪い大人に騙されたり酷い目に遭わされたりしたら、もう目も当てられないではないか。

（仕方ない……大人げない兄ちゃんの代わりに、おれが大人になってちいちゃんをそばで守ってやろう）

それにどうせ会話するのなら、不機嫌の嵐を身に纏っている怖そうな男より、笑顔が綺麗な少女のほうが楽しいに決まっている。

自分の精神衛生のためにも、そのほうが絶対いい。

イーダルドは伽羅の話し相手兼護衛になってやることを、この時自分に課したのである。

それがどれほど大変なことか、この時の彼には想像もつかなかった――身に染みてそのことを痛感したのは、それから三日後……。

イーダルドの祖国である響波の領内に入ってほどなくのこととなる――。

響波国境の街――弥琴の街門をくぐると、そこは賑やかな音色に溢れていた。
至るところから歌声や楽器の演奏が聞こえてくる。
響波は音楽の国と呼ばれている。国中が歌と楽器の音色に満ちている。国境沿いの街でも、それは変わらない。
街道添いの音楽の街――初めてこの街を訪れた者は、皆目を丸くする。
しかし、伽羅たち三人は違った。
伽羅とセイタマールは那八と芭蕉を何度か往復する度に響波を通り、この賑やかさは経験済みだし、イーダルドにとっては生まれた国だ。驚くはずもない。
「なんというか……相変わらず賑やかな街だな」
伽羅がぽつりと洩らすと、イーダルドが顔を輝かせて頷いた。
「音楽は貧乏でも関係ないからな。そりゃあ高価な楽器とかは無理だけど、その気になれば鍋だってバケツだって楽器になるし、歌や手拍子ならみんなできるもん。だから響波の人間はど

んな生まれでも耳はしっかりしてるんだぜ」
音楽を愛するこの国に生まれたことを心から喜んでいるのがわかる表情であり声だった。
「じゃあ、イーダルドも歌が得意なのか？」
貧しい施設で育ったと彼は言った。
ならば楽器を手にするのは難しかったに違いない――そう思って尋ねると、イーダルドは意外にも頭を振った。
「おれは耳はいいけど、歌は声が伸びないからあんまり歌わないんだ。耳がいいと自分の声の駄目さがわかっちまってさぁ、もう最悪」
「そんなものか？」
首を傾げながら尋ねる伽羅に、イーダルドは「そうなの！」と頷く。
「でも、代わりにおれ、口風琴は得意だぜ」
得意そうに少年が胸を張って言った時だ、それまで黙っていたセイタマールが口を開いた。
「いつまで街門そばで立ち止まってるつもりだ？　ふた部屋取れる宿を探すのは時間がかかるとわかっているだろう」
厭味ではない――淡々とただ事実を並べるだけの声が、きつりと伽羅の胸に突き刺さる。
もともとぶっきらぼうで口数も多いほうではなかったが、以前のセイタマールはこんな口調

で話しかけてきたりはしなかった。

もっとこちらへの感情を宿した声だった。

気づかれぬよう、伽羅は小さく息をついた。

(違う……二年前、初めて会ったころも、こんな調子だった。せっかく親しくなれて、内側に入れてくれたのに……これじゃあ最初からやり直し……いや)

彼が忌避する女性になってしまった以上、受け入れてもらうのは格段に難しくなってしまった。

「……すみません」

ぺこりと頭を下げると、イーダルドが不愉快そうに口を挟んできた。

「違うだろ、叱るならこんなとこでぺらぺら喋り出したおれのほうをだろ？　それに、わざわざふた部屋取るって言ってるのは兄ちゃんだけじゃないか。おれもちいちゃんもひと部屋で平気だって言ってるのに……」

それは本当だ——女性になったとは言っても、胸はさらしを巻けば簡単に誤魔化せてしまう程度のふくらみしかない。

加えてゆったりした上下を身につけているから、伽羅が女だと一目で看破するのは難しいはずだ。だから、なにも部屋をふたつも取る必要はないと伽羅も言ったのだが、セイタマールは

聞く耳を持たない。

いつだって「そんなわけにはいかない」の一点張りだ。

決して譲らない彼は、ひと部屋しか取れなかった時は、廊下で眠るという徹底ぶりだ。

ほんの数カ月前までは、同じ部屋でベッドに腰を下ろしたまま、夜更けまで話しこむことも珍しくなかったというのに……あまりの違いに泣きたくなる。

今回もセイタマールは譲る気はないのだろう、イーダルドの言葉を流すと、「行くぞ」と言ってさっさと歩き出してしまった。

ついていく格好になった伽羅の隣で、少年は口を尖らせた。

「兄ちゃんもさ、なんであんなに意固地かな。男だろうと女だろうとちいちゃんがちいちゃんであることに変わりはないのに、性別にこだわるなんて器が小さい証拠だぜ」

最後に舌を出して「べー」というところが、なんとも子供らしい。

思わず笑いながら、伽羅は「イーダルド」と声をかけた。

「違うんだ。セイにとっては、大変なことなんだ。だから、そんなことを言わないでくれ。あのひとが優しいのはイーダルドだって知ってるだろう？」

これは子供も否定しなかった。

だが、伽羅への態度にはやはり腹が立つらしく、「でもあんな態度ってないだろ」とぶつぶ

つと不満を零し続ける。

（良い子だなぁ）

そんなイーダルドを見ながら、伽羅はしみじみと思う。

女性になったことがセイタマールにばれてしまって以来、はっきりと線を引くようになった彼に対して、どう対していいのかわからなくて途方に暮れていた伽羅にとって、この子供の存在は大きな救いとなっていた。

子供らしい正義感で、自分を慰め、守ろうとしてくれる姿はいじらしいほどに一所懸命で、抱きしめたくなるのも度々だ。

そんなことをすればイーダルドが嫌がるのがわかっているので実際にはしないけれど。

（本当に、イーダルドがいてくれて良かった……）

心からそう思い――そして伽羅はまた息をついた。

セイタマールの態度は未だ和らぐ気配もない。彼の頑固な性格を思えば――これはひとのことは言えないのだが――このまま那八まで……ということも考えられる。

（何とか、それだけは回避しないと）

那八に戻れば、彼は問答無用で伽羅とのコンビ解消に踏み切るに違いない。

そうなる前に、何としても懐柔……もとい、和解の糸口を摑まなくては。芭蕉から自由にな

っても、組む人のいない那八で留守番三昧の日々を送るのは御免だ。
（……だけど、一体どうしたら……）
その糸口は見つかるのだろう。
いくら考えても、伽羅にはそれがわからない。
焦る思いを抑えながら、伽羅はセイタマールの背中を見つめた――。

「ちいちゃん、街に出よう！」
と、イーダルドが言い出したのは、セイタマールの希望通り、ふた部屋を確保できる宿屋に落ち着いてから半刻後のことだった。
セイタマールはこの街の地神神殿に出かけていて留守だ。
当然、伽羅は素直に頷けなかった。
「いや、わたしはセイが戻ってくるのを待って……」
いないと。
言いかけた伽羅に、イーダルドがちちち、と舌を鳴らした。

「駄目だよ、ちいちゃん！　そんな消極的じゃ、兄ちゃんに主導権握られっぱなしのまま、気がついたら目的地に着いてましたってことになるぜ。ちいちゃんの性別がばれたら拙いのって、芭蕉国内でのことなんだろ？　ここはもう響波なんだし、積極的に行こうよ！」

言われていることは正論なのだが、セイタマールが「もう響波」ではなく「まだ響波」と考えているのが伝わってくるため、やはり伽羅はすぐには頷けない。

しかし、彼の言葉が胸にぐさりと来たのは事実だった。

（確かにこのままじゃ、気がついたら那八でしたってことは充分考えられる……）

そうしたら即座にコンビは解消だ、セイタマールはきっと譲ってはくれない。

だが、まだ芭蕉に近い地域で、彼と別行動を取ることには躊躇いを覚える。決してわざとではないのだが、伽羅はセイタマールがそばにいないと、なぜか厄介事に巻き込まれやすいのだ。財布をスられるだけで済めばまだ御の字、肩にかけていた荷物をかっぱらった泥棒を追いかけていたら、なぜか逆に襲われて人気のない倉庫に閉じ込められたこともあった。

その時は、後見人のやり方を見習い、風霊に自分の居場所を相棒に伝えてもらうことで——お礼は杉石の聖石の子供石だった——事なきを得たのだが、こっぴどく叱られた。

『お前は自分のことに無頓着すぎる！　そんな細っこい体で大人の男相手に何ができる！　多少の護身術なんぞ、数人で来られたら通用しないに決まってるだろうが！』

あの時のセイタマールの剣幕は……凄かった。

確かに彼の言葉通り、人通りの少ない道に誘いこまれた挙句、待ち受けていた数人の男にあれよあれよという間に捕まって縛り上げられてしまったのだ。

男たちの目的が伽羅の儚げな容姿にあり、金持ちの好事家に売り飛ばすつもりだったのだ……ということを、伽羅は未だに知らない。いや、たとえそのことを告げられたとしても「物好きもいるものだ」ぐらいの感想しか抱かないのは確かだが。

セイタマールがそばにいない上に、イーダルドに関しては伽羅に責任がある。やはり揉め事を引き寄せる体質を考えれば、下手に動かないほうがいいのではないか……。

そう、思いかけた時だ。

ばん、とイーダルドが拳を壁に叩きつけた。

「ちいちゃん！　今のちいちゃんはおれが神殿のおじさんから聞いたちいちゃんとはまるで別人だ！　おれが会うのを楽しみにしてたちいちゃんは、こんな臆病な怠け者じゃない！」

迸るような気迫に、伽羅は思わず姿勢を正した――ちょっとだけ気になったのは、『神殿のおじさん』とは誰のことだろう、ということだったが。

「イ、イーダルド……」

「おれが聞いたちいちゃんはっ！　昔辛いことがあって、二度と相棒なんて持つもんかって意

地になってやさぐれてた兄ちゃんにっ！　邪険にされても邪険にされても邪険にされまくってもっ！　へこたれないで食らいついてって、意地と根性であのおっかない兄ちゃんの相棒の座にどっかり座り込んだっていう、とんでもなく強心臓で度胸のある漢のなかの漢だった！　おれは本当に尊敬したんだ！　あの兄ちゃんに食らいついて放さないだなんて、なんて格好良いひとだろうって……ますます会ってみたいって！」

褒め……られているのは確かだろう――とは思う。

思うが。

（強心臓で度胸のある漢のなかの漢って……）

いたいけな子供にそんなアダな憧れの種を平気でまきそうなおじさんの心当たりはひとりしかいない。

（シイレートルさま……一体この子にどれほど話大きくして聞かせたんですか!?）

当人は芭蕉の神殿で、今現在も昼行灯を気取って怠けまくっているに違いない。

そう思うと、なぜか自然に笑いがこみ上げてきた。

「い、意地になってやさぐれてとか……邪険にされまくってもとか……もう、あのひとは何て言い方をするんだか……！」

噴き出しながら、伽羅は二年前のことを思い出した。

あの時、自分にとってはセイタマールが最後の藁だった。正しく溺れる者が縋るように、セイタマールの迷惑など顧みず、ひたすら口説いて口説いて口説きまくった。

セイタマールの過去も心に負った傷のことも知らなかったからできたことではあったけれど……二年経った今でも、望むことは結局変わらないのだ、と思い知る。

あの時は、彼を逃したらもう誰と組むこともできず、神殿に閉じ込められると思って必死だった。彼がなぜ四年も満足に仕事を拒み続けているのか、そこにどんな葛藤があるのか——何も知らずに那八に押しかけることを決めた。

那八に着いてから、過去の事情を知ったけれど、それでも諦めるつもりは皆目なかった。

あれから二年——それなりに経験を積んで、セイタマールのこともある程度はわかるようになって……だから、動くに動けなくなってしまったのだけれど。

自分の素直な望みに目を向ければ、それは二年前と大して変わってはいないのだ。

自由を望む。束縛と支配を嫌い、拒む。

二年前と違うことがあるとしたら、組むひとがセイタマールしか残されていないから、ではなく、彼としか組みたくないと強く思うようになったことだろうか。

（そうか）

と思った。

自分の本質は、かなり……というか、物凄く我が儘で身勝手なのだと再認識する。

（自由でなきゃいやだ。セイと組んで外で働きたい……セイがいい。セイじゃなきゃいやだ……セイがたとえイヤだと言っても！）

何が何でももう一度口説き落とす！

完全に開き直った伽羅だった。

そして、一度浮上してしまえば、伽羅の頭脳は——情報をもとに理論を構築した上で推測するのはセイタマールより得意だ——やはり拭いがたい情報不足を訴えた。

「目が覚めた」

伽羅はそれまでの悄然とした様子が嘘のような晴れ晴れとした表情で呟くと、きっかけをくれたイーダルドの両手を握りしめた。

「ありがとう、イーダルドの言う通りだった！　セイを相手に怯んで縮こまってたら、はなから勝算なんてあるはずないんだから、ここはまず動くべきだった！　イーダルドは偉い！　イーダルドは凄い！　さあ、一緒に街に出よう！　情報なんて、どこに転がってるかわからないんだから、拾い集められるだけ拾い集めなくては！」

一気にハイテンションに転じた伽羅の様子に、イーダルドは少しだけ口元を引きつらせたが……それはほんの一瞬だった。

嬉しそうに破顔して、「それでこそ漢のなかの漢！」と何だか微妙な賞賛の声を上げたあと、心底ほっとしたような顔で呟いた。

「良かった……兄ちゃん、芭蕉を出てから何だか急いでるみたいで、正直兄貴のことほんとに捜してくれるかどうかちょっと不安だったんだ。でも、今のちいちゃんなら信じられる。ちいちゃんなら、きっと兄貴のことを捜しだしてくれるって……たとえ……」

声は、途中で言葉にならなくなった。

盛大な嗚咽としゃっくりの連発で、イーダルドの口から洩れるのは意味不明な声交じりの音のみとなってしまったのである。

6

弥琴の街に出て、伽羅とイーダルドがまず始めたのは、大通りに並ぶ露店を覗くことだった。

旅行客であるかのように物珍しげに店を覗くだけの行為に、子供はどんな意味があるのかわからないらしく、ほどなく伽羅の袖を引っ張って尋ねて来た。

「ちいちゃん……疑うわけじゃないけど、もしかして気晴らしに店覗いてるだけなんじゃないだろうね？」

疑うわけではないといいながら、瞳にはしっかり不安が浮かんでいる。

「違うよ……こういう店の中にはね、広い情報網を持ってる店主が混じってることがあるんだ。店の品を見れば、大体どの店の主がそうか、ある程度見当をつけることができるんだよ」

そうこっそり答えながら、伽羅は「おいで」とイーダルドの手を引いて歩き出した。

それは、先ほど覗くだけで通り過ぎた露店だった。

鮮やかな赤い綿繻子の上に、色石を用いた装飾品が所狭しと並べられている。先ほどは年頃の娘たちが何人も集まっていたため通り過ぎたのだ。

「たとえば、この店だけど……ちょっと店主はうっかりさんのようだけど、いろいろ知っていそうだなというのが、この指輪でわかる」

銀の台に小粒の鈍い緑の石が嵌められた指輪は一見何の変哲もないものだ。

しかし、伽羅の目にはそれは充分変哲のある品だった。

「御店主」

商品の並ぶ台の向こうで、何かを探すようにごそごそやっている男に伽羅は声をかけた。

「はいよ……おっと、その指輪に気づくだなんて、坊ちゃんは目が高い。その石は砂金水晶と呼ばれる珍しい石でしてね」

滔々とそのまま説明に雪崩れ込みそうな勢いの店主を押しとどめ、伽羅は「知ってる。だから手に取ったんだ」と答えた。

店主は感心したように「目利きだねぇ」と洩らすと、提案をひとつ持ちかけてきた。

「なあ、坊ちゃん。実は同じ石でもっと澄んでて大きな石があるんだが、そっちはどうだい？珍しい石には違いないが、これは品質的には今ひとつでな」

そう言い、足下に置いていた荷物に手を伸ばしかけるのを伽羅は止めた。

「いや、これがいい。これが気に入ったんだ」
店主はなぜか、一瞬困ったような顔になり、それから慌てて「そうかい」と頷いた。
「じゃあ、目利きの坊ちゃんのために、特別に綺麗な包装をしてやるから、ちょっと貸してくれ」
と言って手を伸ばして来るが、これにも伽羅は頷かなかった。
隣ではイーダルドが不思議そうな顔をしているが、構わず店主との会話を続ける。
「いや、それも結構だ。別に贈り物にするわけでもないし……」
(どうやらこれは、本気でうっかりしてたみたいだな)
と判断し、声をひそめて囁いた。
「それにしても、こんなところで聖石の子供石を見つけるとは思わなかった」
と――。
途端に店主の顔が強ばった。
「な、なにを……!? ば、馬鹿なことを言っちゃ困る。これはそんな大層なもんじゃねえよ! 言いがかりをつける気なら帰ってくれ! 品の良さそうな坊ちゃんだと思ったのに、なんてことを言いやがるんだ!」
そう言いながら、店主は伽羅に手を伸ばして来る――。



「言っておくが、わたしは別に神殿の回し者じゃない。この石も、邪気や瘴気に侵されている様子はないから無理矢理回収するつもりもないし……故買というのならともかく、転売された品までどうこうする気はない」

その言葉に、店主ははっとしたように伽羅の顔を凝視した。

「もしかして、坊ちゃんは聖石の子供なのか？　だからこれのことが一目でわかった……？」

答える代わりににっこり笑うと、店主はほう、と息をついた。

「驚かさないでくれ……神殿の手入れかと思ったじゃねえか。言っておくが、これは知り合いから質流れ品だってことで譲ってもらったんだ。おかしいな、今日は店に並べたつもりはなかったのに……もしかしたら、坊ちゃんに呼ばれたのかな」

店主の言葉に、伽羅はもしかしたらそうかもしれない、と思った。

石には不思議な力が宿ることがある。聖石の子供石は奇跡の石だ……あり得ないことではない。

「……もしかしたら、元の持ち主のところへ帰りたがっているのかもしれない。台もデザインも古い作りだから、家に代々伝わってきた石かもしれないし……」

大切にされれば石は応えるものだから――。

呟くように答えると、店主は「冗談じゃねえ、こんな調子で今度は神官呼ばれたら堪らねえ

よ、坊ちゃん引き取ってくれ」と言い出した。
伽羅に異存はなかったので、財布を取り出すと適正な代価分の硬貨を支払った。
そうして、伽羅はようやく本題を切り出したのである。
「ところで、最近聖石の子供石の天河石が神殿以外のルートで出回ったという話を聞いたことは？」
この言葉に、隣にいたイーダルドがぴくりと反応した。
天河石は――イーダルドの捜し人サンネイドが生まれた時に抱いていた聖石の名前だったのだ。

「ちいちゃん、ちいちゃん！　あれ何!?　あのおっさん兄貴のこと、何か知ってるのか!?　だったらもっと突っ込んで尋ねないと！」
件の店を離れ、通りを歩き出した伽羅の腕を摑んで、イーダルドは必死に言い募った。
ありふれた装飾品を扱う露店に足を止めた伽羅が指輪に手を伸ばした時は、（ちいちゃん、やっぱり女のひとだし、こういうのに興味があるのかな）と少しだけ苛立たしく思ったのだ

が、それが聖石の子供石を使った品だと知って、早合点した自分を恥じた。

だから伽羅が何を言ってもじっと我慢して任せていたのだ。

伽羅が店主に天河石のことを尋ねた時は、思わず息を詰めてしまった。

しかし、イーダルドの期待は裏切られ、店主は「さあ、聞かないな」と肩を竦めただけだった。

だが、先ほど店主が狼狽えて伽羅を誤魔化そうとしていたことを思えば、その言葉だって素直には信用できない。きっと伽羅はもっと突っ込んでくれるだろうと思っていたのに、なぜか黒髪の使徒さまは「そうか」と頷くと、あっさり店を離れたのだ。

とてもではないが、イーダルドは納得できない。だから伽羅の腕を摑んで戻ろうと訴えたのだ——が。

伽羅はゆっくりと頭を振った。

「イーダルド、少し落ち着いてくれ。あの店主は天河石のことについては本当に何も知らないよ。目を見ていたからわかる」

「でも！　じゃあ、何でちいちゃんはわざわざあんなことを訊いたんだ!?」

そのことにどんな意味があるのか、全然見当がつかないイーダルドとしては苛立ちを抑えきれない。

そんな彼の肩を、伽羅が軽く叩いた。
「店主にはああ言ったけれど、本当は聖石の子供石の転売もあまり褒められたことじゃないんだ。店主も勿論そのことは知っていたはずだ。知っていて、それでも転売品を扱っていた……そういうひとはね、自分が手を染めてなくても、もっと悪質な……盗品と知って売ってるような人たちともつきあいがあったりするんだ。故買屋は明らかに犯罪だから、その分情報には敏感で率先していろいろ集める。警邏や神殿の動きを先読みするためにもね。だから、そういう人たちとつきあいのあるあの店主は、ある程度裏の情報に通じていると見て間違いない」
「だったら！　なおさらもっと突っ込んで訊けば、もしかしたら何かわかったかもしれないのに！」
どうしても得心が行かず、イーダルドはそう主張した。
しかし、そんな彼に伽羅は「ちゃんと大事なことはわかったよ」と答えたのだ。
意味がわからない。
イーダルドはきょとんとして伽羅を見上げた。
「わかったって、何が？　あのおっさん、天河石のこと聞かないって言っただけじゃないか」
「だから、あの店主が裏のルートで天河石が流れてる話を聞いていないということは、少なくともこの近隣で不法に流出した天河石はないということなんだ。イーダルドのお兄さんが組織

ぐるみの犯罪に巻き込まれていないという証拠と言っていいかな。もし、お兄さんの天河石目当てに攫われたんだとしたら、誘拐犯はお兄さんが生み出した天河石を闇の流通経路に乗せるだろうからね」

淡々とした口調で説明されれば、ああなるほどと納得する。

（でも……たったあれだけの遣り取りで、そんなことがわかるなんて、ちいちゃんってもしかして、物凄く頭がいい……？）

それとも自分の頭が悪いのだろうか――。

ちょっと落ちこんだイーダルドである。

だが、それ以上にほっとした。

消える理由がないあのひと――サンネイド。使徒にはなれないと言われたそうだけれど、他にできることがあるからと手紙に書いてきた三つ年上の少年。

彼が神殿から姿を消したと聞いた時、真っ先に疑ったのは悪いひとに拐かされてしまったのではないかということだったから。

伽羅が聖石の子供石目当てに悪い組織に捕まったわけではなさそうだ――と言ってくれたことで、本当に安心した。では、なぜサンネイドがいなくなったのかという疑問は大きくなったのだけれど。

（でも、悪い可能性はひとつ消えたんだ）

少しだけ心が軽くなった。

イーダルドは引っ張っていた伽羅の腕を放すと、「なあ、ちぃちゃん」と声をかけた。

「これからどうするの？　また同じような店を当たってみる？　それとも違うやり方とか試してみるの？」

うきうきして尋ねたのは、頭のいい伽羅なら、この調子でもっといろいろなことを調べてくれるのではないかという期待があったからだ。

イーダルドには想像もつかない方法で、あっという間にサンネイドの行方を突き止めてくれるのではないか、と――。

しかし、それは期待しすぎだったらしい。

瞳を輝かせるイーダルドに、伽羅はすまなそうに「いや、これ以上は目立ってしまうからやめておく」と答えたのだ。

「目立つといけないの……って、もしかして兄ちゃんに言われてんの？　目立つなって」

もう芭蕉じゃないのに――。

口を尖らせてセイタマールへの不満を洩らし始めたイーダルドに、伽羅が「それは関係ないんだ」と言った。

「わたしはなぜか、質のよくない連中に目をつけられやすいらしくて、以前も捕まって倉庫に閉じ込められたことがあって……。それ以来、セイには目立つな、暴れるなってことあるごとに言われるようになったんだ」

告げられた内容に、イーダルドは思わず伽羅の顔をまじまじと見つめてしまった。

(なぜか……って、そんなのちいちゃんが滅多にいないぐらい綺麗で細っこくてか弱そうだからに決まってるじゃないか)

人さらいの悪党から見れば、こんなに魅力的な獲物はないだろう——少年にしか見えない格好をしていてもそうなのだから、これで伽羅が娘らしい衣装など纏ったら……とてもひとりで外には出せないだろう。

そう思えば、確かにこれ以上伽羅に目立つ真似をさせるべきではない……少し惜しい気もしたが、イーダルドはそう判断した。

(ちいちゃんに何かあったら大変だしな)

サンネイドのことは心配だが、伽羅のことだって放っておけないぐらいには気に入っているのだ。

だが、このまま宿に戻るのはもったいなかった。

ようやく伽羅が浮上してくれたのだ、宿に戻ってまた落ち込まれても困るし、そんな姿はも

う見たくない。
だからイーダルドはこう提案した。
「そうだね……だけど、せっかく街に出て来たんだから、もう少し見て回ろうよ。広場に行けば歌手や演奏家の卵が出し物演ってるかもしれない。卵と言っても将来有望な才能のあるやつが混じってることもあるから、なかなか馬鹿にできないんだぜ。それにみんな耳が肥えてるから、あんまり下手な奴らは演ってないはずだし……な、ちいちゃん、行ってみようよ」
と。
伽羅は少し躊躇うような素振りを見せたが、結局こくりと頷いた。
そのままふたりで広場を目指し、歩き出した時だ。
数歩先の露店から、かちん、と澄んだ硬質な音が洩れ聞こえて来た。
そちらに目を向けるが、数人の客が邪魔になって音源の正体は見えない。
（なんだろう？）
音楽の国響波に生まれ育ったイーダルドが、これまで聞いたことのない音に興味を惹かれるのはごく当然の成り行きだった。
「ちいちゃん、ちょっとだけあの店覗いてもいいかな？」
はぐれないように——伽羅が、だ——手を繋いだまま、年上の綺麗な連れにそう尋ねるの

と、店のほうから怒ったような声が聞こえて来たのはほとんど同時のことだった。
「駄目だって！　なにやってるんだよ！　石同士ぶつけて石が割れたらどうしてくれるんだ！　扱い方がわからないなら、手ぇ出すんじゃない！」
恐らくは露店の主なのだろう――まだ若い男の声が周囲に響き渡る。
（石同士……って、あれは石と石をぶつけた音だったのか……）
どうりで硬い音だと思った。
けれど、普通に道ばたに転がっている石ではないだろう。路傍の石をぶつけたところで、かちかち鳴るのが関の山だ。
その時、伽羅がぽつりと呟いた。
「……玉響、か」
そして黒髪の美貌の使徒は、自分からその店へと足を進めた。
（玉響……？　何だろう……ちいちゃんって、ほんと物知りだよなぁ）
手を引かれる格好で、あとをついて歩きながらイーダルドは感心していた。
勿論、あとで意味を教えてもらうつもりだった。

7

弥琴の北西部の丘陵に建てられた地神神殿は、街中の喧噪が嘘のような静けさに包まれていた。

セイタマールはまだ作成途中の報告書を懐に、静かに目を瞑った。

遠くに玉響の響きを感じる――澄んだ純粋な音には浄化の力が宿るのだ。人の手垢のついていないある程度硬い石であれば、ぶつかり合わせることでちょっとした邪気ぐらいは浄化することができる。セイタマールも伽羅も、一番手軽な浄化法としてそのことを教えられていた。使徒たることが定められたふたりには、常に一定数の聖石の子供石を与えられていたから、その効果は一般的な玉響とは桁違いだったが。

しかし、玉響による浄化には欠点がある。

石同士をぶつけ合うということは、何度も衝撃を加えるということだ。石によっては砕けてしまうものもある。その響きは澄んではいるがごくごく儚いものであるため、一度きりでは充

分な浄化の波動を周囲に届けることができない。必然的に、浄化に際しては幾つもの石による複数の玉響が必要となる。

いかに奇跡の石と呼ばれる聖石の子供石であろうと、全てが衝撃に強いわけではない。翡翠ならその点は心配ないだろうが、翡翠を抱いて生まれる子供は非常に少ない……稀と言ってもいいほどだ。当然その子供石も稀少で貴重なものとされている。

いつ損なわれてしまうかわからない玉響の浄化には使えない。

そうしたいくつかの理由で、神殿で玉響による浄化を行うところは少ない。音楽を愛し、音に拘る響波の神殿ならではのことだろう。

（……まあ、香も焚いているようだが）

石の負担を少しでも減らす工夫はしているようだ。

清浄な空気が満ちる空間で、セイタマールはそっと息をつく。

思い出すのは宿に残してきた伽羅の泣きそうな顔だ。この数日というもの、伽羅の笑顔を見た覚えがない……そうさせているのは自分だという自覚はあるが、あの相棒にまともに喋らせるといつの間にか負けてしまうことを知っている以上、こうするしかない。

（あんな顔をさせたいわけじゃない……）

二年の間に、伽羅はよく泣きよく怒りよく笑うようになった。

初めて会ったころの仮面のような笑顔は最近では浮かべることさえなくなった。それが伽羅にはよく似合うと思う。作り物のよい子の仮面などより、ずっと伽羅を生き生きと魅力的に見せてくれる。

できるなら、ずっと伽羅と組んで行きたかった。向こう見ずで無茶苦茶で一時も目が離せない危なかしさはあるが、あの子供がそばにいると自分が狩人であることを忘れることができた。

大きすぎる瘴気に取り込まれ、後戻りできなくなった同胞を狩る人間であるという忌まわしい事実から遠ざかっていくような気がしたのだ。

だが、伽羅が女性になった以上、もうそばにいることはできない。

篤すぎる水の加護を受け、黒珊瑚を抱いて生まれてきた聖石の子供――喪月神に最も狙われやすい星の下に生まれてきた伽羅が女性になった今、誰よりも自分こそが彼女に害を及ぼす危険な存在になってしまったのだから。

強すぎる月の影響を受けることになる彼女は、いつ喪月神に目をつけられるかわからない――今はまだ想像もできないが、いずれ恋でもすれば、その心身は不安定にならないとも限らない。伽羅が幸せな恋をするなら、いい。

だが、喪月神は駒となる存在を得るのに手段を選ばない。

幸福な恋の日々が一瞬にして絶望の奈落に変わらない保証はない。そうした時、もしも彼女の心が喪月神の手に堕ちたなら……。

考えたくもないが、その時自分は彼女の命を狩る爪を振るわなければならない。そばにいる自分が、彼女を殺すのだ！

（それだけはイヤだ。あんな思いは二度と御免だ）

一度で充分だ——かつて相棒の女性の命を奪ったあと、自分は四年もの間分身にも等しい剣を振るえなくなった。

もう一度剣を握らせてくれたのは伽羅だ。

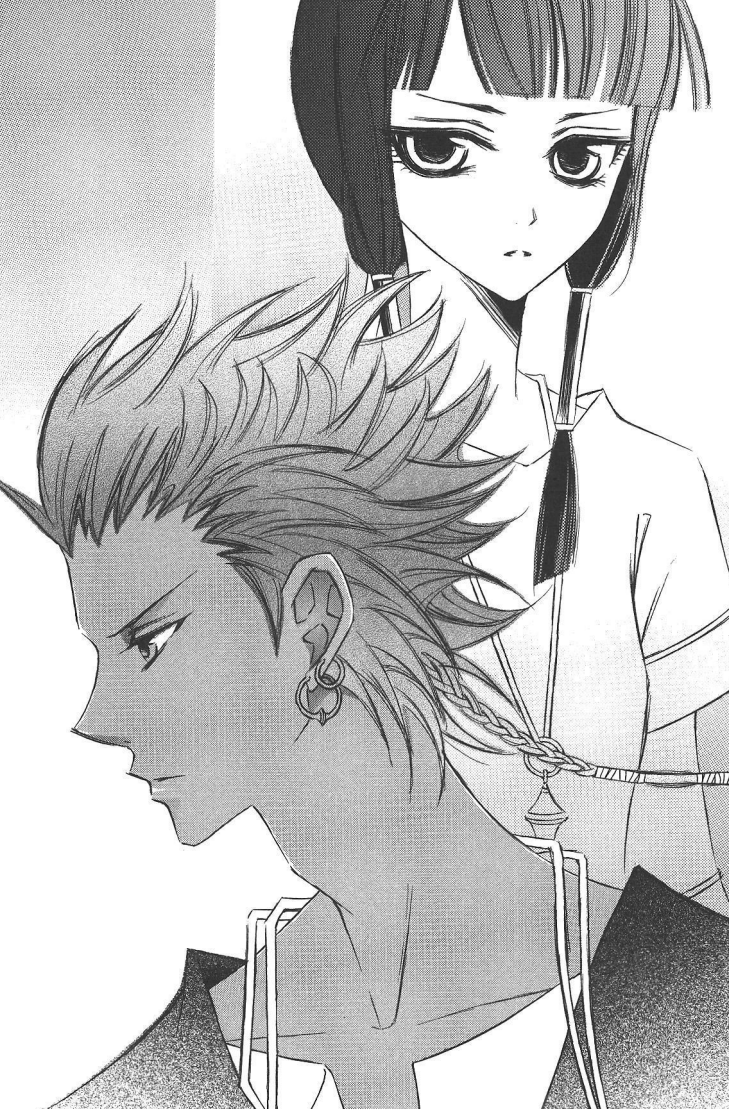
伽羅が体を張って「大丈夫だ」と言いきってくれたから、瘴気を断つ刃を振り下ろす勇気を持てた。

伽羅が現れなければ、自分は二度と剣を取れずにいただろう——だのに、ようやく受け入れた剣を、今度は伽羅に向けなければならなくなるかもしれないのだ。

（冗談じゃない）

それは、あくまで仮定でしかない。

伽羅が喪月神に狙われるとは決まっていない。彼女が瘴気に蝕まれるとは限らない。彼女を斃す役目が自分に回ってくるかどうかはわからない。



全てセイタマールの気の回しすぎかもしれない。杞憂も過ぎると言われるかもしれない。

だが、思い出すだけで血の凍る瞬間があるのだ。

瘴気だけを浄化し、相棒の身を傷つけることはないと信じて振り下ろした剣の下で、ラークラーニは真紅の血を流した。

『あなたの剣が生身ごと葬り去るのは……恐ろしい喪月神に見込まれてしまった者だけ』

知っていて、セイタマールに斬らせたのだと言った。

このままでは喪月神の傀儡と化し、自らの娘を手にかけてしまうかもしれないから、彼の手にかかることを選んだのだと。

初めての相棒で、初めての仕事でのことだった。

もしも同じことが伽羅で起こってしまったら……？

到底自分は耐えられないだろう。それでももし伽羅が望んだら、きっと自分は刃を振るう……そうして心が壊れるのだ。

（駄目だ、どうしても……！）

そばにはいられない——。

何度考えても、セイタマールはその結論にしか辿り着くことができなかった。

自分が臆病者であることを、誰よりも彼自身が知っていた——。

「いいか、この石はこうやって使うんだ。気持ちの悪い場所とか、暗く感じる場所とかあるだろ、そういう場所でだな、こう――軽く触れ合わせて」

数人の客の前で、二十代半ばの露店の主は、右手に音叉、左手に半貴石――黄水晶だろうか――を持って、そっと両者を近づけた。

触れたのは一瞬だ。

だが、その瞬間りーん、という澄んだ響きが辺りに広がった。

おお、と感心する声が客たちから上がると、青年は気を良くした様子で得意そうにこう続けた。

「この音が悪い気を追い払ってくれるから、場所は清められるってわけだ」

「へえ」

イーダルドとともに見物していた伽羅は、驚きに軽く目を瞠った。

（玉響より、ずっと長く……つまり広く届く。誰が考えたか知らないが、よく思いついたものだ。あれなら神殿でも活用できる）

意外な場所で意外な掘り出し物を見いだし、伽羅は素直に感心していた。
だが、隣にいるイーダルドは少し違う感想を抱いたらしい。
「ひでぇ音」
ぴしゃりと言いきる声は冷ややかだった。
それは小声ではなかったから、当然店主の耳にも入ったようで、やや気の短そうな青年がじろりとイーダルドを睨みつけた。
「おい、そこの坊主、お前今なんて言った!?」
地を這うような低い声には、深い怒りが宿っていた——売り物にけちをつけられたのだから無理もない話だが。
しかし、イーダルドはそんな声にも怯むことなく繰り返した。
「ひでぇ音だって言ったんだよ！　なんだよ、その音叉モドキ！　全然音が伸びないじゃないか。適当な合金を適当な型に流し込んで適当に作ったのがもろわかりだっての。偉そうに客の前で音を披露するんなら、せめて最低限でもきちんとした音の出る音叉でやれよな」
こと音に関することで、イーダルドは譲る気はないようだった。
（そういえば、耳はいいって自慢してたな。でも、さっきの音を聞いてこの感想だなんて……良いなんてレベルじゃないぞ）

伽羅だとて、きちんとした作りの音叉でないことぐらいは気づいたが、その斬新な方法に目が行ってしまい、特に気に留めなかったのだ。

イーダルドの言葉に激怒するかと思いきや、店主の青年はイーダルドの顔をまじまじと見つめたあと、バツが悪そうに頭を掻き出した。

「あー、坊主、耳が抜群にいいんだな。こいつは失敗した……とんだもんを聞かせちまって悪かったよ」

青年の突然の態度の豹変に伽羅は驚いたが、なぜか周囲は当然のことのように受け流していた。

あとで聞いた話だが、響波では優れた歌手や奏者と同じぐらい、良い耳を持つ人間が認められるものらしい。

優れた耳をもつ観客こそが音の芸術家たちを育てるのだということを、この国の人間はよく知っているのだ。

「わかればいいんだよ」

そうした扱いは、イーダルドも慣れているのだろう——悪びれる様子もなく胸を張って言いたいことを言っている。

若い店主は微苦笑を浮かべると、懐から売り物とは違う音叉を取りだし、こう提案した。

「耳直しにこいつの音を聞かせてやるよ。楽器の調律にも使われる立派な音叉だ。これにな、こうしてさっきの石を、こつんって感じで触れあわせて……と、何するんだ!?」

いきなり持っていた石を取り上げられ、青年が慌てる声を上げた。

「ちいちゃん?」

店主の手から石を奪った格好になった伽羅を、イーダルドも驚いたように見上げてくる。

伽羅は小さくにこりと笑うと、「せっかくなら、この石が出せる一番いい音を聞いてみたいからな、ちょっとしたひと手間をかけさせてもらう」と告げた。

(持ち歩いていてよかったな)

と思いながら懐から取りだしたのは、小さな茶色の瓶と手巾だった。

瓶の蓋を口で開けると、器用に片手で中身を数滴手巾に垂らし、再び蓋をする。

ふわり、と深い香りが辺りに漂った。

「……神殿で嗅いだ匂いだ……もしかして、香油?」

イーダルドが首を傾げながら問いかけてくるのに、「乳香の精油だよ」と答えながら、油のついた布の部分で、店主から取り上げた黄水晶を軽く拭き上げた。

そして、それを店主の手に戻すかわりに、台上に並んでいる音叉モドキのひとつを取り上げかちん、と触れあわせたのである。

すると、だ。

チ、リーン……。

先ほどとは比べものにならないほどに澄み渡った音色が長く長く響き渡った。

伽羅は悪戯に成功した子供のような笑顔で、イーダルドに感想を聞いて見た。

「これもひどい音、か？」

子供はぶんぶんと頭を振って否定した。

「何、これ！　さっきと音が全然違う！　音叉の出来が良くないのは元のままだけど、響きがすごく、伸びて広がって！　ちいちゃん、ちいちゃん、何で油で拭いただけでこんなに違うんだ!?」

「それはおれも是非聞きたい！」

店主まで身を乗り出してきたのに少々驚きながら、伽羅は簡単に説明した。

「石についた手垢を取ってあげただけだよ。手垢といっても実際の汚れではなくて……こうした石は掘り出されてから加工され、店に並ぶまでにいろんな人間が触れてきているから、そのひとたちの気配や思念が少しずつ染みこんでしまっているんだ。それをわたしたちは手垢と呼んでるんだけど、乳香の精油には浄化作用があるからね、拭いただけで元の綺麗な状態に戻せたというわけだ。他には流水にさらすとか、月光に当てるとか、色石でなかったら午前の日光

に当てるとか、浄化の方法はいろいろある。店主も、どうせ売るなら石を浄化してからのほうがいいんじゃないかな？　ひと手間で音が全然違うのはわかっただろう？」

にこりと笑って最後に店主を見れば、なぜか青年は顔が赤くなっていた。

自分の笑顔の威力を、伽羅は未だ知らないままだ。隣でイーダルドが（まずい）とでも言いたげな顔になったことにも気づかない。

「あ、ああ……そうするよ。ほんと、驚いた……全然違う。これならホントに邪気祓いぐらいできちまいそうだ」

青年の洩らした言葉に、伽羅は小首を傾げた。

「純粋な音には場を浄化する力があるから、確かに浄化に使えるとは思うが……御店主、ホントに、とはどういう意味だ？」

声が少し低くなる――そのことで、青年は自分の失言を悟ったようだ。

しかし伽羅は手加減しなかった――場所の浄化は時に命に関わりかねない重要な意味を持つ行為だ。

確かに手垢のついた石と安い作りの音叉では、あまり効果は期待できないだろう。だが、それは結果であるべきだ。販売している青年が、信じてもいない効果をうたい文句にしていたとなれば話は大きく違ってくる。

「もしかして、客を騙して売りつけるつもりだったのか？」

周囲の客には聞こえないように声を潜めたのは、一応青年に弁解の余地を与えるためだった。

本人が半信半疑であっても「絶対に効果があるから」と仕入れ先に保証されたという線も考えられる以上、短気を起こすべきではないと思ったのだ。

「違う、違う！　いや、確かにおれ自身はそういう感覚が鈍いからまるごと全部信じてるって言ったら嘘になっちまうけどっ！　これは、もっと南のほうですごい人気なんだよ。何でも隣国の白谷に、何本もの音叉と何十種類もの石を組み合わせて浄化力ばっちりの不思議な音曲演奏家がいるってんで、そいつの演奏を聴いて感激したやつが、同じようなものが欲しいって言い出したのが流行のきっかけらしいけど……」

おれはその街で売ってるのと同じ物を仕入れてきただけだ！

決して騙すつもりはなかったのだと、青年は必死に言い募った。詐欺扱いされてはたまらないと思っているのだろう。

その様子に嘘をついている様子はなかったので、伽羅はそれ以上追及はしなかった。

「仕方ねえ兄ちゃんだな」

呆れたように洩らすイーダルドも、怒っているようではなかったので同じ意見なのだろう。

売る前に石をしっかり浄化することだけ約束させて、あとは放免してやろうと伽羅が思ったときのことだ。

イーダルドが真剣な顔で青年に問いかけた。

「ところでさ、その演奏家って何て名前だか知ってる？　それと、そいつって白谷でしか活動してないのかな？　響波で演奏会なんて開いてないのかな？」

矢継ぎ早の質問に、青年は「いっぺんに聞くな！」と叫んだあと、意外と親切にひとつひとつ答えてくれた。

演奏家の名前はオズローン某だとしか知らないこと、南の街には貴族の屋敷に招かれて演奏会を開いたという話だったから、活動は白谷に限られないのではないかということ、もしかしたら同じように招かれて、響波の他の街で演奏会を開いたことがあってもおかしくないということ。

もっとも、答えたあとでしっかりイーダルドに理由を聞くことは忘れなかったが。

「でも何だって、そんなことを知りたがるんだ？　もしかして坊主もそいつの演奏を聴きたいのか？」

イーダルドは即答しなかった。

「……まあ、興味はあるかな。きちんとした演奏家なら、きっと音叉だって立派なものだろう

し、石だって綺麗に浄化してあるだろうから……さ。一体どんな音がするんだろうって。それを組み合わせて演奏するなんて、どんなものか……この耳で実際に聴いてみたいよなって」

イーダルドの耳の良さを知る青年は、その言い分に納得したようだ。

しかし伽羅は違った。

未知の演奏に対する好奇心というには、彼の瞳に浮かぶ光は必死すぎたのだ。

「イーダルド」

宿に戻る道すがら、伽羅はそのことを尋ねた。

「どうして、オズローン某とかに拘るんだ？」

イーダルドはやはり、すぐには答えなかった――だが、ふう、と息をついた彼は苦笑交じりに「ちいちゃんにはどうしてわかるんだろう」と呟き、そうして小さな声でこう続けた。

「ずっと忘れてたけど……兄貴がいなくなって、おれすぐに神殿に行ったんだ。ほんとは居住区に勝手に入っちゃいけないんだけど、兄貴の友達ってひとがおれに気づいてくれて、こっそり兄貴の部屋に通してくれたんだ。その時、兄貴の机の上に……音叉が置いてあった。あれ、なんで音叉なんかって思ったのに、なんでか忘れてた。でも、さっきの店の兄ちゃんの話聞いてたら、もしかしたらって思うことがあって……」

彼が何を言いたいのか、伽羅にはすぐにわかった。

サンネイドからの最後の手紙――イーダルドが見せてくれたそれは、何度も読み返されたせいでくしゃくしゃの上、結構手垢がついていた。
きっとイーダルドは全文覚えてしまうぐらいにその手紙を読んだのだ。
それならば、先ほどの青年の話でひとつの可能性が浮かび上がるのは当然だった。
サンネイドの部屋に残されていた音叉。
音叉と石を用いて不思議な音曲を生み出す演奏家――オズローン。
その演奏には浄化の力があるのだと言う。
これだけ、揃ってしまえば。
「……お兄さんが手紙で書いてきた『凄い人』はオズローンかもしれないと思った？」
こくりと頷くイーダルドは、小刻みに震えていた。
（ようやく摑んだ手がかりになるかもしれない情報……だものな。泣きたくなるのも無理はない）
だから、余計な声はかけずに伽羅は彼の頭にぽん、と手を置いた。
「子供扱いするなよ」
俯いたままで放たれた文句の声は、とても小さなものだった――。

8

「帰れ」
「イヤだ」
「か、え、れ！」
「イ、ヤ、ダ！」
「帰れと言ったら帰れ！　ここはお前の街だろうが！」
「イヤだったらイヤだ！　おれがいない間に街を出る気だろ!?　絶対ヤダ！」
留まる気配を見せない熾烈な――しかし低次元な口喧嘩が、かれこれ一刻繰り広げられているのは、響波の南東に位置する街弦歌の宿の一室でのことだ。
ツバを飛ばし合う勢いで、怒鳴り合っているのはセイタマールとイーダルドだ。
伽羅はそばにいるが、完全に傍観者に徹していた――それというのも、最初に言い争いを始めたふたりの間に仲裁に入ろうとしたところ、「お前は黙ってろ！」「ちいちゃんは口出ししな

いで！」と双方に怒鳴りつけられてしまったからだ。

数日前の伽羅であれば、セイタマールに怒鳴りつけられた時点で萎んだ花のように項垂れていただろうが、立ち直った彼女はへこたれなかった。

それなら存分に言いたいことを言い合えばいい——と、部屋の椅子に腰を下ろすと、ふたりの口喧嘩を見物することとしたのだ。

（ふたりとも、よく喉が平気だなあ）

などと暢気な感想を抱いていられるのは、セイタマールの怒りのレベルが通常のそれだったからだ。

これがもっと深刻なものであったなら、伽羅だって止めている——本気でセイタマールが怒ったら、周囲の空気の色まで変わるのだ。子供の心臓に負担をかけるような真似を見過ごせるはずもない。

だから、ふたりの言う通り放っておいたわけだが……。

そろそろ一刻だ。

（いいかげん、止めに入るかな）

そう思った矢先、イーダルドがげほげほと咳き込んだ——あれだけ大声で怒鳴り合っていたのだから当然のことではある。

伽羅は椅子から立ち上がると、水差しから水を汲み、ふたりに近づいた。今度は「退いていろ」とは言われなかった。

ふたりともにグラスを差し出すと、伽羅はずっと訊きたかったことを口にした——突然口喧嘩を始めたふたりと違い、伽羅はその原因を知らなかったのだ。

「それで、どうして帰る、帰らないの言い合いになったんだ？」

セイタマールを真っ直ぐに見つめての問いに、しかし相棒の青年はふい、と目を逸らして答えない。

相変わらずの無視攻撃だ——が、今の伽羅はここで引き下がったりはしない。

「セイ。どうして突然帰れ、なんて言い出したんだ？　そりゃあ、わたしだって弦歌がイーダルドの住んでる街だと知らないで通り過ぎてたら、やっぱり怒っただろうけど、イーダルドは昨日の夜、きちんと帰ってそれで今朝顔を出してくれたわけだし……」

そんなに怒ることは——。

と、言いかけた時、伽羅はイーダルドが一瞬気まずそうに床に視線を投げたのに気づいた。

（まさか）

と思った。

「……もしかして、家に帰ったというのは嘘だったのか？」

昨夜、この宿に入る前にイーダルドは「一度帰るよ。顔見せたら安心するだろうし、また明日来るから！」と言い置いてさっさと駆け去ってしまったのだ。

そして今朝、服を着替えて宿に現れたものだから、伽羅は疑いもしなかった。

「イーダルド……？」

しかし、答えたのは子供ではなくセイタマールだった。

伽羅を無視することを優先できないほど、彼は怒っていたらしい。

「帰るどころか……こいつは書き置きひとつ残して施設を飛び出していたんだ！　おれと一緒に芭蕉に向かうことになった時、わざわざおれの目の前で書いたお母さん宛の手紙も出していなかった！　完全な家出人を、おれたちは知らずに連れ回していたんだ。おれが神殿でその話を聞いて、どれだけ恥ずかしい思いをしたか、わかるか!?『お若い方には難しいかもしれませんが、できればご連絡のひとつもいただけていたら、メイファンが心労で倒れることもなかったと思うと残念です』と言われたんだぞ！　穴があったら飛び込みたい気分だった！」

セイタマールの激しい口調に、亀のように首をすくめていたイーダルドは、しかし「メイファンが……」のくだりを聞いた瞬間真っ青になった。

「そんな……おかあさんが……!?」

その言葉が、何より真実を示していた――イーダルドは施設に帰ってはいない。

知り合いの誰かの家で一夜を過ごし、着替えた上でここに顔を出したのだ！

「イーダルド！」

伽羅の声が厳しさを帯びた。

「帰りなさい」

「ちいちゃん……」

「帰りなさい。昨日、わたしが送っていけばよかったんだ。まさか、お母さんが倒れたのに帰らないなんて言わないだろうな？」

「だけどちいちゃん！　せっかく手がかりが見つかったのに……今戻ったら、きっと出してもらえないよ！」

確かに、家を飛び出して半月以上も手紙ひとつなかった子供が無事に帰ってきたならば、本人がいくら希望しようとまたすぐに出かけることを許す大人はいないだろう。

イーダルドはそれを恐れて帰らなかったのだ。

だが――。

「帰りなさい。そうでなければ、わたしが今度こそ送っていく。メイファンさんにお詫びと挨拶をして、事情をお話しした上で、どうするかの判断はお任せするぞ。それがどういう意味だかわかるか、イーダルド。お前が信用できないから、お前の頭を飛び越して大人のひとに任せ

るってことだ。お前はわたしの信頼を裏切るつもりなのか？」

伽羅の声は決して大きくはなかったが、イーダルドにとっては雷のようなものだったらしい——びくりと肩を震わせた子供は、固く結んだ唇から絞り出すような声で答えた。

「……帰る。ほんとに、ちゃんと帰るから……だから」

その先の言葉は聞こえなかった——もしかしたら口にされなかったのかもしれない。

イーダルドは突然駆けだし、部屋の外に飛び出して行った。

背後で遣り取りを見ていたセイタマールがぼそりと呟くのが聞こえた。

「一刻も怒鳴りあってたおれは何なんだ……」

不満そうにぼやく声は、伽羅が久しぶりに聞くセイタマールの生の感情を宿したものだった……。

何だか久しぶりにふたりきりになった気がする……。

そう思った伽羅は、それが決して気のせいではないことに改めて気づいた。

芭蕉で再会した時には牡丹姐さんと芙蓉姐さんがいた。宿に戻ったらイーダルドがいて……

それからはセイタマールに無視されまくり、イーダルドとばかり一緒にいたような気がする。
相変わらず、相棒の青年の空気は硬いままだ。
（怒っているのかな……でもある意味これは不可抗力だったわけだし……）
そろそろ怒りを解いてはくれないだろうか、と思わずにはいられない。
そうでなければ普通に会話することさえままならないのだ。これから全身全霊をかけて口説き直すつもりである伽羅にとって、会話の糸口が摑めないのはどうにも痛い。
だから、これは良い機会かもしれない——そう思い、思い切ってセイにここ数日のことを話すと同時に、彼の調査の進行状況を尋ねようとした時だ。
セイタマールは無言のまま、またしても部屋を出ようとしていた。
「ちょ、ちょっと待って！　セイ！　なんで出て行こうとしてるんだ!?　さっきは口をきいてくれたのに、まただんまりだなんてひどいぞ！」
この二年の間に、伽羅はセイタマールに対する敬語を止めさせられていた——相棒に敬語を使われるのは落ち着かないと言われて、一所懸命に直したのだ。
セイタマールは足を止めたものの、振り返りもせずに低い声で答えをよこした。
「別に……神殿に行くだけだ」
こういえば伽羅がついて来ないと知っている青年は、芭蕉を離れて以来ずっとこの言い訳で

彼女を遠ざけてきた。

それが癖になってしまったのだろう——セイタマールがうっかり犯した珍しいミスを、いい加減煮詰まり気味の伽羅が見逃すはずがなかった。

「嘘だ。さっきイーダルドの件は神殿で聞いたって言ったじゃないか。朝から出かけた先は神殿だったんだろう？　なのになぜまた神殿に行く必要があるんだ？」

伽羅の指摘に、セイタマールが小さく舌打ちする。

しかし、あくまで——ひとりで——出かけようというのか、ぼそぼそと「聞き忘れたことがあるんだ」と言い出した。

むかむかっと腹が立ってくるのを伽羅は覚えた。

女性になってしまったことに動転し、約束を破ることになった自分が悪いと思っていた頃は、セイタマールに避けられても仕方ないと思っていたが……冷静になってみれば、相棒の青年の態度はずいぶん不誠実だ。

神殿に伽羅を近づけようとしないのは、百歩譲ってよしとしてもだ。オサラディーンからふたりに命じられたはずの調査について、協力態勢で臨む気皆無なのはどう考えても問題だろう。

サンネイドの失踪に関しては、弥琴の街で手がかりらしきものを拾った。だが、言ってしま

えばそれだけなのだ。行方不明になった他の聖石の子供たちについての情報はセイタマールがっちり握ったまま、ひとつも明かそうとはしない。これでは関連があるのかどうかさえ、伽羅には判断できない。

「セイ」

「嘘じゃない。本当に聞き忘れたことが……」

「じゃあ、わたしも一緒に行く。それで、イーダルドのお兄さんが消えた時の状況も詳しく教えてもらう。実は二日前に寄った弥琴の街で、初めて手がかりになりそうな情報を摑んだんだ。だから、その確認を取るためにも――」

一緒について行く――と言いきる前に、「馬鹿を言うな！」と怒鳴りつけられた。

振り返ったセイタマールは、ぎらぎらと燃えるような怒りを瞳にたたえていた。

「芭蕉を出たからもう安全だとでも思っているのか!?　ならば、それは大きな考え違いだ。はっきり言っておくが、お前は那八に入るまで神殿には近寄るな。これはおれだけの考えじゃない……シイレートルさまのお考えだ。芭蕉のアスカニーリ神殿の耳目は大陸全土に散らばっているからと。那八に着く前にお前のことが露見したら、手段を選ばず引きずり戻す輩が芭蕉にはまだ山ほど残ってることは、お前のほうがよく知ってるんじゃないのか」

……痛いところを突かれた。

だが、だからと言って退くわけにはいかない。セイタマールの繰り出す正論にいちいち頷いていたら、何もできないまま那八に到着、足掻く間もなくコンビ解消となるのは目に見えている。

「……知ってるよ。だけど、セイがそんな風に何も教えてくれないんじゃ、自分で訊きに行くしかないじゃないか。それを駄目だというのなら、セイも情報をくれなきゃ公平じゃない……とにかく、普通に会話ぐらいはしてくれないか？」

答えはすぐには返らなかった。

だが、このままでは平行線だと——この状況で伽羅が退かないことは、さすがにセイタマールも知っている——悟ったのだろう、大きなため息をついた後、赤い髪の青年は「わかった」と不承不承に頷いた。

「よかった……」

ほっと息をついた伽羅は、知らず口元を綻ばせた。

そうして早速ふたりで情報の交換をしようとしたのだが、セイタマールの意外な言葉に息を呑むことになった。

なんと、聖石の子供たちの失踪事件と、サンネイドの件は無関係だというのだ！

「どうして！」

イーダルドの話では、サンネイドは使徒になれずとも前向きだったという――姿を消す理由などない、と。

しかし、セイタマールの話は全く違うものだった――弦歌の地神神殿の神官たちによれば、サンネイドは使徒になれないと宣言されたことに酷く落胆し、悩んでいたらしいのだ。

話が食い違っている。

「別に不思議なことじゃない。サンネイドは施設の子供たちにとって、優しく頼り甲斐のある尊敬する兄貴分だった。イーダルドもそう言っていただろう？　そんな少年が、自分の落ち込んだ姿を弟分の子供たちに見せると思うか？」

言われてみれば、もっともな話だ。

自分を慕ってくれる子供たちに、少年なら――少女でもあまり変わらないかもしれないが――自分の格好悪いところを見せたいとは思わないだろう。

いつでも頼り甲斐のある兄貴分でいたい――みっともない姿は絶対に見せたくない……見られたくない。

その思いが、サンネイドに強がりの鎧を着込ませたのではないだろうか。

そう考えれば、確かにしっくり来るのだ。

「だけど、だからって自分から姿を消す理由にはならないんじゃないのか？」

「理由はある。ある意味、サンネイドは聖石の子供として生まれなかったほうが幸せだったかもしれないな。彼はごく稀にしか子供石を生み出すことができない上、それは守り石として細工できるほどの大きさがなかったんだ。もちろん、他の石の周りに配置したり小さな石を鏤めたデザインの装飾品には需要があるから、神殿も買い取りを断ったりはしない……だが」

その先は聞かずともわかる。

一粒で守り石となる子供石に比べれば、価格はかなり落ちるに違いない。使徒となれなかった聖石の子供にとって、自分の子供石は重要な収入源だと聞いたことがある。稀にしか生み出すことができない子供石が、通常より安くでしか引き取ってもらえないとなれば、経済的には苦しいだろう——彼が施設の援助を考えていたなら、その問題は決して小さくはない。

だが、それだけでは理由として弱い。

七歳まで施設で育ったサンネイドなら、ごく当たり前に働いて収入を得るという選択肢があることを——昔の伽羅と違い——知っているはずだからだ。

メイファンだとて、彼に多額の援助など望んでいなかっただろう——それは彼が使徒に選ばれたとしても同じことだったのではないだろうか。

駄目だ、どうしても納得できない。

「それだけで、自主的に失踪したと判断するのは早計だと思う」

はっきりと自分の意見を口にした伽羅に、セイタマールが「まだ続きがある」と続けた。
「サンネイドの聖石は天河石だった。天河石は守り石として身につける分には人気があるが、別の用途に使う場合注意を要する聖石のひとつであることはお前も知っているだろう」
言われて伽羅ははっとした。
天河石は微量の鉛を含有するため、薬湯にするには細心の注意が必要なのだ。薬湯中から鉛を取り出すことができなければ、毒性を発揮し人体に害を及ぼしかねない。
「サンネイドは……鉛を取り出すことができなかった……？」
伽羅の問いに、セイタマールはひとつ頷いた。
「聖石の子供にとって、自分の生んだ石を薬湯に変えることはできて当たり前のことだと思われている……だが、抱いて生まれてきた石によっては、それが簡単でない場合もある。おれたちは幸い、そうした問題点があることも、それを克服できないことがあってもおかしくはないことまで徹底的に教え込まれた。だが……言っては悪いが、弦歌の神殿は、聖石やその子供に対する知識が不十分に感じられた。もしかしたら神殿自体がサンネイドを精神的に追い詰めた可能性はあると考えている」
そうしたことは、聖石の子供に触れる機会が少ない神殿では起こりやすいことらしい。
聖石の子供ならできて当たり前、聖石の子供なのにこんなことができないなんておかしい

――等々。直接口には出さなくとも、そうした空気は伝わるものだ。

結果として周囲が規定する『聖石の子供』の水準に届いていないと感じた子供が精神的に自らを追い詰め……その果てに。

絶望し、誰にも相談できぬままに姿を消した――と。

「セイはそう思ってるのか？」

尋ねた伽羅に、セイタマールは頷きはしなかったが、「その可能性はあると思っている」と応えた。

「そうか」

伽羅はゆっくりと頷いた。

そうして、自分の考えを伝えた。

「セイがそう判断したのはわかったし、そう考えれば筋が通ることも認める。だけど、わたしはそうは思えない。イーダルドたちに格好良く見せたいと思っているだけなら、最後の手紙に書いてあった内容はそれから外れてる。『あれなら自分にもできる』……これは、何かができない自分を認めた上でなくては出てこない言葉だ。サンネイドは少なくともイーダルドには多少の弱さを晒すことを自分に許している。その上で、見つけた『凄い人』の弟子に『絶対なる』と宣言してた。絶望して誰にもそんな自分を見せられなくて姿を消したんだとは、どうし

ても思えない」

きっぱりと言いきると、セイタマールが一瞬痛そうな表情を浮かべたのに気づいた。

気づいたけれど、慰めるようなことは言えなかった。

これは、伽羅にとっても正念場だと本能的に悟っていたのだ。

他人が勝手に量るな。想定した未来を押しつけるな。そうなるはずだなんて思い込むな。

これは、伽羅に対するセイタマールが現在抱いているものに相通ずる話だ、と。

そんな伽羅の心中を知ってか知らずか、セイタマールは数瞬の沈黙の後、「好きにすればいい」と言った。

「但し、おれも弦歌の神殿もサンネイドの失踪は自主的なものだと判断したから、イーグルドのこれ以上の同行は認めない。施設の責任者であるメイファンも同じだろう。だから、お前が何を手がかりと言っているかは知らないが、これ以上の調査は不要だ。サンネイドに関する調査は打ち切る。以後、彼の行方に関する調査に係わるなよ。調査責任者はおれだ。いざとなったらお前を縛り上げて動けないようにしてでも止める権限がある。そうされたくなかったら、おとなしくおれの言う通り……」

威嚇するようなセイタマールの態度に違和感を抱くと同時に、伽羅はわけもなく悲しくなった。

セイタマールは決して横暴なひとではないし、情の薄いひとでもない。
なのに、今はっきりとサンネイドを切り捨てようとしている——いつもの彼なら仕方なさそうに顔を顰めながら、ため息まじりに引き受けてくれそうなものなのに。
それはつまり、それだけセイタマールが神経質にならざるを得ない問題を抱えているということだ……そんなもの、伽羅自身のことだとしか思えない。
(でも……だけど、セイ)
その思いやりは、大きすぎる痛みを伴うものだ。
(あなたにも、わたしにも)
だから——。
断ち切ってしまおう、と伽羅は思った。
欲しいのはそんなものではない。セイタマールとの間に築き上げたい絆はそんな曖昧で条件に縛られるものではない。
そんなものなら、要らない。
自分が欲しいのは——。
と、そう思い口を開きかけた時のことだ。
「異義あーり」

耳に馴染みのある子供の声が、突然割って入ってきた。
「イーダルド!?　お前、まさか帰らなかったのか!?」
責めるように問いかけた伽羅に、子供は「ちゃんと帰った……ってか、帰る途中で元気に歩いてくるお母さんに愛の拳骨もらったって言うか……」と、赤く腫れ上がった額をさすりながら答えた。
「倒れたのは確かだけど、今じゃもうぴんしゃんして元気そのもので、拳骨の威力なんて下手したら前より増してんじゃねえのって言いたいぐらいなんだけど……そんで、そのお母さんから伝言。『勝手に人の息子を薄情者に仕立て上げないでちょうだい！』だって。書き置き一つ残しもしないで自主的に兄貴が姿眩ますはずがないって！　そんでおれが手がかりらしいもの見つけたって言ったら、気が済むまで地の果てまでだって捜しに行けって言ってくれた！」
嬉しそうに言うイーダルドを前に、伽羅は少しだけお母さんに対する認識を改めた。
地上最強の生き物かもしれない……という認識はあながち間違ってはいない。
「だから、おれ！　兄ちゃんとちいちゃんについてくから！　少なくとも兄貴が『すごい人』だって言ってた人かもしれないオズローンなんちゃらって人に会って、兄貴のこと知らないかどうか尋ねるまでは、がっつりくっついて離れないでついていくから！」
ええと……改めて、よろしく？

にかりと笑いながら、イーダルドが告げた。
答えないセイタマールは、苦虫を嚙み潰したような顔をしていた——。

9

通常より細長い音叉の先に、鮮やかな色の石が触れた瞬間、空気を震わせ澄んだ高音が空間に広がった。

チ、リン……リーン……リィーン。

今度は若干太めの音叉に透明な石が触れる。

チィン……チィィン……チィィィーン。

今度は淡い緑の石が、次は違う音叉に琥珀色の石が――。

石と音叉が触れる度、透明な音が場を満たし、それは放射状にどこまでも広がっていく。

その場は音の生み出す泉と化し、聴衆は泉に広がる波に心を委ね、心地よさに酔う。

オズローン・ナージエの指先は次々と石を持ち替え、その伸ばされた先にある十本を越える音叉とともに、無数の澄んだ音を生み出す。

それは曲ではない。

澄んだ音の連なりではあるが、ひとが口ずさめるような法則性で繋がったものではない。いや、それはどんな楽器でも人間の声でも、到底再現できるものではない。

他にはない澄んだ音、音、音。

石の波動と音叉のそれとが重なることで生まれる音の波——。

先の波と新たに生まれた音が重なり、また別の波が生まれる。

純粋な——どこまでも純粋な音が連なり、重なり、時に溶け合い……その場を清浄な空間に変えていく。

最後の音が消えたのは、演奏が始まって四半刻ほどが経ったころだ。

そして、奏者であるオズローン・ナージエが舞台の上で一礼するのを待っていたかのようにするすると幕が下りる。

客席は静まりかえったままだ。

拍手も何もない——今はまだ。

聴衆はオズローンの生み出した音の余韻に酔ったまま、身動きひとつ取れないのだ。最後の一音が消えたあとも、空間を満たす静謐を壊すことこそを恐れる。

自らの拍手などという無粋な音で、この美しすぎる澄んだ空気を乱したくないとそう思うのだ。

オズローン・ナージエ――。
彼の生み出す無数の音は、空間そのものを浄化し、神域を思わせる神聖で荘厳な空気を現世に招き寄せる。
人間がいつしか纏ってしまった欲や妬み、さらにはそれらが凝った邪気――そうしたものは彼の演奏によって綺麗に洗い流される。
それ故に彼はこう呼ばれるのだ――。
奇跡の連音奏者、と。

しんと静まり返った客席に身を沈めながら、伽羅はふう、と息をついた。
（すごい……）
たったひとりの奏者による演奏だったにもかかわらず、場を支配する音の連なりは圧倒的だった。
澄んだ硬質な音は空気だけではなく、伽羅の全身をも震わせ駆け抜けていった。
言葉にできぬ清涼感――音という名の聖水に、心も体も洗い流され清められたような気がす

る。

いや、気がするのではなく、本当に清められたのだ。

（奇跡の奏者と呼ばれるだけのことはある）

オズローン・ナージエの連音演奏には、強い浄化の力がある。

日々多くの人々を迎え、雑多な思念や澱みを溜めやすい劇場は、いまや神殿の最奥部のように澄み渡った気で満たされている……いっそ恐ろしく感じるほどに。

そう、恐ろしい……隅々まで清められた身は、この清浄な場から出ることを本能的に恐怖するのだ、澄み切った場所はここだけで、外に出てしまえば自らは再び雑多な気に晒され、綺麗なままではいられないことを知るからこそ。

一度耳にした者は、再び彼の演奏を求めずにはいられないと言われるのは、きっとそのせいだろう。

（天才とは、ああした人間を言うんだろうな……）

ただ石と音叉の奏でる音を連ねるだけではここまでの浄化はできない。

緻密な計算と優れた感覚による音の組み合わせが、ひとつひとつの音の持つ力を増幅させているのだ。

そう、そして――。

彼の演奏をさらに高次のものへと引き上げている要因は、もうひとつあった。
伽羅だからこそ気づいたことだ。
頻繁に玉響の音色を耳にする機会に恵まれた彼女だからこそ、彼が用いていた石が、普通の貴石や半貴石ではないことを見抜くことができた。
(彼が使っていたのは聖石の子供石だ……)
杉石、紅珊瑚、黒水晶、金針水晶、縞瑪瑙……。
聖石の子供たちが生み出す奇跡の石は、やはり音色までも夢のように美しい。
(神殿は、彼に協力を求めるべきだな)
そうすれば、玉響以上の効果的な浄化方法を確立することができるだろう。
悪くない考えだと伽羅は思った。初めて音叉と石の組み合わせを見た時も思ったものだが、特殊な才がなくともできる浄化法は神殿にとって魅力的だ、一考する価値はある。
と、そこまで考えて、伽羅は自分の思考に苦笑した。
純粋な音の泉に浸り、心地よくたゆたっていたはずなのに、いつの間にか意識は現実に戻っている。人間は結局、天上ではなく地上で生きていることを忘れないということか……。
(いくら美味しくとも、菓子ばかり食べるわけにはいかないのと同じかな)
そんなことを思いながら、伽羅はようやく席から立ち上がった。

客席はすでにまばらだ——拍手もなく幕を閉じた異様な演奏会だったが、まだ残っている客たちの陶然とした顔をみれば、無音無声の讃辞がオズローン・ナージエに捧げられたことは確実だった。

(体まで軽くなっているし……今度、音叉でも買ってみるかな)

幸い、子供石ならいくつも持っている。

音色の違いを確かめるだけでも充分楽しめそうだった。

(それはいいな、うん……確かに)

あの音を連なりを耳にしたのであれば納得できる、と伽羅は思った。

「押しかけてでも何をしても……サンネイドが弟子入りしたがる気持ちがわかるな」

まだ、そうと決まったわけではないけれど——。

今日はそのためにこの演奏会に来たのだ。もし可能なら演奏のあとにオズローン・ナージエに面会を申し込み、サンネイドの行方について何か知らないか尋ねるのが目的だった。

だが——。

劇場のロビーに出た伽羅は諦めの息をついた。

楽屋に繋がる通路は、彼の演奏に感動した客たちで溢れかえっていたのだ。客席からは贈ることがかなわなかった讃辞や感謝の言葉を、直接オズローン・ナージエに伝えるためだろう。

ひと、ひと、ひと――細身の伽羅には割り込むことなどできそうもなかった。
（これは神殿を通じて面会を申し出るしかないかな）
セイタマールはきっと苦い顔をするだろうけれど――できる限りの手は尽くすべきだ。
サンネイドには、帰りを待つ者たちがいるのだから……。

白谷の王都朱句に伽羅たち三人が着いたのは三日前のことだった。
大きな行事があるわけでもないのに、朱句は人で溢れていた。神殿の伝手を使ってようやく取れた宿――さすがにふた部屋は無理ということで、セイタマールは渋々妥協した――の人に理由を尋ねたところ、三日後にオズローン・ナージエの演奏会があるためだという答えが返ってきた。
オズローン某――としか知らなかった伽羅たちは、ここで初めて件の演奏家の正しい名前を知ったわけである。
当然、伽羅とイーダルドはその演奏を聴きたいと言い出したが、これまた当たり前だがセイタマールはいい顔をしなかった。

彼としては、オサラディーンから命じられた調査を最低限果たして一刻も早く那八に帰還したいのだ。

（わたしとのコンビを解消するために……）

そのことを、セイタマールは最早隠そうとはしていない。

数日前までのように伽羅を避けることはなくなったが——情報交換に応じなければ、伽羅が勝手に動くことを見越したのだろう——今度ははっきりと自分の意志の固さを見せつけるようになったのだ。

何を言われようとも決意は変わらない——。

セイタマールと言葉を交わす度に、声なき声でそう繰り返されているような気がして、正直伽羅は落ち込んでいた。根が頑固なだけに、こうなった相棒は非常に手強い。そのことを知っているだけに、気分が沈みこむのだ。

イーダルドがそばであれこれ励ましてくれなければ、空元気さえ保てなかったかもしれない……それを聞いた子供は「ちいちゃん、空にしておかないで中身入れようよ」と笑って言ったのだが。

話が逸れたが、まあセイタマールの頑なな反対があり、ふたりはオズローン・ナージエに会う手段を模索するしかなくなった……はずだった。

しかし天は伽羅を見放してはいなかった。
他でもないセイタマールを通じて、すでに完売済みのオズローン・ナージエの演奏会のチケットを一枚、伽羅に届けてくれたのだ。
顚末は、こうだ。
聖石の子供たちの失踪事件を調べるため、セイタマールは宿を決めてすぐに朱句の地神神殿に向かった。相変わらずひとりきりで、だ。那八に到着するまでは、彼は伽羅とその秘密を何が何でも守り抜くつもりらしかった。
そうして訪れた地神神殿で、彼は眉間に深い皺を刻む事態に見舞われたのである。

「は？」
神殿の入り口で声をかけられ、セイタマールは間抜けな声を上げた。
事前に連絡を入れたわけでもないのに、なぜか高位の神官と思しき男性に「お待ちしておりました」と敬語で迎えられたのだ、すぐに事態が把握できるはずもない。
人違いでは——と、言いかけたがすぐに「いいえ」と返される。

さらには、

「血赤珊瑚の使徒セイタマールさまでございましょう？」

と言い当てられた時点で、彼は得体の知れぬ不安とも悪寒ともつかぬものを覚えた。

こうして先手を打たれる感覚は、不本意ながら馴染みのあるものだったのだ。そうして大概その打ち手は決まっているのである。

不吉な予感は的中し、神官は「遊羽のオサラディーンさまから、お預かりしているものがございます」と続けてくれた。

……どうやらセイタマールの上司は、千里眼の持ち主らしかった。本物にしか見えない偽物である可能性が限りなく高いのは確かだが。

（あの狸、先回りして今度はどんな手を打ってきたんだ？）

どうせ、伽羅が有利になるようにてこ入れするつもりに違いない——調査の件を命じる手紙が届いた時、おかしいとは思ったのだ。

『早く伽羅を連れて帰っておいで』

遊羽を出立する時、そう言って送り出した上司が、時間のかかる仕事をわざわざ風霊を用いてまで届けさせたのだ。

何かあるとは思ったが、それが何かまではわからなかった……伽羅の件を知るまでは。

そこでようやく、セイタマールはオサラディーンの目的に気づいたのだ――これは伽羅のための時間稼ぎなのだと。

伽羅が女性になったことを知れば、必ずコンビ解消を言い出すに違いないセイタマールの行動を見越して、あの上司は伽羅が再び彼を口説き落とすための時間を増やしてくれたのだ。そうとわかっても命令は命令である。同胞の身に何が起こったのかも気にかかる以上、無視はできない内容のものを用意するあたり、上司は非常に狡猾だ。

だが、だからと言ってみすみす上司の思惑に乗ってやる義理はない。セイタマールはあくまで初志貫徹を目指していた。

それも、もう少しのはずだった。

白谷の国境を越えればもう那八なのだから。

イーダルドには悪いが、サンネイドの件は一連の事件とは無関係だと処理し、早々に那八に帰国するつもりだったセイタマールを、またも上司は見抜いたのだろうか。

（伽羅を可愛がってるのは知っていたが、公私混同もいいところじゃないか）

罪のない神官の前で、不機嫌な顔をするわけにもいかず、セイタマールは胸中で盛大にオサラディーンを罵るに留めた。

そうして、手渡された二通の封書に、彼の機嫌は一気に急降下した。

小さな封筒にはとある演奏会のチケットが一枚、短い手紙が添えられて入っていた。
曰く、最近話題になっているオズローン・ナージエの演奏の真価を確かめるためにも、是非一度直接聴いてほしい――。
気配に関することは伽羅の管轄だ。
つまり、伽羅に渡せということなのだ。
そしてもう一通――厚味のある大きな封筒の中身はと言えば。
(あの狸親父……！　この上墓荒らしまで調べろというのか！)
そこに入っていた書類は、数年前に起こった事件の調査報告書だった。
聖石の子供の墓が次々に暴かれ、その遺骨が盗まれたというものだ。
『聖石の子供たちの失踪と、何らかの関連があるか否か、調査を命ず』
その極悪な性格からは考えられない、優雅で達筆な文字が並ぶ便せんを、彼はぐしゃりと握りつぶした――いっそのこと差出人をこうしてやりたい、と思いながら。
どこかでオサラディーンが笑っているような気がした。
『しばらく帰って来ないでいいからね』
愉快そうな声が告げる内容は、きっと被害妄想による捏造ではないはずだ。
セイタマールは思わず腰に提げた剣に目を向けた。

この浄化の剣で上司を刺したら……彼の悪質さは多少は鳴りを潜めるだろうか——などと埒もないことを考えながら。

……誘惑は、結構強烈だった。

10

宿の玄関のあたりでイーダルドは伽羅の帰りを待っていた。

最初は部屋で待っていたのだが、どうにも落ち着かなくて、結局帰ってくる伽羅を一番に見つけられる玄関に移動したのだ。

（ちいちゃん……）

伽羅は今、オズローン・ナージエの演奏会に出かけている。

演奏会のことを知ったのは、この朱句に着いた日のことだ。しかし三日後に迫った人気の演奏会のチケットが残っているはずもなく、そのときはふたりとも諦めるしかないと思ったのだ。

耳に自信があるイーダルドとしては、サンネイドが絶賛していた——と、最早信じている——オズローン・ナージエの演奏に興味を覚えないはずもなく、またそのひとに会えたら、きっとサンネイドの行方を知る手がかりが得られるに違いないと思っていたから、本当に残念で

ならなかったけれど。

彼の演奏に噂通りの浄化の力があるのなら、それを理由に神殿を通じて会うことはできるから――という伽羅の言葉で自分を慰めていた。

チケット完売の現実に打ちのめされているふたりのそばで、セイタマールだけがなぜか嬉しそうだった。自分たちが演奏会に行けないのを喜んでいるのだと、その時イーダルドは直感的に悟った。

物凄く腹が立った。

あとで聞いたところ、伽羅も足ぐらい踏んでやろうかと思ったということだった。

(兄ちゃんってば、嘘がつけないか、性格が悪いか――絶対どっちかだよな)

あの時のことを思い出すと、いまでもセイタマールのことが憎らしくなる。

それなのに、演奏会のチケットを手に入れてきたのが当の彼だというのがイーダルドにとっては引っかかる。

(兄ちゃんはちいちゃんを行かせたくなさそうだったのに、素直にチケットを渡すなんて、なんかおかしいよな。神殿でなにかあったのかな?)

宿を決めてすぐに、地神神殿に行ったセイタマールは、ふたつの封筒を手に戻ってきた。そしてその片方――チケットが入っている小さな封筒――を伽羅に差し出したのだ。

あれは絶対本意ではなかったと断言できる。
でなくて、どうしてあんな苦虫を噛み潰したような顔になるというのか。
（ちいちゃんは大喜びだったけどな）
それでますます青年の眉間の皺が深くなった時には、正直どうしようかと思ったものだ。
封筒に入っていたチケットが一枚きりだったのは、残念ではあったけれど、添えられた手紙の内容を考えれば、行くべきなのが伽羅であることは明白だったから仕方ない。
耳では伽羅に負けないが、イーダルドは瘴気だとか邪気だとか、そうしたものは全然わからないのだ。神殿が求めているのがオズローン・ナージエの演奏に浄化の力が宿っているのか否かである以上、餅は餅屋に任せるしかなかった。
その代わり、伽羅は可能ならオズローンに会ってサンネイドのことを訊いてきてくれると約束してくれた。演奏を終えたばかりの奏者が、果たして客に会ってくれるものかどうか、イーダルドにはわからなかったけれど、期待が膨らむのは止められなかった。
もしかしたら、サンネイドはオズローン・ナージエのところにいるのかもしれない。
最後の手紙から感じ取れた興奮状態がもしも続いていたら、強引に押しかけて弟子入りしてもおかしくはない気がした。
（そうだ……あのひとはいつもは周りを気遣うことを忘れないけれど、一度何かに熱中すると

何もかも忘れてそのことに没頭してしまう癖があった……）

もし、それで弟子入りを許されていたら、絶対に修行にのめり込んでしまうに違いないのだ……一つのことに打ち込み始めたあのひとは、自分の世界に入り込んで、周囲が全く見えなくなってしまうのだから。

手紙ひとつ来ないのも、その状態に陥っているのであればおかしくはない……どころか、当たり前のことになる。

もしも、もしも、もしも――。

仮定ばかりだ。

わかってはいても、彼が無事だと信じたい心は、勝手に「もしも、もしかしたら」を繰り返すのだ。

だから――今は落ち着かない。

早く伽羅に帰って来て欲しい。早く伽羅から話が聞きたい。

同時に伽羅にはまだ帰って来て欲しくない。期待を裏切られたくないから、すぐには伽羅の話を聞きたくない。

相反する望みが胸の奥でぐるぐると回っている。

（ちいちゃんがどうか、オズローン・ナージエと会えていますように……オズローン・ナージ

エがあのひとのことを知っていますように……あのひとが元気でいますように……）

願うのはサンネイドの無事――それだけだ。

（ちいちゃん、ちいちゃん、ちいちゃん……）

呪文（じゅもん）のように繰り返しながら、イーダルドは黒髪の少女の帰りを待ち続けた。

宿への道を歩きながら、伽羅は少し後悔していた。

劇場でのことをだ。

いくら楽屋への通路がひとでごった返していたとはいえ、ああもあっさり諦めるべきではなかったのではないだろうかと、今さらだが考えてしまうのだ。

脳裏（のうり）に浮かぶのは、期待に目をきらきらさせて宿で自分を見送ってくれたイーダルドの顔である。

『ちいちゃん、よーく聴いて来てくれよな！　兄貴が憧（あこが）れるような演奏かどうか……神殿から頼まれたことも確かめなきゃならないから、音にばっかり集中できないかもしれないけど、それでも……』

サンネイドの行方を知る手がかりとなるかもしれない人物の演奏会だ、イーダルドも絶対に行きたかったに違いないのに、チケットを譲って欲しいとはついに口にしなかった。

十一歳とは思えないほどの自制心だった。

（わたしは十一のころ、あんなに自分を律することができただろうか）

考えるまでもなく、答えは出た。

否、だ。

自分が強い自制心の持ち主だったなら、浄化の仕事の際に突っ走った挙句、組んだ相手に大怪我を負わせるような事態にはならなかったはずだ。いくらセイタマールに出会う前で、酷く焦っていたとは言え、自分ばかりか他人までも危険に晒すなどという最悪なことを繰り返していた過去は、思い出すのも恥ずかしいものだ。

（だけど、いくら自制心が強くても、サンネイドのことが心配でたまらないのは間違いないのに……）

そんなイーダルドの期待を、伽羅はあっさり諦めたのだ。

普通の劇場でのことであれば、いくらでも理由は挙げられる。気配に敏感な伽羅は、あまり人間が多く集まる場所が得意ではない。個人が纏う澱みや曇り、影のようなもの――ごくごく弱い邪気と言い換えてもいい――を伽羅が気にすることはない。だが、人間が大勢集まれば話

が変わってくる。個々としては他愛のないそれらは、集まることで邪気としての威力を放ち、彼女の心身に負担をかけるのだ。

だから伽羅は人が集まる場所には——神殿は例外だが——足を運ばないようにしている。

だが、今回はその危険性を考える必要はなかった。オズローン・ナージエの連音演奏によって、人々が纏っていた邪気は綺麗に浄化されていたのだから。ひとごみに入ったとしても、伽羅が体調を崩すようなことにはならなかったはずだ。

なのに、どうしてだか伽羅はオズローン・ナージエの楽屋をそうまでして訪ねようとは思えなかった。

その必要がないような気がしたのだ。

それは一種の勘働きで、伽羅の場合従ってまず間違いはない。だから深く考えずに勘に従って劇場をあとにした。

そのあとでイーダルドのことを思い出したのだ——どんなにか楽しみにしているだろうかと思うと、罪悪感に胸が痛んだ。せめて劇場を出る前に思い出していたならば、引き返すこともできただろうが、一度出てしまった以上、再入場は認められない。

はあ、と伽羅は大きなため息をついた。

(イーダルドになんて説明しよう……)

ありのままを言うしかないのはわかっているが、その時の彼のがっかりする顔を想像すると胸がきりきりと痛んだ。

しかし嘘は論外だ。

（怒るかもしれないな……怒って当たり前だし。やっぱり、謝り倒して許してもらうしかないかな）

それで、今度はイーダルドも一緒にオズローン・ナージエに会えるよう、機会を作るしかない。

これはセイタマールを通じて神殿に頼めば不可能ではないだろう。

ただし、その場合あの相棒の機嫌を損ねる確率が高くなるが……それはもう仕方ないと割り切るしかない。

（セイの厭味ぐらい、我慢すればいいんだし）

セイタマールが聞けば、「なぜ厭味を言われるのか、その理由は考えないのか！」と怒鳴りつけそうなことを伽羅は考える。

「とにかく、宿に帰ったら真っ先にイーダルドに謝って、それから……」

と、彼女がこれからの予定に優先順位をつけていた時のことだった。

ぞくり、と全身に悪寒が走った。

覚えのある感覚は、オズローン・ナージエの演奏で清められたせいか、いつも以上に強烈に感じられた。

（邪気だ！　いや……これは、瘴気に育ちかけている!?　どこだ、どこから――）

慌てて周囲を見回したとき、宿のある方向から甲高い女性の悲鳴が聞こえてきた。

「きゃあああぁぁあぁぁっっっ！」

（あっちか！）

伽羅はすぐさま走り出した。

何事かと立ち止まってそちらを振り返る通行人を押しのけながら、彼女は邪気の源を求めて駆けた。

それはすぐに見つかった。

先ほどの悲鳴の主だろう――宿の玄関の少し手前で、両手で頭を掻きむしりながら天を仰いでいる女性の姿があった。

年の頃は二十代後半に見えた。

簡素だが品は悪くない長衣を身につけている。とても邪気を育てるような女性には見えなかった。

（憑かれやすい体質なんだな……どこかで触れた邪気に入りこまれたか）

運が悪かったとしか言いようがない。
伽羅は懐から革の袋を取り出すと、中から適当な聖石の子供石を取りだした。
（とにかく邪気を引き剝がさないと……体がもたない！）
生身に取り憑いた邪気は厄介だ。
そのひとの意識を押しのけ、体を支配することも珍しくはない。だが、本当に厄介な点は別にある。
邪気はあくまで人間が生み出した負の感情や思念が凝縮したモノだ。肉体を支配したとしても、それを守ろうとはしないのだ。
結果として、邪気や瘴気に肉体を奪われた人間は命を落とすことになる。そうさせないためには一刻も早く邪気を浄化する必要があるのだ。
だが――。
（まずは封じる！　浄化は後回しだ！）
幸い、手元には最適の石がある。
これを使えばセイタマールが懸念する正体の露呈には繋がらないはずだ。
後先考えずに無茶ばかりする――と相棒は思っているようだが、伽羅だとて何も考えていないわけではない。体に負担をかけない方法が選べる時にはちゃんと選ぶのだ。

「みんな！　そのひとに触れないで！」

何事かと、件の女性のぐるりを取り巻いている通行人たちに注意しながら、伽羅は真っ直ぐに輪の中心に向かった。

そして、ぎくりと身を強ばらせた女性に強引に抱きついた。

女性――否、取り憑いた邪気が怒号を上げる。

『やめろ！　放せ、放せぇえっ！』

女性のものではあり得ない、しわがれた声が唇から迸った！

抱きつく伽羅をふりほどこうと、女性が暴れ出す。しかし伽羅はしっかりと女性にしがみついたまま、左手に握っていた聖石の子供石を彼女の右手に押しつけた。

『やめろ、やめろ、やめろ！　邪魔をするな！　殺してやるぞ！』

邪気の恫喝が周囲の空気を震わせ、黒く染める。

吸い込まないように息を止めながら、伽羅は女性本人に訴えかけた。

「この石を握って！　大丈夫だから！　悪いものはあなたから離れる……こんな苦しく恐ろしいものは、あなたの中から出て行くから！」

わたしを信じて、どうか石を――。

そう叫んだ瞬間、邪気に支配された女性の左手が、乱暴に伽羅を払いのけた。

だが、右の掌はゆっくりと閉じて、渡された石を放さなかった。
（戦ってる……この女性も戦っている！）
石畳に尻餅をついた格好になった伽羅だが、すぐにまた女性に近づき、今度はその右手を両手で包みこんだ。
「大丈夫！　信じて！　これは爆裂水晶……悪い気を吸い取ってくれる特別な石だから！　何より聖石の子供石だから、絶対大丈夫！　あなたは助かる。強く信じて！」
伽羅の言葉が伝わったのだろう――彼女の両手に包まれた右手が、ゆっくりとだが固く結ばれていく。
それと同時に、邪気の紡ぐ声が徐々に弱くなっていった。
『いやだ……いやだ……殺してやる……そのために……』
『殺されたんだ、殺して何が悪いんだ……』
『許せない……あいつ……』
『どうして……邪魔を……』
『……にはなれなかったけど……ならばと……』
という言葉を最後に、邪気の気配は完全に女性から消えた。
その瞬間、力尽きたのだろう――女性の体ががくりとその場に崩れ落ちた。

咄嗟にその体を受け止めはしたものの、伽羅の脳裏には邪気の最後の言葉が何度も何度も繰り返されていた。

(あの邪気の主は、まさか……)

不吉な予感が胸にじわりと広がっていく。

そんな伽羅の意識を現実に引き戻したのは、自分を呼ぶ子供の声だった。

「ちいちゃん!」

野次馬を必死に押しのけながら、イーダルドが駆け寄ってくるのが見えた。

伽羅はふう、と息をついた。

(考えるのもあとにしよう。まずはこのひとを休ませないと……)

いけないとはわかるのだが、しかしここでひとつ問題が浮上した。

意識を失った女性は、伽羅よりも大柄だったのだ。イーダルドが手伝ってくれたとしても、ふたりで部屋まで運ぶのは無理だった。

(また厭味を言われるな)

けれどこれは不可抗力だ。

今回は自分は何も悪くない。

何度かそう繰り返した後——自己暗示ともいう——伽羅はイーダルドに頼み事をした。

「すまないが、イーダルド。セイを呼んで来てくれないか」
聡い少年は、何のためにセイタマールが必要かすぐに悟ったのだろう、「わかった」と即答すると元気よく宿に引き返していく。
その背中を見つめながら、伽羅は邪気の台詞について考えた。
『使徒にはなれなかったけど……』
邪気は確かにそう言ったのだ――。

白谷の東南部に、佳山と呼ばれる山がある。
秋の見事な紅葉を、ある詩人が『錦纏いし佳人のごとし』と評したことからそう呼ばれるようになったと言われる。
佳人の立ち姿に見立てられるように、佳山はその険しさで人間の手を拒む。
それでも上質の陶石が麓付近で採れていた頃は、それなりに人も集まったが採り尽くされたあとは以前の静けさを取り戻した。
佳山は遠くから眺めるものとして、近隣の者も敢えて足を踏み込もうとしなくなって久しい

——そんな険しい山中を、荷物を背に歩く女性の姿があった。
歩きやすいように男装しているが、長く豊かな栗色の巻き毛と、薄手の上着では隠しきれない柔らかい体の線が彼女の性別を明らかにしていた。
通い慣れているのか、女性は軽々と細い山道を進んでいく。
ときおり汗を拭う仕種をするが、その息はさして乱れてはいない。ほっそりした体に似合わぬ体力の持ち主と言えるだろう。
女性は荷物を背負ったまま、ひたすらに登り続ける。
その足が止まったのは、山頂近くまで来た時のことだ。
澄んだ山の空気を震わせて、綺麗な音が聞こえてくる。
リ、ィン……リリン……リ……。
チ、チ、チ……リィィン。
朱句の者なら、それが何の音かすぐに悟るに違いない——彼らが知る音より、遙かに稚拙な響きではあったけれど。
リ……ィィィン、リン。
(頑張っているわね)
女性は声には出さずにそうつぶやくと、音のする方向へと足を向けた。

麓からは木々に阻まれて見えないが、その先には少しだけ開けた平坦な場所があり、音はそこから聞こえてくるのだ。

（そろそろ、半年になるのね……）

あの少年をここに連れて来てから――。

疑うということを知らぬ純粋な聖石の子供。

邪気さえ浄化する連音を学びたいのだと、彼女の住む屋敷の扉を叩いた少年は、修行のために佳山に連れて来られても何ら不満を洩らさなかった。

ひとりきりで小屋で寝泊まりし、十日に一度訪れる自分が運んだ食材で自炊する日々は、決して容易いものではなかろうに、それも修行の一環だと思っているのか、言われたことを守り続けている。

小屋に用意した貴石と音叉をただ触れ合わせるだけの行為――しかし繊細にして夢のように美しい音を生み出すには修練が必要だ。

半年、ひたすらにその行為を繰り返したはずの少年は、まだまだ音を連ねることさえできずにいる。

彼女にできるのは、ほんの少し助言を与えることぐらいだ。

あとは少年自身が自分の体で摑み取っていかなければならない。口で伝えて身につくことで

はないのだ。

（けれど、あの子は筋がいい……単音なら聴けなくもないぐらいに上達してる）

まだまだだということに変わりはないけれど。

それでも、ずいぶん綺麗になった。

（そろそろかしら……？）

その判断を下すには、少年に会わなければならない。

だから彼女は十日に一度、必ず佳山に足を運ぶのだ。

（いえ、きっとまだ充分じゃない、わ……）

自分に言い訳するように呟いて、女性は少年が暮らす小屋の扉に手をかけた。

「十日ぶりね、サンネイド！　元気にしていたかしら？」

その声に驚いたように振り返った少年は、彼女の姿を認めるなり、ぱぁっと顔を輝かせて叫んだ。

「先生！」

と――。

次元間宅配便騒動

0

「わたしの知りあいで、ギフトショップをやってる人がいるんですけどね」
さわやかな初夏の朝、テーブルにつくなり圭介叔父さんがそうおっしゃった。
「いま、ちょうど女性の店員を探してるらしいんです。一子さんさえよかったら、紹介状を書きますけど、どうですか？」
「お願いします、ぜひ！」
就職浪人中の私は間髪を入れずそう答え、思わずおたまをガスレンジに叩きつけて叔父さんの爆笑を買った（一見、知的な好青年のくせに、この人ったら笑い上戸なんだ）。
「いや、実はそうだと思いましてね」
ひとしきり笑ったあとで、圭介叔父さんは胸ポケットから白封筒を取り出された。
「紹介状は書いてあるんですよ。むこうには話はつけてありますから、今日にでも行ってらっしゃい。ああ、地図も書いておきましたからね」

「どうもご丁寧に……」
口の中でもごもご言いながら、私は叔父さんの手から封筒を掠め取った。
就職――。
ああ、なんていい響きなんでしょう。
短大を卒業してそろそろ三月、いいかげん諦めていただけに……。
「一子さん。喜んでいただけて、わたしも嬉しいのですが、そろそろ朝食にしていただけませんか？」
叔父さんの遠慮がちな声に、封筒にほおずりしていた私は、はっと我にかえった。
「ご、ごめんなさい」
時計を見れば、すでに十時。
自由業の叔父さんと、就職浪人の私ならではの朝食時間だわ。
でも、これも今日でおしまいよ。
就職して、きちんきちんとお給料もらって、私だけは地味で堅実な人生を送るのよ！
リクルートスーツは真新しいのがあるし、髪だって五日前にカットしたばかり。猫かぶりなんて、はっきり言って、大の得意よ。みごと店主に気に入られて、社会人生活を手に入れてみせるわ！

1

というわけで、私は午後一時、圭介叔父さんの書いてくれた地図を頼りに、就職予定のギフトショップ『ハセガワ』にたどりついたのだけど……。

「嘘、でしょ……？」

一歩、店内に足を踏み入れたとたん、私は重いめまいを覚えた。

酒、酒、酒！

ビール、日本酒、洋酒にいたるまで、広い店内にずらぁりと並んでいるじゃないの！

ギフトショップっていうのは、ふつう、置き物やタオルセットなんていう、軽いものが並んでるものじゃないの。これじゃお酒屋さんそのものよ！

私は、べつにお酒屋さんに、偏見を持ってるわけでは、決してない。だけど、だけど！

圭介叔父さんの馬鹿ぁ！

何も私の適性から、最長距離にある店、紹介しなくたっていいじゃない。私が斜懸垂三回し

かできないの、知らないわけじゃないでしょうに。十キロのお米袋が持ち上げられなくて、ずりずり台所まで引きずって運ぶのは、何も芝居じゃないのよ。

それなのに、お酒屋さん……。ビール一箱運べないのに。

目の前で、「堅実な生活設計」が音をたてて崩れていくような気がして、私は呆然とその場に立ち尽くしていた……。

と、そのとき。

「お嬢はん、お嬢はん。そこのきれいなお嬢はん」

ほめられて気を悪くする女はいない。私は反射的に、アルバイトできたえた営業用スマイルで振り返った。

目が点になった。

「ああ、本当に美人やわ。お尋ねしたいんやけど、ギフトショップ『ハセガワ』ゆうんはここでっしゃろかいな?」

「はい、そうですが……」

思考停止した脳をほっぽいて、口だけが相手の質問に答える。

「ふう、やっと着いたわ。ところでお嬢はん、あんたここの人?」

ダチョウの卵に手足をつけたような——そう、ちょうどハンプティ・ダンプティみたいな姿

をしたそれは、小さなハンカチで汗をふきふき訊いてきた。
「はあ、その予定だったんです……が……」
「ああ、新しい人か！　ちょうどよかったわ。これ、頼みます。住所は荷札に書いとりますさかい。はよう届けてやってな。なんせ婚約指輪や。今ごろ、先方の姫さん、待ちこがれとるやろうから」
私が否定の言葉を終わらないうちに、ハンプティ・ダンプティは勝手に納得して、ものすごい勢いでそれだけまくしたてた。
いつまでも呆然としているわけにもいかず、私は大きく息を吸って、吐いた。
「あの、お尋ねしたいんですが……」
しかし、今回もまた、ハンプティ・ダンプティの言葉にさえぎられた。
「そうそう。お嬢はん、あんたのお名前は？」
「え、松宮一子です」
「まつみやいちこ、と。ちょっと、手ぇ貸して」
言われるままに右手を出すと、ハンプティ・ダンプティはポケットから、黒いカードを取り出して、指先に軽くそれを押しつけた。
「おめでとう、これであんたも登録宅配人や。頑張りや。そんじゃ、それ、頼むで」

「あの、頼むと言われても……あー！　待って、消えないでよ！　私はまだ何も」
聞いてない。最後まで言い終わる暇がなかった。
ハンプティ・ダンプティはあとかたもなく消えていた。
何なのよ、あれは。そして、ここは何なのよ!?
ハンプが押しつけた小箱を握りしめて、私は力なくその場にしゃがみこんだ。
ああ、私は馬鹿だ。阿呆だ。まぬけだ。
少しでも考えればわかったはずなのに。紹介人はあの叔父なんだ。あの人の知りあいに、一般人がいるわけないんだ。ああ、それにしても、ここまですごいなんて、想像だにしてなかったわ……あの人と血がつながっているということで、私はすでに、まっとうな人生を手放してしまってるんじゃないだろうか……。
「マリィ、やっぱりこっちだよ、声が聞こえたから」
「大変。人目についてないでしょうね、騒ぎがおこらないうちに、彼をこっちに引っこめなくちゃ」
若い男女の声が聞こえて。
そして店の奥のドアが開いた。
「遅かったか……」

「あら、あなた？」

二十歳前後の男の人と、その姉らしい美人が、私と、私の手の中の物を見て口を開いたのはほとんど同時のことだった。

私は途方に暮れて、でもいつまでもしゃがみこんでいてはせっかくのリクルートスーツが汚れると気づいたので、さっと立ち上がって、ふたりを見詰めた。

「松宮一子、叔父の紹介で来ました。ギフトショップだと聞いてたんですが、でも、どう見てもお酒屋さんで、重いもの持てないと、やっぱ就職は無理かなあなんて思って。そしたらハンプティ・ダンプティが出て来て、手を取って、おめでとう、これで指輪が登録宅配人……あれ？　え、と、だから」

……責めないでほしい。私はこのとき、本当に理性が崩壊寸前だったんだもの。

「あのハンプティ・ダンプティはいったい、何なんですか？」

私が、混乱した頭を整理して、どうにか問いらしい問いを発したとき、ふたりは互いに顔を見合わせ、大きなため息をついた。

「登録済みじゃ仕方ないな」

「手続き中に拒否反応を起こさない人間は、稀少ですもの」

ふたりして、そんなわけのわからない言葉を交わした後、美女が静かに近づいて来た。

「松宮一子さん、恐らくお気づきでしょうけど、あなたが会った彼（ハシブ）は、この世界の生き物ではありません」

やっぱり。そう思う私の横を、閉店の札を持った男の人が通りすぎた。

美女は困惑したような、ぎこちない笑顔を私に向けて言い継いだ。

「彼は、我が『α（アルファ）次元間宅配便株式会社』の異次元における社員で、同時に、宅配便選抜、及び登録の任に就（つ）いてます」

なんか、いやな予感がした。

美女は実に、実に気の毒そうな顔で私を見た。彼女が決定打とも言える言葉を放ったのは、数瞬の後だった。

「松宮さん。あなたは彼に登録され、彼の荷物を受け取ってしまった。

次元間宅配法に基づき、今回の仕事は、あなたに受けてもらわねばなりません」

2

「あんたも不運だね。初仕事がこんな厄介なやつに当たるなんて」

ギフトショップ『ハセガワ』の経営者の片割れ長谷川聡は、革の上着をはおりながらのんきにそう言った（私の予想どおり、ふたりは姉弟だった。美女のほうの名前は長谷川麻里子だった）。

「今に始まったこっちゃないわ。もっとも、今回ほどすごい不運は初めてだけどね」

編み上げのブーツをはきながら、私は不機嫌に言い放った。

言っておくが、ここはすでに異世界である。

あの、衝撃の事実を打ち明けられた後、私はひきずられるように、転送機のある部屋に連れこまれ、抵抗する間もなく異次元へと送りこまれてしまったのだ。お目つけ役と称する長谷川聡と一緒に。

門と呼ばれる、異次元間を結ぶ地点に送りこまれた私は、仕事を終えない限り帰してもらえ

そうにないことを見て取ると、さっさと送り届けてしまおうと腹をくくったんだけど、荷物の届け先が、そこから歩いて四日もかかる場所だと聞いて、浮上できないくらい落ちこんでしまった。

その上、異世界の服は人目を引きすぎるということで、お気に入りのスーツを脱いで、中世の吟遊詩人が着ているような、布のシャツとズボンに革の上着という、前時代的ないでたちをさせられてしまったのよ。

不機嫌になるなというほうが無理だわ。

「いいわよ。もう、何だってするわよ。だけどこの仕事が終わったら、二度とあの店には近づかないんだから。圭介叔父さんの罪のない笑顔にだって、もう騙されないんだから！」

「怨念を感じるなあ。あんた、圭介さんに何か恨みでもあるわけ？」

「山ほどあるわよ。去年の六月、叔父さんが忘れたイラストの原稿を届けに行く途中で事故にさえあわなかったら、私は今ごろ、かっこいいスーツに身を包んだ、粋なオフィスレディーを地でいってたのよ！」

そう、あの日、足を複雑骨折して、就職活動時間を丸ごとベッドの上で過ごしたりしなかったら。

ううん。それだけなら、まだ許せないこともない。でも、友達のツテで、地元の銀行への就

職が八分通り決まったとき、こともあろうに面接日を間違えて私に伝えた叔父さんの行動だけはどうにも許せない。一日遅れとも知らず、松葉杖ついてその会社に行ったときの、目の前が闇に覆われるような虚脱感は、どうしても忘れられない。

「だから、私はもう、絶対に叔父さんを信用しないの、わかった？　これまではあの人のまったく邪気のない笑顔に、つい仏心をおこしてきたんだけど、それも、もうおしまい」

「すごい……」

聡は心底呆れたようだった。

「あの人、あの子供のような純真さで、よくこの世を渡っていけるなと思ってたんだが、そうか、しわよせをあんたが一身に引き受けてたんだな」

「そうなの」

ふたりして、妙にしみじみと和んでいるうちに、準備（あ、これは携帯袋に食糧や薬を、現地社員が詰めこんでくれたんだけど）が整い、私たちは出立することになった。

乗り物に用意してあったのは、どう見ても恐竜という恐ろしいイキモノで、ちゃんと二頭いたんだけど、馬にも満足に乗れない私は、聡の後ろにおさまるしか手がなかった。

最初、私はこのことを素直に喜んだのだけれど、後ろのほうがひどく揺れることに気づいて、ずいぶん痛い思いをした。

馬どころの揺れ方じゃないんだもの！　道もほとんど舗装されてなくて、恐竜が大きな石を踏んで体勢を崩すたびに、ぐらーりぐらり。ほんと、生きた気がしなかったわよ。

だから、辺りが暗くなり始めたころ、彼が恐竜を止めてくれたときは心底感謝してしまったのよ。

「今日はこれでおしまい？　嬉しいよお」

思わずばんざいしながらそう言った私を見て、聡が頭を抱えこんだ。

「あんた、危機感ってもんがないわけ？」

「だって私、年下の男って、男性として見ることできないんだもの」

私は四月生まれで今二十一歳。聡は七月生まれだそうで、現在二十歳なのよね。

「いや、そういう意味じゃなくて」

頭をかきながら聡はぶつぶつ言ってたけど、結局、仕方なさそうに携帯袋に手をのばした。

「まあいい。さっさと食べて寝なさい。見張りはおれがやるから」

「見張り？　なんで？　一緒に寝ればいいじゃない。睡眠不足はこたえるわよ」

言ったとたん、聡がのめった。どうしたのかしら。

「あんたね、ここは危険地帯なんだぞ。盗賊だって野獣だってゴロゴロいるんだ。肉食竜なんかに捕まってみろ、骨まできれいにたいらげられるんだぞ！　ったくもう」

へえ、肉食竜なんているのか。のほほんと考えて、ぎょっとする。

「ちょっと待ってよ。じゃあ、私たちが乗って来た、アレは？　まさか突然襲いかかってくるなんてことは……」

「歯を見りゃわかるだろ、あれは草食竜だって。それに飼いならしてあるから、間違っても人間を襲ったりしやしないよ」

うんざりした口調だった。

ふん。なにもそんな風に言わなくたっていいじゃない。そりゃあ私は頭良くないし、知識もないし、自覚も……やめよ。自己嫌悪にどっぷりつかりそう。

私は黙って携帯袋をあけると、乾燥肉を取り出して、無理やり、ひとかけら口の中に放りこんだ。

かたかったけどおいしかった。

「眠くなったら起こしてね、交替す……る……か……ら……」

言い終わらないうちに私は眠ってしまった。どんな状況でも不眠症になる心配はなさそうだなと、聡の笑い声が聞こえたような気がした。

夢だったのかもしれない。だってそのとき、一瞬見えた聡の瞳は、とても優しい色を浮かべていたから。年下だってことを忘れて、どきりとしてしまったから……。

3

「おい、起きろ。逃げるぞ」
「ん？　うん……」
「起きろと言っとるんだろうが！」
男の怒声は目覚ましには向いてないなあなんて、寝ぼけた頭で考えてたら、聡がいきなり実力行使に出た！
毛布がわりのマントをひっぺがしたのだ。
「何するのよ、このスケベ！」
力一杯ふりあげた右手は、聡の頬にヒットし、彼の左の頬にみごとな手形をつけてしまった。
「ったくあんたは……。恩を仇で返すような真似を……」
低く抑えられた聡の声は、やけに怒りだけが生々しく伝わってきて、おかげで私はきれいに

目が覚めた。
「あ。ごめん。もう交替の時間？」
「馬鹿！　逃げるんだよ。敵さんが近くにいる」
「ん」
本当は何がなんだかよくわかんないんだけど、これ以上何か言ったらかみつかれそうだったので、私は黙々と出発の用意をした。
でも、敵ってなんのことだろ？
だいたい、私の仕事ってのは、現世界に住む恋人同士の愛を成就させるべく、婚約指輪をエルマ＝スティという姫君に届ける、いわば愛のキューピッドなのよね。普通、敵なんていう存在があるとは思えないんだけどな。
それとも、この婚約指輪が目当てなのかしら。相当な値打ちものだってことは聞いてたけど、たかだか指輪ひとつのために、恋人を引き裂くような真似するなんて感心できないな。
「ほれ。逃げるぞ」
竜の背にまたがった聡が、私に手をさし出した。
「ん。早く逃げよ。ごたごたはきらいよ」
ずりずりと、彼の後ろにはい上がってそう言った私の背後で、数人の男の叫び声があがっ

た。きゃん、見つかっちまったよお！
「逃げたぞ！」
「追うんだ！」
異口同音の叫び。
冗談じゃないわ、捕まってたまるもんですか！　竜が走り出す。揺れがひどくて、私は思いっきり聡にしがみついた。
「喋るなよ、舌かむぞ！」
「わかった！」
どすどす、ばたばた。
竜の足音はものすごくて、敵さんたちの声もかすれがちになる。
怖いもの見たさに、私はそっと後ろを振り返った。
「すごい！　竜って足早いのね。人の姿がみるみる小さくなってく。わあ、すごいすごい」
と、そのとき！　ひゅん。
鼻先三十センチぐらいのとこを、何かが、すごい勢いで飛んで行ったような……。
「ちょ、ちょっと聡。あれってもしかして」
「まさか拳銃出してくるとは思わなかったな。まずいことになったな……」

ひえええ！

なんで私みたいな善良な小市民が、異世界に来たとたん、拳銃なんかで狙われなくちゃないの!?

不条理だわ。ひどい不条理よ！　だから圭介叔父さんは信用できないのよ！

「速度をあげるから、しっかりつかまってろ！」

返事がわりに、私はしがみつく手にさらに力をこめた。

不思議。こんなときなのに、なぜだろう、私安心してる。髪をなぶる風までも、心地よく感じてしまう。

意外と豪胆なのかもしれない。それとも、恐怖のあまり頭がパニックしてるとか……。それでもいいや。こんな、怖くて怖くて心地いい気分なんて、この世界にいる間だけのことなんだから。

満喫しなくちゃ損だわ。

そう思ったとき、胸の奥がちくりと痛んだ。

心臓を針で突かれたような痛み。でも、無視できないほどではない。

駄目よ、と理性が呟く。私は堅実な人生を歩くんだから。ダメよ、こんな危険な仕事に惹かれるなんて。

ぎゅっと唇をかみしめて。
そのとき、竜が不意にとまった。
「聡？」
「着いたぞ」
そこには、石造りの壁が視界の端までも広がっていた。城下町――まるで中世ヨーロッパのそれの再現だわ。
「サルジアの町。この町の中心にそびえ建つアール城に、エルマ姫がいる。婚約指輪さえ手渡せば、仕事は終わる。もう少しだ。頑張れよ」
「うん、うん！」
私は何度もうなずいた。
うなずきながら、湧き上がってくる喜びとは違う感情を必死にかみ潰した。
それはなんだか、寂しさによく似ていた。

4

「んー！」
ふかふかのソファーの上で、私は思いっきりのびをした。
聡は隣で煙草を吸っている。
「なんか、あっけなかったね」
「何が？」
「敵さん。拳銃まで出されたときは、本当にどうしようかと思ったけど、あれきりまったく襲ってこなかったもの。拍子ぬけしちゃった」
「喉元すぎれば、の見本だな、あんたは。あれだけきゃあきゃあ騒いでたくせに」
「……」
図星だったもので、私は何も言い返せない。
「だが、安心するのはまだ早いぞ」

煙を吐きながら聡が言った。
私は首を傾げた。
「なんで？　もうアール城に来たんだもん。心配ないでしょう？」
そう、ここはもう、防壁を張りめぐらした、アール城の内部なのだ。あと十分もすれば、私はエルマ姫に対面し、荷物である婚約指輪を手渡すことになるだろう。もう絶対に安心って思いが、私の中にあったものだから、聡の言葉はどうにも得心がいかなかった。
「あのな。やつら、拳銃使っただろ？」
「うん」
「ここの世界にも、姫の婚約者のシルク侯爵のいる世界にも、拳銃ってのはまだ存在してないんだ」
「え？」
存在してない？　じゃあ、あの人たちって山賊か何かじゃなかったの？　私はてっきりそうだとばかり……。
「じゃあ、あいつらはいったい何者なの？」
ずい、と思わず身をのり出した私の顔に、聡は煙を吐き出した。と、年下のくせに、なんてかわいくないやつなんだ！

「α宅配便の商売敵。この業界も競争が激しくてね。うちは一応最大手だから、あれこれ茶々が入ることも多いんだ」

「妨害工作？」

恐る恐る尋ねてみる。

「ご名答」

うわあ。聞かなきゃよかった。企業間の暗い深淵をのぞき見た気分よ。

「落ちこんだ？」

「どっぷり」

「そう気にすることもないさ。さっきはああ言ったけど、実際は十中八九、大丈夫だよ。危険はないさ」

「そう願いたいわ」

答えながら、私はひどく憂鬱な気分になった。

侍女に案内されて城内を歩きながら、私は終始感動しっぱなしだった。

うわあ、きれいだわ。廊下に敷き詰められた絨毯は吸いこまれそうな青。一定の距離をおいて飾られてある調度はみんな銀細工。

城内全体が青と銀で埋めつくされてるんだけど、それがしっとりとした調和を生み出してて、実に上品なの。

「きれいだなあ。カメラ持って来ればよかった」

「この城は別名銀の城と呼ばれてるからね」

隣を歩く聡が、呟くように教えてくれた。

「でも、この城が生み出した最高の芸術品は、やはりエルマ姫だな。銀の髪に青い瞳の、すさまじいまでの美人なんだ」

理由もなくむかっときた。

「麻里子さんより美人なわけ？」

「姉貴より数段上だね。あの姫が異次元世界へ出て行くってことは、この世界にとって、大いなる損失じゃないかとおれなんか思うもんな」

「あ、そうですか」

私は憎らしい思いでそう言うと、彼を追いこして先を歩き……え？

「危ない！」

聡の声を、耳もとで聞いた。どきんとする間もなく、顔面スレスレのところを銃弾が掠めた。

目が点になっちゃう。拍子抜けなんて言うんじゃなかった。聡がとっさに引き寄せてくれなかったら、私は昇天していたわ！

石柱の陰から、拳銃を持った男がふたり、現れた！

近づいて来るふたりに、聡は近くにあった銀の置き物や花びんを続けざまに投げつけた。

「侍女の方！　そいつを早く姫のもとへ！」

叫びざま、聡は懐からナイフを取り出して、私に狙いを定めていた男に投げた。

「こちらへ！」

侍女が走り出した。

でも、私は行かなかった。ううん、動けなかった。

「馬鹿！　何やってんだ。早く行けったら！」

「行けるわけないじゃない！　こんなとこにあなたひとりにして、自分だけ逃げられるわけないでしょう！」

駆け寄って、私はそう叫び返した。

「阿呆！　おまえが行かなきゃエルマ姫は一生シルク侯と結婚できないんだぞ。おれだって足手まといのために命すりへらしたくなんぞない。わかったら早く行け！」

「早くこちらへ！」

侍女が律儀に戻ってきて、私の手を強引に掴んで走り出す。
物がぶつかり、壊れる音、人と人が戦ってる音――それらがだんだん遠ざかっていく。遠ざかっていく、聡から。
「あなたの辛いお気持ちはわかります。恨まれても仕方ありません」
騒ぎの中から私を連れ出した侍女は、淡々と言葉を継いだ。
「でも、わたくしは姫さまのために、あの方が命をかけて貫こうとなされた願いをかなえてさしあげたいのです」
だけど、彼女の言葉を私は半分しか聞いていなかった。
責任。
それはなんて重いものだろう。
私がそれを偶然にも負ってしまったために、聡はあの場に残った。侍女は危険を承知で、あの場から私を連れ出した。
私が望みもしなかった、この指輪のために、何人もの人が危ない橋を渡ったんだ。そして、この指輪に、一生がかかってしまう人が、少なくともふたりはいるんだ。
エルマ姫とシルク侯。
それらすべての人のために、私は今、なすべきことをこそなさねばならないんだ。

恨みつらみは後回しにしなくっちゃ。

「エルマ姫に会わせてください」

私は侍女にそう言った。

「シルク侯からのこの荷物をお届したいのです」

一刻も早く。

そして聡を助けに行くの。

5 or 0'

「いやあ、あんなやつら、大したことないって。おれひとりで充分だったよ」
ベッドから起き上がれもしないくせに、聡がへらず口を叩いた。
ふん。何がひとりで充分だ、よ。
エルマ姫の命令で兵がさし向けられたとき、虫の息だったのはどこのだれよ。銃弾三発も受けて、次元間パトロールがもう少し遅かったら、本当に成仏してたってのに、心配してたってのに、聡ときたら、意識を取り戻したとたん、看護の女性くどき始めるんだもの。呆れてしまって、あいた口がふさがらないわよ、まったく。
「あんたの初仕事も無事に終わって、めでたしめでたしってとこだな」
「そう思うんなら、さっさと全快してちょうだい。元の世界に戻れないじゃないの」
つっけんどんにそう言ったとき、聡は傷ついた顔をして、そして拗ねた。
「あんたには、優しい気持ちってのがないのか？　仮にもおれはあんたを守って怪我をしたん

だぞ。こう、涙でもたたえてだな、ありがとう、ごめんなさいぐらい言えんのか」

馬鹿ったれ。

泣いたわよ。血だらけになって倒れてるあんたの体にすがりついて、わんわん泣いたわよ。だけど、それはあんたの意識がなくて、しかも死ぬかもしれないってときだったからできたんだ。意識が戻って、死ぬ心配のないやつに、そんなこと言えるもんですか。恥ずかしい。

「かわいくないなあ」

聡がぼやいた。

「どうせね」

「いや、助け出されたときは、泣き顔でもえらくかわいいと思ったんだが」

一瞬、顔から血の気が引いた。

「わんわん泣いて、本当にかわいかった。いつもあれぐらい素直ならいいのに」

聡は皮肉にくすっと笑って私を見た。

私は瞬時に顔がぼっと熱くなるのを感じた。

なんて人の悪いやつなんだ！　意識のないふりをして、他人の反応をうかがうなんて！

そうと知ってたら……私は絶対、泣いたりしなかったわ！

「いや、ほんとに――」

「くどい！」

一発ぐらいなぐってやろうかと、真剣に思ったんだけど、さすがに寝たきりの怪我人に暴力をふるってはと思いなおした。

「圭介さんに話してあげようかな。あの人、一子がちっとも心を開いてくれないって、悩んでたからなあ」

「冗談でしょう？　駄目よ、絶対に駄目！」

聡が、得たりとばかりに笑った。

私は、自ら墓穴を掘ってしまったのだ。

「じゃ、口止め料がほしいな」

「何を」

ふつふつとたぎる怒りを胸に、私は尋ねた。

「いや、大したことじゃないんだ」

聡はにっこりと笑った。

「もう一度泣いてみてくれないか。実はあのときあんたの顔、よく見えなかったもんで……」

彼が言い終えないうちに、私は右の拳をふり上げ、そうして、私は元の世界への帰還を、二週間自分の手でのばした。

あとがき

この本が発売される頃、世間は晩春を迎えているかと思いますが、皆様如何お過ごしでしょうか。

こんにちは、前田珠子です。

『聖石の使徒　狩人の覚悟』をお届けいたします。

今回の話は、珊瑚コンビの馴れ初め話『狩人の爪』の続編です。狩人の爪から二年――十六歳になった伽羅の身に生じた異変が原因で、まとまったかに見えたふたりにコンビ解消の危機が訪れる――という話の大筋は、実は『爪』を書いた時点ですでにありました。そう遠くない内に書くつもりではいたのですが、諸事情が重なり（最大の要因は作者の遅筆ぶりに拍車がかかったことですが）今回ようやく書くことができました……。

が。

申し訳ありません！　続いてしまいました！

続きはすぐには出せないのですが、必ずあと一冊で完結させますので、お待ちください……。

同時収録の『次元間宅配便騒動』は、コバルトノベル大賞の佳作をいただいたすぐあとに書いた正真正銘の私のデビュー作です。

最初に書き上げた話を初代担当さんに没宣言され、「どうすりゃいいのよーっ!?」と叫びながらネタを無理矢理絞り出して書き上げた記憶があります。自分自身を雑巾絞りしてネタを捻り出す感覚というものを、初めて味わった作品だったように思います（デビュー作からかい、という突っ込みはなしということでお願いします）。

内容に詳しく触れられないので、ここらで近況など。

初めて買ったクリスマスローズは根腐れさせて枯らしてしまった私ですが、諦めきれずに母と二人、せっせと苗や開花鉢を買い集め始めてかれこれ三年になります。その間に学習したことは、地植えが一番！　ということでした。半木陰で風通しの良い場所に、買ってきた苗や花の済んだ鉢物を植えたところ、今年は十株以上が色とりどりの花を咲かせてくれました。

ライムグリーンやクリームホワイト、濃い臙脂に薄紅色、他にも白のダブルなど、花の少ない冬の庭を彩ってくれるクリスマスローズは、正に『冬の貴婦人』でした。

しかも今年は、去年落ちた種が発芽までしてくれたのですから、楽しみは増える一方です。

しかし毎年新種の綺麗な花が増えて行きます……きっと今年も苗が出回る頃には新しい株を

買い求めることになるでしょう。

その一方、母とふたり「牡丹と芍薬もいろいろ揃えて咲かせたら綺麗よね」と話しているので、そちらの株も確実に増えるでしょう……『趣味の園芸』が手放せなくなる日も遠くない気がしてならない今日この頃です。

さて、そろそろ結びとまいりましょう。

イラストの山本鳥尾さまを始め関係各所の方々に今回も大変お世話になりました。この場を借りてお礼申し上げます。

次は『鬱金』の続きです。

それでは——。

またお会いできますように。

平成二十二年　春

前田　珠子

※この作品はフィクションです。実在の人物・団体・事件などにはいっさい関係ありません。

まえだ・たまこ

1965年10月15日、佐賀県生まれ。天秤座のB型。『眠り姫の目覚める朝』で1987年第9回コバルト・ノベル大賞佳作入選。コバルト文庫に『破妖の剣』シリーズ、『カル・ランシィの女王』シリーズ、『聖獣』シリーズ、『聖石の使徒』シリーズ、『天を支える者』シリーズ、『空の呪縛』シリーズ、『ジェスの契約』『トラブル・コンビネーション』『陽影の舞姫』『女神さまのお気の向くまま』『万象の杖』『月下廃園』など多数の作品がある。興味を覚えたことには積極的だが、そうでない場合、横のものを縦にするのも面倒くさがる両極端な性格の持ち主。趣味と実益を兼ねてアロマテラピーに手を出したものの、今ではすっかり実益のほうが大きくなり、趣味とは言いがたくなりつつある。次こそは優雅な趣味を持ちたいと身の程知らずにも思っている。



聖石の使徒
狩人の覚悟

COBALT-SERIES

2010年5月10日　第1刷発行

★定価はカバーに表示してあります

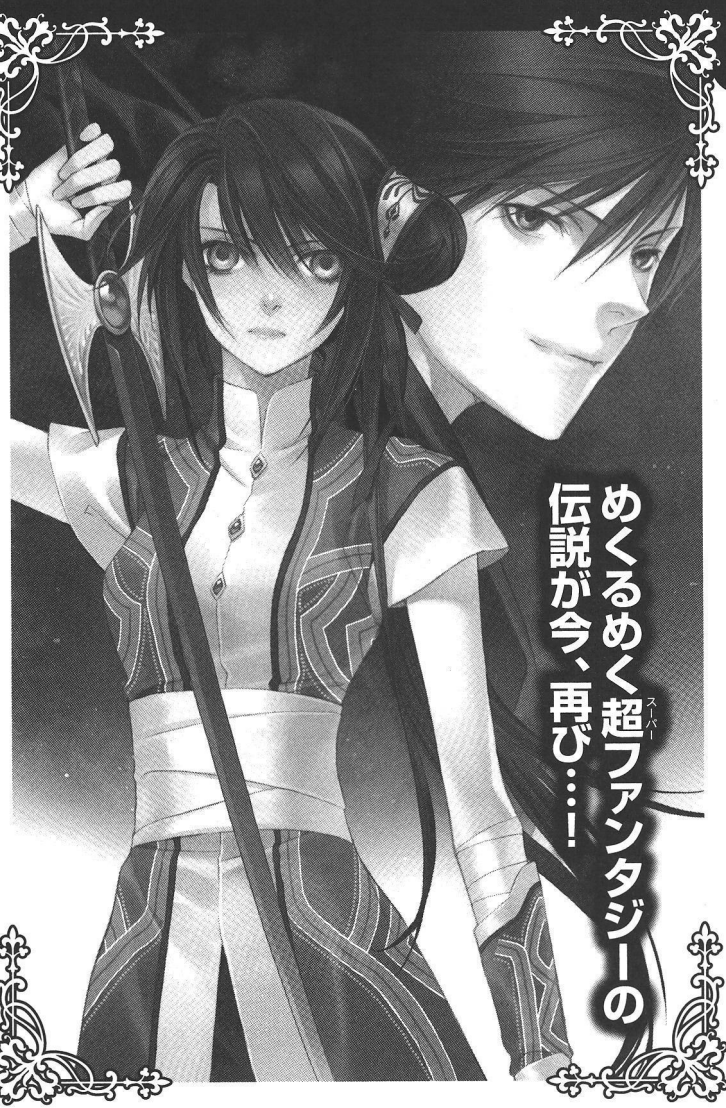
著者　前田珠子
発行者　太田富雄
発行所　株式会社集英社

〒101—8050
東京都千代田区一ツ橋2—5—10
(3230)6268(編集部)
電話　東京(3230)6393(販売部)
(3230)6080(読者係)

印刷所　大日本印刷株式会社

© TAMAKO MAEDA 2010　Printed in Japan
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替え致します。購入された書店名を明記して小社読者係宛にお送り下さい。
送料は小社負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したものについてはお取り替え出来ません。

ISBN978-4-08-601403-8 C0193


めくるめく超ファンタジーの
伝説が今、再び…！

好評発売中 コバルト文庫

破妖の剣

前田珠子

破妖刀に選ばれし少女よ…
愛と正義のために闘え！

イラスト／廈門　潤

紫紺の糸（前編）（後編）
翡翠の夢1～5
女妖の街 破妖の剣 外伝①
ささやきの行方 破妖の剣 外伝②
忘れえぬ夏 破妖の剣 外伝③
時の螺旋 破妖の剣 外伝④
魂が、引きよせる 破妖の剣 外伝⑤
呼ぶ声が聞こえる 破妖の剣 外伝⑥

イラスト／小島　榊

漆黒の魔性
白焔の罠
柘榴の影
鬱金の暁闇1～5

新カバで登場!!


前田珠子
イラスト／山本鳥尾
聖石の使徒
シリーズ
選ばれし子供たちが、世界を守る――!!
其は焔をまとう者
其は力を放つ者
其は天秤をかざす者Ⅰ・Ⅱ
其は水に遊ぶ者Ⅰ・Ⅱ
揺籃の瞳
蒼の組木箱
狩人の爪
コバルト文庫
好評発売中

9784086014038

ISBN978-4-08-601403-8

C0193 ¥467E

1920193004670

定価 本体467円＋税



コバルト文庫

男でもなく女でもない。性が未分化だった伽羅が女になった。「女になったら一緒に仕事はしない」とセイタマールが宣言していたため、ふたりの関係はぎくしゃくし始め、ついにコンビも解消!?　しかし、『玉響』に魅せられたある男が起こした事件がふたりを追いつめて…。「わたしはあなたがいい！　命を預けるのは、あなたでなければいやです！」大人気シリーズお師匠様編、怒濤の展開に！